

お仙。

あ、しばらく。折好くお前さまがお出でなされて無事に納まりましたは重疊、あらためてお禮を申します。して、おまへ様はお父上と御一緒でありながら、今までどこにおいでなされました。

幸村。

城外の草原に休息いたして居りました。(意味ありげに笑ふ。)父上もやがてお戻りであらうと存じて……。

お仙。

(おなじく微笑む。)それにつけても呉々もおたのみ申すはお父上のこと。真田安房守昌幸殿といへば、關東にもきこえたお人、弓矢を取つては今もあつばれの大將なれど、やはりお年は争はれぬ。(しみじみとして。)人間の年寄るといふは悲しいもの、おからだはお健かでも、お心は昔でない。まして今は大事の時節、おまへ様がおそばに附いてゐて、口々の固め、人数の手配り、かならず御油断のないやうに願ひますぞ。これ、源三郎も内記も、あらためて叔父様に御會釋しや。

源三郎。  
内記。

はあ。(ふたりは幸村のまへに来る。)叔父上様。唯今はありがたうござりました。

内記。

ようお越しなされました。

幸村。

いや、御丁寧なことぢや。お父上はしばらく戻られまい。おとなしう留守をせぬばなりませぬぞ。

源三郎。  
内記。

はあ。

では、伊豆守どのの内府様のおん供して、すぐに上方へ出發でござりませうか。

幸村。

兄上が日ごろの御氣性、わが家へは戻らずに、おそらく真直に上らるゝでござらう。東海道ならば格別、もし北陸を上られたら……。 (お仙の方と顔を見あはせる。) いや、これも是非がござらぬ。兄が強いが、弟が強いが、腕くらべをして見ませうわ。

お仙。

勿論、勝負は時の運、未然を見ぬくわけには参りませぬが、萬一大阪方の運つたなく、石田、小西の一黨がほろび盡す時節がござりませうとも、關東には伊豆守があると思召せ。軍功にかへても、この城に換へても、お父上や弟御の御安泰を屹と取計らうでござりませうぞ。

幸村。

おこゝろさし過分でござる。併しおたがひにたのみ合うては、思ひ切つたる勝負もなるまい。それは先づそれとして、唯今では大阪方、關東方、このまゝにお別れ申すぞ。

お仙。

失禮御めん下さりませ。

(幸村ゆさかれば、源三郎と内記はその前に来る。)

源三郎。

内記。

幸村。

おちい様ばかりか、叔父様までがこのまゝお歸りでございますか。なぜ泊つてはおいでなされませぬ。

はて、今夜は泊まれぬ。いづれ又出直して来るとせうぞ。かうと知つたらそち達に何か土産でも持参せうものを……。おゝ、よいものがある。あれを遣らう。

(幸村は家來に指圖して、くもりたる狐をおろさせ、その尾をつかんで二人のまへに出す。)

幸村。

お仙。

幸村。

お仙。

源三郎。

内記。

幸村。

どうぢや。これは幸村が土産のしるしぢや。

おゝ、見事な獲物。どこでお捕りなされました。

城外の草原で……。短筒を出して見せる。撃ち試しの殺生をいたしました。

それは短筒でございますな。

(のぞく。)小さい鐵砲でございますか。

それもわたくしに下さりませ。

いや、これは遣られぬ。大事のものぢや。

内記。

お仙。

源三郎。

内記。

幸村。

でも、わたくしに……。はて、行儀のわるいこと……。狐を指さす。をぢ様のお土産ぢや。よくお禮を申しませうぞ。

ありがたうござりました。

この鐵砲も幸村の形見としてそち達にゆづる時節がないとも限らぬ。いや、先刻より餘ほどの暇を費して、夜もだん／＼に更けてまゐつた。(空を仰ぐ。)

おゝ、いつの間にか小雨がはら／＼と降つてまゐりました。

秋の習、又ふり出したと見ゆる。して、雨具の御用意は……。

(家來に持たせた蓑笠を指さす。)あの通りでござる。では、御免。

お父上にもよく／＼御詫を……。

承知いたしました。

(幸村は會釋して家來を引き連れ、向うに立去る。お仙の方はあと見送る。門内より家老高平善太

夫は武裝したる家來大勢を連れて出づ。)

善太夫。

先刻からお案じ申して居りましたが、どなたも無事にお引取りでござりましたな。

お仙。

おゝ、善太夫。お父上も左衛門佐どのも皆お引取りなされた。これが餘人ともあることか、一人は舅御、ひとりはお弟御、道中に行き疲れて一夜のやどりを頼むといふを、情なく追ひかへすも家の爲、夫の爲ぢや。

善太夫。

御心中お察し申上げます。

お仙。

萬一今夜のことに就て、殿のお咎めがあらうとも、おまへ方に迷惑はかけませぬ。わたしが身に引受けて屹と申開きをいたしませう。

善太夫。

はあ。

お仙。

親子兄弟でも敵味方となる世の中、かへすくも油断はならぬ。侍どもは交代で大手搦手を嚴重に見廻りませうぞ。

家來一同。

はあ。

(お仙の方は薙刀を持ちて行きかゝる。うすく雨の音。源三郎と内記は狐をかへあげる。)

内記。

この狐は大きいなう。

お鈴。

大かた親狐でござりませう。

源三郎。

子狐は今ごろ泣いてゐるであらう。

お仙。

ほんにそれは親狐……。向うを見て。その行末が……。いや、方々のゆく手は遠い。今宵は強く降らねばよいが。

(お仙の方は空を見る。雨の音。)

—幕—

浪華の春雨

新刊

181

大正三年二月作。

大正四年一月。本郷座初演。

初演當時の主なる役割——おその（市川松島）六三郎（中村又五郎）庄藏（市川八百藏、後の中車）赤格子九郎右衛門（市川左團次）など。

**登場人物**——赤格子九郎右衛門。大工の親方庄藏。その弟子六三郎。丁稚三吉。福島の遊女お園。ほかに捕手。會所の使。駕夫など。

大阪大寶寺町。大工庄藏の家。二重屋體の上のかたには三尺の佛壇。その下は押入。ついで奥に出入りの障子二枚。その下のかたは壁なり。軒には建前に用ゐたる七五三の柱五六本をかけた。庭のかみのかたには木納屋ありて、奥には材木を積み、入口にも材木を立てかけ、こゝにて切組などするとおぼしく、納屋の前には荒筵をしき、あたりには鉋屑など散亂せり。納屋の傍には一本のさくら白く咲けり。下のかたには格子戸あり。家の外には東横堀の川筋遠くみゆ。寛延三年（今より百四十餘年前）三月十八日の午後。

（この一幕はすべて竹本の淨瑠璃を用ゆること。）

♪ くれたなを栽えし園生にあらねども、お園が色は隠れなき、勤め盛り戀さかり、春も盛りの彌生の日、そよ吹く風も南から、芝居を出でし戻鴉籠。

（福島屋の拍妓お園、廿二歳の遊女、しげの踊りのすがたにて駕籠に乗りて出づ。）

駕夫甲、もし、御免くださりませ。

三吉、(木納屋より出づ。)あゝ、あゝ。

駕夫甲、大工の親方庄藏どのはこちらでござるか。

三吉、おゝ、さうぢや、して、何處からござつたのぢや。

(駕夫は駕籠をおろす。お園は駕籠より出づ。)

お園、(小聲で。)そんなら六三郎といふお人がゐる筈。新屋敷から來たと云うて、ちよつと呼び出して下さんせ。

三吉、(不思議さうにお園をみる。)おゝ、六三どのならそこにゐる。呼んであげう。六三どの、六三殿。

お園、これ、靜にたう。

(三吉うなづきて納屋の方へゆく。)

お園、では、駕籠の衆。わたしはこゝの家に些と用がござんす。お前方はもうこゝから……。

駕夫乙、戻つてもようござるか。

(銀を遣る。)

お園、わたしがこゝへ寄つたことは、かならず誰にも沙汰なしに、頼みますぞえ。(紙につゝみた)

ありがたうござります。(二人は空駕籠をかつぎて去る。)

(納屋の内より大工六三郎、十九歳、手斧を持ち出て出づ。)

六三郎、おゝ、お園か。

お園、六三さん、這入つても大事ござんせぬかえ。

六三郎、あ、待ちや。(三吉に。)これ、三吉。おまへは仕事をしまうたら風呂に行くと云うてゐた。仕事はもう止めにして、早う風呂へ行つて來や。

三吉、いや、職人が晝間から風呂に行たら、親方に叱らるゝは知れたことぢや。

六三郎、晝と云うても、もう七つ下りぢや。風呂へ行ても大事ない。もし叱られたら私があやまつて遣るほどに早う行きや、行きや。はて、素直に行くものぢやと云ふに……。

(淨)追ひ出さんと氣をあせる。お園も思案のふところから、紙とり出して細銀を、つゝむ間さへ悶しく。

お園、これ、丁稚どの。兄弟子の云ふことは何でもおとなしう肯くものぢや。お前になんぞ土産

を遣りたいが、今は芝居のもどり道。ほかに持合はせた物もなければ、これで好きなものを買うてくだされ。な、わかつたら早う、早う。はて、おまへも粹にならしやんせ。

淨 粹も不粹も今時は、慾が伴ふ世なりけり。  
（お園は三吉の肩をたたくて、かた手で拜み眞似をする。三吉は紙づつみを明けて莞爾しつゝ懐に収める。）

六三郎。こいつ、するい奴め。さあ、この上は遊つてゐることもあるまい。早う行きや、行きや、えい、まだか。

淨 腹立ちまぎれに振りあぐる、手斧の下を掻いくぐり。

（六三郎はありあふ手斧を振りあげるを、お園は止める。）

三吉。はて、叱らしやんすな。わしもこれから……（腰の手拭を取つてみせる。）濡れにゆくのぢや。年には優せた小丁稚が、口合まじりに逃げてゆく。

（三吉は表の方へ去る。二人はあとを見送る。）

お園。ほんに子供とて油断がならぬ。ふたりの様子を覺つたさうな。丁稚なればこそよけれ、もし親方さんにも覺られたら何とせう。えい、まよよ。どうでこゝまで来たからは、もし

六三さん、わたしは内へ上るぞえ、（縁に腰をかける。）

六三郎。はて、待ちや、待ちや。もしやこゝへ親方が……

お園。ことし十九といふ若い男が、なぜそのやうに氣が弱い。

（お園はじれて駆け來り、六三郎の手をとりにて、無理に内へ引上げる。）

お園。親方ばかりが怖ろしうて、わたしがおそろしいとは思はぬか。親方に叱られても、多寡が勘當で事は済む。わたしに心から恨まれたら、どうなることぢやと思はんす。

淨 〽ふたつも三つも年上の女子に深く思はれたが、おまへの因果とあきらめて、いかなことでもあいくと、素直に肯いてゐやしやんせ。

お園。もしもわやくを云ふならば、灸据ゑるは未なこと。

淨 〽わたしの此手がある限り、打つてたゞいて、抓つて突いて、屹と仕置をせにやならぬ。

お園。そのとき泣いても堪忍せぬぞえ。

淨 〽癡話も口説も年下の、弟を叱ることくなり。

六三郎。そのやうに叱つて給るな。幼いときに親に捨てられ、十歳の年からけふが日まで、こゝの親方の御世話を受けた、御恩を仇に思はれうか。來年でなうては年季もまだ明けぬ丁稚あ

がりの身の上で、遊女狂ひなどすることが、もし親方のお耳に入らば、なんと云譯が出来ようぞ。かういふ中もひよつと誰かに見付けられはせまいかと、わしは胸がどきどきする。(左右を見る)して、そなたは何うして來やつた。

お園。

どうして來たとは知れたこと。このごろは半月ほども打絶えてたよりも聞かねば、どうしたことかと氣も濟まず、けふは客衆に連れられて、南の芝居見物に行つたれど、舞臺を観るのも上の空、氣合がわるいと嘘云うて、中途から芝居をぬけ出し、歸り途に竊とたづねて來ました。わたしとても此のやうなことが旦那殿にきこえたら、屹と叱らるゝは知れてある。あぶない棧橋を渡るはお互ひのこと。苦しいなかの樂みとはほんに此事でござんせうか。

淨 話なかばにあたふたと、駈け戻る三吉は門口から。

(下のかたより三吉走り出づ。)

三吉。

これ、これ、六三どの。うか／＼してはゐられぬぞ。親方さんが今こゝへ戻つて來るぞや。

六三郎。

なに、親方が戻つて來ると……。

三吉。

今そこの辻でゆき逢うた。三吉どこへ行くと問はしやりますので、風呂へまゐりますと有

體に答へたら、案の通り叱られた。

お園。

では、ほんたうに親方さんが……。

六三郎。

今こゝへ戻つて來るといふ。こりや何うしたらよからうぞ。

三吉。

(表を見る。)あれ、あれ、さう云ふうちに既うそこへ……。

淨 〽やれ情なや何とせん、表へは出られず、奥へは猶ゆかれず、ふたりはうろ／＼起ちつ居つ、うろたへ廻つて木納屋の奥に、お園をやう／＼押隠す。

(二人はうろ／＼して庭に降り立ち、六三郎はあわて、お園を納屋の奥に押隠す。このあひだに親方庄藏、四十餘歳、下のかたより出で來り、格子をあけて内に入る。)

淨 〽親方は分別者、取亂したるこの體を、見て見ぬふりで打通る。六三郎は手持なく。

六三郎。

お内にござると思つておましたに、いつの間どこへお出でなされたやら……。神詣か佛

參か、または芝居の御見物か。先づ／＼お歸りなされませ。

淨 〽挨拶さへも四度路なる。親方は苦笑ひ。

庄藏。

さつき町の會所から呼びに來たので、ついそこまで行つたところ、思ひのほか話長うなつて、小半時も暇を潰した。おれが腕でそのひまに鐵槌持つたら、銀一匁は叩き出さうも





六三郎。りもこつちの巧みを見て見ぬふりの鷹揚さ、わたしも感心してゐたぞえ。まあ、そのやうな仇口はあとにして、かう見附かつたからは長居はならぬ。早う戻つてくれ。頼む、たのむ。

お園。ぢやと云うて、この姿でひとり歩きも出来まい。お前そこまで送つて来て下さんせぬか。六三郎。最前も云うた通り、丁稚あがりの六三郎ぢや。女郎と手をひいて、うかく往來が出来ようか。そのやうな無理云はずと、早う戻つてくれ。

お園。戻れといふなら戻りもせうが……。して、お前、いつ逢ひに来て下さんす。六三郎。今夜と云うては出にくい……。お、あすの晩には屹と逢はう。

お園。きつと来て下さんすか。

淨。なごり惜しさに後髪、ひくれて外もほの暗き、門にたゝすむ九郎右衛門。

(赤格子九郎右衛門、三十八九歳、旅姿にて出づ。)

九郎右。(内をうかゞふ。)御免ください。

淨。二人ははつと又びつくり、狩場の雉子起ちかねて、あわてゝ元の草がくれ。

(二人はうろたへて、お園は再び納屋にかくれ入る。)

六三郎。(門に来る。)どなたでござりまする。

九郎右。さういふこなたは六三郎殿ではござらぬか。

六三郎。はい。

淨。すつと入つて其手を取り。

(九郎右衛門は内に入りて、六三郎の手をとる。六三郎おどろく。)

親は無くとも子は育つと、世のことわざに嘘はない。よう健かに生ひ立つたなう。

淨。仔細知らねば薄氣味わるく。

六三郎。して、お前はどなたで……。わたくしになんの御用。

九郎右。親子がわかれて十一年、途中で行き逢うてもそれとは知れまい。まして折柄のゆふ闇に、面體しかと判らずとも、九歳の年まで聞きなれた親の聲音は、耳の底にも残つてゐる筈。今さら名乗るも面目なけれど、名乗らでは済まぬ父の九郎右衛門、わが子の安否をたづねに来た。

六三郎。え、そんならおまへが父様か。

淨。おなつかしやと取繕る、血筋のまことは千行の涙。

浪華の春雨

六三郎。

(この中、ひとりの捕手は門に來りて内を窺ひ、うなづきて去る。)

九郎右。

浄 〽つきぬ親子の縁先に、九郎右衛門は腰をすゑ、あたりを憚る聲をひそめ。

膽太く生れたが身の仇、十露盤はじく眞面目の商賣もどかしく、堂島の米商ひにぬれ手で粟の目算はづれ、女房を捨て子をすて、家出したは十一年の昔。四國西國の果までさまよひ歩きしが、生れ故郷はなつかし、わが子には逢ひたし、この頃ひそかに大阪に上つて、色々に手をまはし尋ぬる處、せがれは大工の親方庄藏どのに拾はれて無事に奉公してゐるとの噂。聞いて心は飛び立てども、おもてむきに名乗つて來るも面目なく、晝よりこのあたりを徘徊して、そなたの出入りを窺ふうちに、日も暮れたり、そこらに人も無し、今この時と聲をかけて、初めて親子がめぐり合ふ。これも盡きせぬ縁でがな。よくも達者でゐてくれた。

浄 〽六三郎は嬉しさと、また悲しさも取りまぜて。

六三郎。

お前もよう生きてゐてくださった。お前が家出した明る年。

浄 〽母様は氣病で死なしやれた。わたしは稚兒途方にくれて、

六三郎。

父様戀しと明暮れに、泣いてばつかり居りましたを、こゝの親方に拾はれて、十年の年季ももう一年。

六三郎。

浄 〽これ見てくだされ前髪も、去年の春に剃りました。

お禮奉公すましたら、裏家住みでも世帯を持つ筈。その時までには父様の居所がどうぞ知りたいたいと、祈らぬ日とはござりませぬ。かうしてめぐりあふからは。

九郎右。

浄 〽どこへも行つて下さるなど、甘えるやうに掻き口説く。

親甲斐もない親を慕うて、それほどまでに思うてくるゝか。さりとはいよいよ面目ない。したが、まあ聞いてくれ。おれも今は唐人商賣……とばかりでは判るまいが、長崎の果までも船を乗り出して、唐人船と商賣するのぢや。こちらからも代物を積んでゆけば、あちらからも代物を積んでくる。一船毎に虎の皮やら珊瑚珠やら山のやうに受取つて來て、儲けは十倍二十倍、いや面白いこと。これが九年十年續かうならば、おれも日本で屈指の大福長者にならうも知れぬ。はて、びつくりするな。これほどの膽玉がなくて、今の世の中が渡れようか。はゝゝゝ。

浄 〽六三郎は夢心地、たゞ安閑と聽きわたる。父はいよいよ機嫌よく。

九郎右。

ぢやに因つて、そなたを迎ひに來た。鑿と槌を持つて魂かぎり働いても、多寡の知れた今の商賣、今日かぎりさらりと止めて、おれと一緒に博多へ下れば、立派な大家の若旦那、なんと夢のやうな出世であらうが……。先づ親方に逢うてこれまでの禮を述べ、ひまを貰ふ掛合もせにやなるまい。

淨 案内せよと云ふうちに、始終をうかゞふ親方は行燈片手に立出でて。

(九郎右衛門は草鞋をぬぐ。奥より庄藏は行燈をさげて出づ。)

庄藏。

どこのお人か知らねども、正直者の六三郎によい智慧を付けてくださった。先づお禮から云ひまする。

六三郎。

庄藏。

おゝ、親方様。そんなら今の逐一を……。聞いたればこそ出て來たのぢや。得體の知れぬ旅の人を、誰に斷つて内へ入れた。早う逐ひ出してしまはぬか。

淨 苦り切つたる顔色に、こなたも少しくむつとして。

九郎右。

これは親方、はじめてお目にかゝります。われ等はこの六三めが實の親、久振りで逢ひに來た者、譯もたゞさず逐ひ返せとは……。

庄藏。

九郎右。

庄藏。

庄藏。

庄藏。

庄藏。

庄藏。

庄藏。

庄藏。

庄藏。

庄藏。

庄藏。

庄藏。

庄藏。

庄藏。

庄藏。

庄藏。

庄藏。

庄藏。

その六三めに逢ひに來たのが氣に入らぬ。おのれは我子が憎うてこゝへ來たのか。え。おのれに見せるものがある。淨 ふところより一枚の繪姿とり出し。やい、日本で指折の大福長者とかいふお人。この繪姿を鏡として、おのれが生面を寫してみよ。赤格子九郎右衛門といふ海賊の張本、長崎奉行の目をのがれて、この大阪にまぎれ込む。見つけ次第に訴人したら、銀廿枚の御褒美をくださるゝと、繪姿までも添へてきびしい御詮議を、知らぬは迂濶か大膽か。兒飼から仕立上げて足かけ十年。わが子のやうにも思ふ大事の弟子にそのやうな親が持たされうか。海賊の子と呼ばされうか。親の恥は子の恥、弟子の恥は親方の恥、我子に連坐の罪が着せたいか。親方の面に泥が塗りたいか。恥を知らば早く歸れ。淨 疊たゝいて罵れば、九郎右衛門びくともせず。いかに親方推量の通り、われ等は赤格子九郎右衛門、海賊といふ名は負ふたれど、天道も佛神も照覽あれ、人の物びたひらなか目をかけた覺えごさらぬ。國法を破つて唐人船と

あきなひした、それが重き罪科ときはまつて、詮議の山に薄々聞いたれど、博多の住居は假のやど、われ等がまことの住家とするは、日本の土よりも百千倍廣き海の上、東より追へば西にかくれ、北より向へばみなみに走る。長崎奉行などの手ではいかな、いかな。彼等がいかに立ち騒いでも、所詮及ばぬこと、多寡をくゝつて、今まで安穩に日を送りしが、わが子の愛に心ひかされ、うか／＼と故郷へ立戻りしは、九郎右衛門が運のつくる時節、水の上ならばいかなる網をも破つて逃ぐる法もあれ、陸の上では鯨や鮫も蟲けらに劣る。八方の出口出口を取りまかれ、繪姿までも添へて詮議に逢うては、のがるゝ隙もござるまい。唯、聞けば、九郎右衛門を訴人したるものには、銀廿枚の御褒美を下さるゝとや。とても助からぬ網の魚ならば、他人の獲物とならうよりも、親方の手料理に逢ふがせめても恩報じ、大事の命を進上申す。いざ繩うつて引立てめされ。

庄藏。

淨 腕をまはして眼を瞑づる。  
え、聞き分けのない男よな。褒美の金がほしければ、そつちで望むまでもなく、こつちで疾くに訴人する。欲に眼が眩れわが弟子の、親に繩かくる庄藏と思ふか。見損じられたが口惜い。赤格子九郎右衛門は六三郎の親といふこと、上にも已に御存じなればこそ、けふ

も町會所へよび出されて御詮議受け、この繪姿までも渡された。そこへうか／＼たづねて来るは、穴を這ひ出る狐も同様、わが子といふ餌に引かされて、良にかゝるとは氣が付かぬか。早く歸れと云ふはこゝのこと。生國の大阪で召捕られては、六三郎の恥になる。わが子に後指さゝすが親の慈悲か。わが子を日かけ者にするが親のなさげか。こゝの道理を合點したら、天竺南蠻蝦夷松前、遠いところへ勝手にゆけ。

九郎右。

淨 齒ぎしみしてぞ叱りける。九郎右衛門はつと手を支へ。  
あ、恐れ入つたる親方の御意見。この大阪で召捕られては、親方の恥、わが子の恥、そこ心が付かさざりし不調法、どのやうに叱られても一言ござらぬ。なるほどこゝは劍の中、片時も早うお暇申す。六三も堅固で、親方大事に奉公せい。もう此世では逢はぬぞよ。  
淨 暇乞さへそこ／＼に、ゆくへも知れぬ旅衣、うすき契りの親と子を、むすぶ由なき片

絲の、つながるお圍も伸びあがれど、顔は見られぬ夕闇に、まぎれ行くこそ危けれ。  
九郎右衛門は親方に挨拶して草鞋をはき、出でゆかんとするを、六三郎は取りすがる。お圍も納屋より忍びいでて窺ふ。九郎右衛門は六三郎をつきのけて、足早に向うへ去る。下のかたより捕手三人うかいひ出で、顔を見あはせて首肯き合ひ、すぐにそのあとを追つて行く。

六三郎。

浄門に見送る六三郎、すはや大事とどろく胸。

お、今のはたしかに捕手の衆、父様のあとを追うて行つたは……。

庄藏。

なに、捕手があとを追うて行つたと……。え、心づくしの甲斐もなく、この大阪でやみやみと繩にかゝるか。

便。

浄親方も心ならず、手に汗握つて立つところへ、會所の使走せ來り。

便。

もし、庄藏どの。會所から急用ぢや。早う、早う。

庄藏。

浄云ひすてこそ歸りけれ。

む、又もや會所から呼びに來たは、九郎右衛門が詮議にきはまつた。なにを問はれても知らぬと云ふまでのこと。骨が舍利になるまでも、この庄藏が引受けた。なう、六三。親に若しものことあつても、かならず力を落すまいぞ。科人の子と指さゝれて、大阪の土地にも住み辛くば、おれが添手紙して江戸の親方衆にたのんで遣る。大阪ばかりに日は照るまい。世間を狭く思ふなよ。はて、なにをめる。弱い奴め。

浄力をつくれど力なき、可哀の弟子の泣顔を、見返り見かへり出でてゆく。

(庄藏は下のかたに去る。時の鐘さびしくきこゆ。)

お園。

浄陰るならひの春の日も、暮れて散りゆく花の雨、音もきこえず降るなかに、むざんやな六三郎、親の安否と身の行末、おもひなやみてしよんぼりと、濡るゝがまゝにたゝすめり。お園も泣くゝ走り出で。

様子は残らず聞きました。たとひ名乗合はずとも、わたしに取つては大事の舅御様。どうか御無事に落したいと蔭ながら祈つてゐたものを、かうなつては心許ない。とは云ふものの、今更あせつても狂うても及ばぬこと。お前はふだんから氣の弱い人、かならずよく思はんすな。

六三郎。

なんぼ心を強う持つても、十一年ぶりでめぐり逢ふた、父様が今にも召捕られ。

六三郎。

浄海賊の張本とうたはれて、大阪中を引きまはされ。はりつけか獄門のお仕置を、子がのめくゝと見てゐられうか。人の口には戸が立てられず、あれ見よ大工の六三めは、引廻しの子ぢや、ぬすびとの胤ぢやと、ゆく先々で指さゝれ、大事の親方にも恥かゝせ。

六三郎。

浄出入先の仕事場や、仲間同士の寄合にも、どの面さげて出られうぞ。俺やもう生きてゐる氣はない。

お園。

浄(すず) 推量(すしりやう)せよと泣(な)きければ、お園(その)も道理(だうり)と思(おも)へども、わざと涙(なみだ)を押隠(おしかく)し、  
それ、それが氣(き)の弱(よわ)いといふものぢや。親方(おやかた)さんの云(い)はんした通り、大阪(おさか)ばかりに日(ひ)は照(て)るまい。もしもこゝの土地(とち)に居(ゐ)づらくば、ほとぼりの消(き)えるまで二年(にん)三年(さん)、遠(とほ)い他國(たこく)へ足(あ)ぬきして、時節(ときせつ)を待つてゐなさんせ。人の噂(うわさ)も七十五日(しちじふご)日(にち)、案(あん)じたものではござんせぬ。これ、泣(な)いてばかりゐずと男(をとこ)らしう。

六三郎。

浄(すず) 分別(ぶんべつ)して見(み)やしやんせと、割(わ)ツつ口説(くちごと)いつ有(あ)むれば、男(をとこ)もやうく合點(あてん)して。  
なるほど、世間(よけん)をせまく思(おも)ふなど、親方(おやかた)さんも云(い)はしやれた。父様(ちちさま)がいよいよお召捕(めしと)と聞(き)いたらば、添手紙(そでてがみ)を貰(もら)うて江戸(えど)へ出て、二年(にん)三年(さん)辛抱(しんぱう)せうか。生(う)まれてから今日(けふ)日まで、大阪(おさか)のそとへは一足(ひとあし)も出(で)たことのない六三郎(ろくざんらう)、他國(たこく)の奉公(ほうこう)は辛(辛い)であらうが……。

お園。

はて、そこが辛抱(しんぱう)、お前(まへ)ももう子供(こども)では無(な)し、石(いし)にくひ付(つ)いても我慢(がまん)せねば、男(をとこ)一匹(ひとひき)とは云(い)はれまい。丁度(ちやうど)おまへが戻る頃(ころ)には、わたしの年季(ねんき)も済(す)んでゐる筈(はず)。どんな狭(せま)い裏家(うらや)でも、ふたりが一緒(いっしょ)に陸(りく)まじう。

六三郎。

お、その時節(ときせつ)まで待つてゐてたもるか。  
三年(さん)はおろか、五年(ご)年(ねん)が十年(じゅう)でも、きつと待つてゐるほどに、江戸(えど)の若い女子(やわいこ)になじみが出(で)

お園。

來(き)て、わたしを忘(わす)れてくださすな。  
浄(すず) かたみに袖(そで)を絞(しぼ)りつゝ、末(すえ)の松山末(まつやますえ)かけて、ちぎる縁(えだ)ぞ淺(あ)からぬ。

お園。

これでわたしも少しは落着(おちつき)いた。もうさつきから日(ひ)が暮(く)れたに、いつまでもこゝに長居(ながい)はならぬ。  
六三郎(ろくざんらう) ほんにさうぢや。戻(もど)りが遅(おそ)うなつては、家(うち)の首尾(しゆび)も悪(わる)からう。お、生憎(おあいにく)に雨(あめ)がふつて來(き)た。傘(かさ)を貸(か)してやるほどに、まあ待つてゐや。

六三郎。

浄(すず) 行く後(あと)かけ見送(みおく)つて。  
(六三郎(ろくざんらう)は奥(おく)に入る。)

お園。

江戸(えど)へゆけと勸(すす)めては見たものゝ、人(ひと)にもよれ六三(ろくざん)さんは、日(ひ)ごろから孱弱(ひよわ)いからだ、殊(こと)に氣(き)の弱(よわ)い生れつき、西(にし)もひがしも知らぬ他國(たこく)へ出(で)て、右(みぎ)も左(ひだり)も他人(たにん)の中(なか)。

お園。

浄(すず) 鳥(とり)でさへ旅鴉(たびがらす)はいぢめられ、慘(あい)らしうてならぬもの。  
あの人(ひと)も定(さだ)めて明(あ)けくれに、他國(たこく)者(もの)よと侮(あは)れ、たんと苦勞(くろう)をするであらう。それを知(し)りつゝ出(だ)してやるは、赤兒(あかご)を川(か)へ突(つ)き落(お)すやうなもの。と云(い)うて、ほかには法(はふ)も無(な)し。  
浄(すず) あゝ何(なん)とせん何(なん)となる、鳴(な)るは太鼓(たいこ)のおと高く、出口(でぐち)出口(でぐち)を塞(ふさ)がれて、逃場(にぎは)に迷(まよ)ふ九

郎右衛門、あとを慕うて捕手の人數、御用御用と取りまくを、ぬけつ潛りつ必死の働

き、突退け跳ねのけ、蹴倒して、姿は見えずなりにけり。  
(太鼓の音。向ふより九郎右衛門逃げ来るを、捕手は追ひ來りて、家のそとにて圍ひ、九郎右衛門は再び下の方へ逃げゆくを、捕手はついで追うてゆく。お園は内より窺ふ。太鼓の音しばらく止む。六三郎は番傘を持ちて奥より出づ。)

六三郎。

これ、これ、今の物音は……。

お園。

夜目に確とは見えねども、父様が追はれて來たやうな。

六三郎。

今の太鼓は出口出口を固めの合圖、今頃までこゝらに迷うてゐては、所詮のがるゝ目あてはあるまい。なさけなや父様の御運も盡きたか。

お園。

はて、もうそれは云はしやんすな。では、わたしは行きますぞえ。親方さんとも相談して、いよゝ江戸へ行くときまつたら、吃と暇乞ひに顔みせて下さんせ。よいかえ。

淨身みのよしあしは白張しろはりの、傘かさを持つ手ても顛ふらはれて、ひらく轆轤ろくろの弾はじき金かね、かたき誓ちかもろす紙かみの、破やぶれて骨ほねとなる太鼓たいこ、辻つじ々々にて打ち立たつる。

(六三郎は傘をひらき、お園と相傘にて門まで送り出す。お園は傘を受取りて、二足三足ゆきかゝる時、又もや四方にて太鼓の音きこゆ。)

六三郎。

おゝ、又もやきこゆる太鼓の音が……。あれ、あれ、西にも東にも……。

淨みみなみも北きたも塞ふさがれて、父様は網あみの魚うな、えゝ是非ぜいひもなや悲かなしやと、狂氣きやうきのごとくどうと坐ます。

お園。

胸むねにひびくあの音は……。

六三郎。

修羅しゆらの攻太鼓せうたいこを聞くやうな。

お園。

(傘をすばめてあわたしく駈かけ戻る。)六三さん。あれ、あの音は冥土めいどの迎むかひ……。

六三郎。

え。

わたしも一旦たんは勧めたものゝ、おまへを江戸えどへは遣りたうない。いとしい男おとこを他國たこくへ遣つて、たんと苦勞くろうをさせるよりも、やつぱり二人ふたりが離れず……。

六三郎。

とは云へ、大阪おさかにはおめゝと……。

お園。

居ゐられぬところに居るには及およばぬ。ふたりが安々やすくと住すむ國くには、もし。

六三郎。

淨みいいだき寄よせて囁ささげば。

六三郎。

そんなら二人ふたりが今宵こんじやうをかぎり……。



お園。未練はないか。

六三郎。なんの、生きてゐたからう。そなたと連れ立ってゆくならば。

浄 地獄の底も厭はじと、身づくろひして起ちあがれば、こゝろも空も暗き夜に、修羅の太鼓のたうくと、冥土の迎ひぞ迫り来る。

(四方にて太鼓の音はげしくきこゆ。)

お園。あれ、あれ、又もや太鼓の音。邪魔のない中、ちつとも早う。

(六三郎は納屋に走り入りて、小さき壺を持ち来る。)

六三郎。大工の弟子には相應な。(壺をみせる。)

お園。そんならこれで……。

六三郎。お園、來やれ。

お園。あ……。

六三郎。(お園の手を取る。)あの太鼓は父様の命をちとむる音、ふたりもあの音聞きながら……して、これからの死場所は……。

お園。どこへ行かうぞ、六三さん。

浄 浄土は西と聞くからに、ゆく手は西よ西横堀、うき名を流す、血をながす、戀の末こそ哀れなれ。

(お園は向うを指させば、六三郎はうなづき、ふたりは手を取つて雨のなかを走りゆく。太鼓の音絶えずきこゆ。)

浄 死にゆく子をよそに見る、親のこゝろや如何ならん。九郎右衛門は茫然と、納屋のうしろに立ちあたり。

(この道具は半廻しになりて、納屋のうしろを見せる。九郎右衛門たゞずむ。)

九郎右。逃ぐるものは路を擇ばぬ譬、四方をとりまかれて度を失ひ、親方の家とも心付かず、裏口よりそつと忍び込み、捕手を遣り過さんと隠るゝうちに、思ひもよらず我子の六三が、お園とやらと死に行く。

浄 〽やれ過ぎまるなと出でんとせしが。

九郎右。いや、いや、思へば世間はむごいもの。盗人の子と憎まれて、可哀や六三の額には、不運といふ極印を打たれたも同じこと。一生涯で暮さうよりも。

浄 〽人間の花さかりに、美しう散るが却つて仕合せ。

九郎右。

止めずに殺した親を恨むな。われも所詮はのがれぬ命。千日前にさらされて、やて血染めの赤格子九郎右衛門、冥土で親子の對面せん。ひと足先にゆき着いて、父のゆくのを待つて居れ。

浄云ふもあたりを憚りて、涙を隠す身を隠す、よすがも無しや廣き世を、われから狭き門の口。

(舞臺はもとに戻る。九郎右衛門は納屋のうしろより庭さきを過ぎて、門口に忍び来る。奥より三吉出て來り透し見て、九郎右衛門の胸倉をつかむ。九郎右衛門は突倒して門口へゆく。向ふより庄藏は町會所と記せる提灯を持ち、傘をさして出づ。)

九郎右。

お、親方か。

庄藏。

九郎右衛門か。

浄提灯ふつと吹き消せば、闇はあやなし――。

(庄藏は提灯を吹き消す。九郎右衛門は向うへ走り去る。雨の音、太鼓の音。)

——幕——

なこそその關

大正三年一月作。

大正四年一月。本郷座初演。

初演當時の主なる役割——源義家（市川八百藏、後の中車）源義光（市川壽美藏）阿部宗任（市川左團次）大江匡房（中村歌六）左六太、關守の翁（市川左升）關守の廻（市川市十郎）小次郎法師（中村又五郎）花子、關守の孫娘（市川松蔦）南部太郎（市川新之助）津輕次郎、小冬（市川雷藏）など。

この史劇二幕は第二巻にかゝげた「貞任、宗任」の姉妹編である。

登場人物——八幡太郎義家。新羅三郎義光。阿部三郎宗任。佐伯次郎經正。大原六太夫則明。伴六郎助兼。鎌倉権五郎景政。南部太郎。津輕次郎。大江師匡房。左中辨師冬。中務大輔成雅。式部少輔貞頼。近江判官光平。公家侍左六太。丹後小次郎法師。關守の翁。關守の姫。その孫娘。白拍子萬壽。匡房の息女花子。侍女小冬。ほかに牛飼の童。侍女。職人。商人。女房。娘。公家侍。武士。里のわらべなど。

## 第一幕

寛治二年の春のはじめ。（今より八百二十餘年前のこと。）麗かなる日。洛中烏丸、藤原家屋形の塀外。正面はすべて築土にて、上のかたに寄せて溜り門あり。屋形のかまへは總て藤原時代の豪華のさまなこそその關

を見すべし。

(塀のそとに柳を多く栽みて、柳のもとには美麗なる御所車をつなぎ、牛飼のわらべは竹の杖を持ちてその傍らに坐す。みやこの職人、商人等、思ひ思ひの風俗。ほかに女房、娘等をあはせて連て七人ばかり、伸びあがりて塀のうちを窺ふ。老いたる商人の一人は、小兒を肩車にしてゐる。公家侍左六太、すこしく離れてたしずむ。)

職人甲。やれ、やれ、この築土が高いので、伸び上つてもなかく見えさうもないぞ。

職人乙。おまけに意地わるく柳が栽ゑてあるので、邪魔になつてならぬわ。

商人甲。(肩の小兒にむかひて。)どうちや、見えるか。綺麗な方々が大勢遊んでゐらるゝであらうが……。

小兒。さうぢや。綺麗なお公家衆が大勢で鞠を蹴て遊んでゐる。

商人乙。お公家衆といふものは、美しい着物をきて、毎日かうして遊んでゐるのぢや。

女房。ほんに羨ましいことござりまするなあ。

左六太。え、それをめづらしさうに今更申すことか。彼の方々は雲の上人。おのれ等のやうな町人職人とは、はじめから人間の種が違ふわ。

職人甲。さう云はれれば一言もござらぬ。下司に生れたがわれゝの因果かも知れぬ。

職人乙。このごろは大分蹴鞠が流行るやうぢやが、あの衆の遊びと云ふのもまだ色々あるのでござらうなう。

左六太。あるとも、あるとも……。先づ詩歌管絃は申すにおよばず、そのほかにも對松、双六、香合せ、繪をかくお人もあれば、碁をうつお人もある。

娘甲。またそのあひだには、春は櫻狩、夏は川遊び……。

娘乙。秋は月見に蟲聞き、紅葉狩。

女房。冬は雪見やら鷹狩やら……。

左六太。いや、そんなことまで一々數へてゐたら、一年三百六十日、毎日何かしら遊ぶことの種は盡きぬのぢや。

商人甲。しかしまあ然うして毎日毎日遊び暮して、よく飽きもせず、疲れもなさらぬことぢやなう。つまり我々が毎日働くのとおなじやうに、あの衆は毎日遊ぶのを務としてゐらるゝのであらうよ。

職人甲。してみると、あの衆は遊ぶために生れて來たのか。

職人乙。おれたちは働いたために生れて来たのか。

左六太。樂をするために生れて来た人間もあれば、苦しむために生れて来た人間もある。(塀の内を指さして) あの方々はこの世に生れ落ちるときから、お公家様といふ尊い冠がたまの上に乗つてゐるのぢや。羨ましくは生れかはつて来い。ほんに生れ替つてども来るよりほかはあるまいなう。

(滑り門より近江判官光平、わかき公家、蹴鞠の服装にて出づ。)

左六太。おのれはそこに何して居るのぢや。

光平。はあ。

光平。門外が騒がしいぞ。(人々を指さして) 彼等をみな追ひ拂へ。(云ひすて、門内に入る。)

左六太。それ見たか。おのれ等がつまらぬことを聲高にしやべるので、早速にお叱りを受けたわ。

さあ、いつまでもうかくしてゐたら、どのやうなお咎めを受けうも知れぬぞ。早う行け、ゆけ。

娘甲。わたし等は別に騒いだおぼえもないに……。

左六太。え、つべこべと申すな。行かぬとおのれ、痛い目みせるぞ。(睨み付ける。)

女房。やれ、おそろしいことぢや。

職人甲。さあ、早う行きませうぞ。

(みな思ひく、に左右へわかれ去る。牛飼の童は眠りある。)

左六太。(わらべに近づく) これ、なぜいつまでもこゝに車を寄せて置くのぢや。お、こいつ眠つてゐるな。これ、起きろ、起きろ。

(ゆすり起されて、童はやうやうに眼を開く。)

童。やれ、折角こゝろよう眠つてゐる所を、むごいことをする人ぢやなう。春の夜の夢ばかりなる手枕に……。(又うとくと眠る。)

左六太。え、小賢しいことをいふ奴め。おのれはなんの夢を見てゐたのぢや。

童。殿のお指圖で、戀の文使ひにゆく夢を見てゐたのぢや。

左六太。は、ムムム。大方そんなことであらう。兎にかくに斯様なところに車を寄せて置いては邪魔になる。表御門の際へ牽いてゆけ。

童。あい、あい。(童は車をひきて下のかたへ去る。)

左六太。(見送る) さすがは都ぢや。牛うつ童までが戀歌を知つてゐるわ。どれ、わしも奥へ行つて

春の夜の……いや、春の日の夢ばかりなる肱枕でも極めようか。いや、いや、奥へ行つたら又なにか御用を云ひ付けられることであらう。あゝ、せまじきものはお宮仕へぢや。  
(眩きながら門に入る。)

(大江匡房の息女花子、十七歳、侍女小冬をつれて、上のかたより出づ。)

花子。なう、小冬。よい日和になつたではないか。あれ見や。遠い山々も霞んで来た。

小冬。今は梅の盛りでござりまするが、やがて櫻狩の時節もまゐりませう。

(ふたりは語りながら下の方へゆかんとする時、塀の内よりひとつの鞠飛び出づ。)

小冬。(鞠を拾ふ。)塀の内からこのやうな鞠が飛んでまゐりました。(花子に見せる。)

花子。おほかた蹴鞠が外れたのであらう。

小冬。これから蹴かへして見ませうか。

花子。はて、はしたない。女子がそのやうなことをしてならうか。その御門から案内を乞うて、どなたにかお返し申したがよい。

(左六太は鞠をさがす心にて、門内より出づ。)

花子。おゝ、よいところへお人が見えた。早うそれをお返し申しや。

小冬。(左六太に。)もし、もし、おまへは鞠を探してゐらるゝのではござりませぬか。

左六太。左様でござる。(あなりなきよろ／＼見る。)

花子。鞠はこれに拾うてありまする。

左六太。いや、それは忝ない。お前様がお拾ひくだされたか。(小冬の手より鞠を受取らうとする。)

光平。(門内よりうかひ居りて。)左六太、待ちや。

左六太。(見かへりて。)はあ。

光平。その鞠はな。そちの主人阿冬どのが蹴損じた鞠ぢや。唯今本人がそれへ出て挨拶せられう

ほどに、まあ待ちや。

はあ。(手を引込める。)

花子。いえ、あらためて御挨拶には及びませぬ。わたくしどもは歸りを急ぎますれば……。

光平。でもござらうが、暫らくお待ちください。左六太、その鞠をむざと受取つてはならぬぞよ。

(眼で知らせるに、左六太うなづく。光平は門内に入る。)

小冬。これは迷惑な。さあ、おまへに渡しまする。

(鞠を出す。左六太受取らうとして、また手を引込める。)

なこそその關

左六太。その鞆をむざと受取つたら、私がつと叱らるゝわ。なんぢや知らぬが、兎もかくも殿が御挨拶にまゐらるゝまでは、先づそのまゝ。そちらへ確とお預け申した。(頭を掉りてあとへ退る。)

小冬。そんならこゝへ抛つて行きますぞ。

左六太。あ、いや、いや、それはならぬ。わしに免じてしばらく、暫く。(無理に止める。)

(門内より光平は先に立ち、ついて左中辨師冬、中務大輔成雅、式部少輔貞頼、いづれも若き公家、蹴鞠の服装に出づ。)

師冬。

(花子に會釋して。)蹴鞠が飛んで埒を越えたは、われ等が技の未熟、面目もござらぬ。よくぞ拾うてくだされた。わしはこの屋形のあるじ左中辨師冬、あらたおめて禮申しますぞ。

花子。ほんの通りがかりで拾ひましたに、その御挨拶では痛み入ります。

小冬。では、もうお返し申してもよろしうござりまするか。

六左太。(恐る恐る進み出づ)では、もう受取りましても宜しうござりまするか。

師冬。よい、よい。

(左六太は鞆を受取る。)

花子。では、御免くださりませ。

(花子と小冬は會釋して行かうとする。)

師冬。いや、しばらく……。おん身は大江匡房卿の御息女花子どのでござらうな。

花子。はゝ。

師冬。先つ石山寺參詣の折柄に、ふと垣間見てお名を知りそめた。就いては今こゝで逢うたは

勿怪の幸ひぢや。

ちかごろ無職かは存せぬが、われく折入つてお頼みがござる。

成雅。して、おたのみと仰せられますは……。

花子。拙いながら我々が、心をこめて作った歌ぢや。その御批判が願ひたい。

貞頼。減相な。わたくしどもに何うしてそのやうなことが……。

花子。出来ぬとは申されまい。匡房の卿は都にもかくれなき博學多才の御仁ぢや。その姫ともあ

師冬。るべきお人に、和歌の嗜みがなうてならうか。

光平。唯今御覽に入るゝほどに、御腹藏なく御批判をおねがひ申す。

成雅。もし其内にて心にかなふた歌があらば、なにとぞ返歌を頼みまするぞ。ようござるか。

なこそその關

貞頼。と云うたら、おほかたは御合點もまゐらう。男女の……(打笑む)なう、それもみな和歌の徳ぢや。

師冬。

(花子は小冬と顔をみあはせて當惑してゐる。)  
(短尺を取出して)先づこれから御覽ください。花子に突き付ける。花子は顔をそむけてゐる。これは如何でござらうな。(自分で讀む)よし野山思ひ入るべき路絶えて、霞がくれの花を見る哉。

成雅。

(花子は黙してゐる。)  
(おなじく短尺を取出して)哀れさは戀ぞ津守の浦に立ちて、うきめ刈る身となりけるかな。これはどうでござるな。

小冬。

(短尺を突き付ける。花子はやはり黙してゐる。)  
(花子の袂をひく)もうよほど時が移りました。そろ／＼と参らうではござりませぬか。はて、忙しない。まあ、待たれい。(短尺をとり出して讀む)嬭女の髪より長き春の日を、物思ひつゝ暮しける哉。

光平。

さあ、今度は私のを聞いてください。おなじく短尺を讀む)戀ひわびて身をや淵瀬に沈めてん、けふを限りの命なる哉。

師冬。

さあ、四人のなかで、どの歌がお氣に叶うたか。御遠慮なしに御批判をなう。

成雅。

さあ。(困つてゐる。)  
批判と云うて面倒なら……  
どれかの歌に返歌をなう。

花子。

(四人は花子を取りかこみて、短尺を突きつける。花子は返事に困つてゐる。上のかたより新羅三郎義光は阿部宗任を従へて出づ。小冬はこれ幸ひと走り寄る。)

貞頼。

おゝ、新羅どの。よいところへ来て下された。おゝ、小冬どのか。

小冬。

(小冬近づきて、花子の方を指さしながら義光にさゝやく。義光は迷惑さうな顔をする。)

師冬。

(短尺を突きつけて)霞がくれの花を見る哉。どうでござらうな。うきめ刈る身となりける哉。お氣にかなはぬかな。物思ひつゝ暮しける哉。如何でござるな。

成雅。

なこそその關



光平。けふを限りの命なる哉。あはれとは思さぬかな。

(四人は左右より花子を取りまく。小冬は氣を揉みて、早くごうかしてくれと義光に縋る。義光は餘儀なく進み出づ。)

義光。花子どの。如何なされたのでござるな。

花子。おゝ、新羅殿……。

(寄らうとするを、師冬は押し隔て、睨み視る。)

師冬。お身は誰ぢや。われ／＼に會釋もせいで無作法な。控へてゐやれ。

義光。(謹んで)無禮は平におわび申します。それがしは源の義家が弟、同苗三郎義光、唯今これへ参りあはせし處、かねて師とたのむ大江帥匡房卿の息女が、なにやら迷惑して居ら

るゝげにも見えまするるので……。

成雅。お身があつかひに参つたのか。

貞頼。はて、お身達の知らぬことぢや。差出口せいで、通りや、通りや。

(貞頼の袖をひきて。)先づ待たれい。かれも名に負ふ八幡太郎の弟ぢや。そのやうに殿しうお叱りあるな。師冬の顔をみて、眼で知らせる。)

光平。

師冬。(うなづく)何さまさうぢや。新羅三郎とあるべき武士に、恥辱をあたへては快うない。

われ等は唯この娘御にむかつて、和歌の批判を乞うてゐたまでのことで、別に仲裁のあつかひのと云ふべき筋ではないが、まあよいわ。往來中でいつまで此のやうなことを云うてゐても果しがあるまい、なう、方々。

成雅。では、歌の批判は後日のこととして、今日はこのまゝおわかれ申さうかなう。

貞頼。義光、それで異存はあるまいな。

義光。ありがたう存じます。

(公家四人は顔をみあはせて何かうなづき合ふ。)

師冬。ついでには義光、ちとお身に無心がある。ほかでもないが、お身は大内の伶人豊の時元を師

とたのんで、笙の稽古を勵んでゐると聞く。

光平。どうぢや。これから奥へ行つて、われ／＼に一曲聴かしてはくれまいかな。

義光。これは思ひもよらぬ御所望、をさなき頃より笙を好みて、いさゝか吹き覚えまされたれど、

いかでか殿上人のおん前にて……。この儀は平に御免くださりませ。

成雅。いや、いや、そのやうに卑下すまいぞ。お身が笙の名人といふことは、雲の上まできこえ

貞頼。さあ、奥へ来て、一曲よいて聴かしや。

義光。でも、こればかりは。

光平。はて、遠慮に及ばぬ。さあ来やれ、来やれ。

義光。折角の御所望を御辭退申すは恐れ入れど、唯今は加茂へ社参の途中でござりますれば……

師冬。はて、加茂も家鴨も要ることか。何であらうと、まあ来やれ。

貞頼。さあ、来やと云ふに……。

宗任。(四人は意地悪く義光を引立てんとす。宗任、最前より黙して控へぬたるが、堪へかれて進み出づ。) しばらくお待ちくださりませ。唯今も聞かせらるゝ通り、主人義光はこれより加茂の御社

へ参詣の途中でござりますれば、お引き留めなされては甚だ迷惑、なにとぞ今日のところは御免くださるやう、それがし共々におねがひ申します。

左六太。(宗任を制して。) え、おのれが要らぬ口出しぢや。控へてをらぬか。

宗任。それがしが主人は王城守護の役目をうけたまはる源氏の武士でござる。たとひ笛をふけば

とて、笙を吹けばとてそれはおのれが好きで吹くまでのことよ。人の慰みには吹くまいぞ。

なう、お公家衆。主人義光に御用とあらば、弓矢のことを何なりとも仰せられ候へ。武士に不似合の遊藝の御所望は、主人に代つてそれがしが御辭退申す。(憚る色なくいふ。)

ほう、口賢いことを申す奴ぢや。武士に不似合といふ笙や笛を、そちの主人はなぜ習うた。弓矢を取るは家の藝、そのほかに暇があれば、笙も吹きます。笛も吹きます。家の藝を怠つてこそ冤かうの非難もあれ、はゞかりながら主人義光は、弓矢を取つて人におくる者ではござりませぬ。それに引替へて殿上人のうちには、中將の少將のと威めしう名乗りながら、太刀をぬく術も碌々には知らずして、詩歌管絃の遊樂に日を送る人もあまたござるが、これ等をなんと思召すぞ。

義光。宗任、控へい。おのれは陪臣の分として、殿上人にむかつて打付けに物申すは恐れあり。

退れ、さがれ。(眼で制すれば、宗任は餘儀なく口を噤む。)

お、あれが阿部宗任か。見るから怖ろしげな面魂。どうやら見たことがあるやうぢやと思つてゐました。(貞頼を見かへる。)

成雅。(うなづく。) 左様、左様。先年奥州征伐のみぎり、兄の貞任は討死し、弟の宗任は生捕

となつて、三條大路をひき廻されたことがござつた。

光平。

師冬。

成雅。

宗任。

成雅。

宗任。

成雅。

宗任。

成雅。

宗任。

成雅。

宗任。

成雅。

宗任。

成雅。

宗任。

成雅。

宗任。

成雅。

宗任。

成雅。

宗任。

成雅。

宗任。

成雅。

宗任。

成雅。

宗任。

成雅。

宗任。

成雅。

宗任。

成雅。

宗任。

成雅。

その時には髪をおどろに振被つて、牛の皮の脊をはいて、鬼か人かと思ふやうな凄じい男

であつたが……。 (宗任を見て) 今は都に住みなれてか、風俗もえらう變りましたな。

さりとしてことわざにもいふ猿の冠ぢや。人なみに烏帽子直垂を身につけても、心はいつま

でも奥州の荒夷で、禮儀も作法もわきまへぬ物の云振り、身のこなし、かやうな卑しいも

のを家來に召仕うてゐる義家兄弟は、氣の知れぬ男共よなう。

おほかた人並の者は家來に持たれぬのでござらうよ。はゝゝゝゝ。

宗任はまことに貞任の弟、奥州の生れ、夷と呼べるゝを左のみ恥辱とも存せぬが、それが

ために主人の名を恥しめまするは、ちかごろ心外の儀でござりまする。過ぎし奥州の軍は

申すにおよばず、近くは三井寺の悪僧どもが都を騒したる砌にも、主人義家はかく申す宗

任等を引具して眞先にかけてむかひ、唯一矢にて彼等を追ひ散らし、わづか二响か三响のあ

ひだに、お膝下の騒動を切鎮めたではござりませぬか。たとひ昔は夷ともあれ、今は源氏

の家來として、宗任も分相應の御奉公は致してをりまするぞ。

又しても左様なことを申すか。義光がこれにあるあひだは、其方は唯控へて居ればよいの

ぢや。

ではござれども、君恥かしめらるゝ時は臣死すとか承はつて居りまする。たとひ殿上人

ともあれ、それがしの主人に對して無禮を加ふるものあらば、誰彼の容赦はござりませぬ。

片端から揃み挫いで屹と無念を晴らしまする。

(宗任は眼を嗔らして師冬等を眼み視る。その劍幕のすさまじきに、公家四人はすこしく怯む。)

(師冬等にもかひて。) 御覽の通りの無骨者、おのが主人のほかには恐るゝ者も無しと思つて居

りますれば、いかなる亂暴狼藉を働かんも測りがたく、それがしも常に心を痛めて居りま

する。(嚇すやうに云ふ。四人はいよゝ怯む。) ついては今日の無禮も、義光に免じて御勘辨

のほど偏におねがひ申しまする。(宗任を見かへる。) 其方も以後は心して、高貴の方々に無禮

を申すな。(眼で知らせる。)

(餘儀なくうなづく。) はあ、恐れ入つてござりまする。

かやうに恐れ入つて居りますれば、なにとぞおゆるし下さりませ。

よい、よい。義光が左ほどに申すならば、今日の無禮はゆるして置く。

(宗任に。) われゝに對して再び無禮を申すに於ては、この後は決して容赦せぬぞよ。

おのれ等を生かさうと殺さうと、われゝの心任せぢや。

なこそその關

二三五

光平。そちばかりではない。主人の義家も皆その通りぢやと思へ。(義光へ當付けるやうに云ふ。)

師冬。さあ、まわりませうか。

成雅。鞠ひとつ蹴損じた爲に、思はぬ暇を費しました。

貞頼。義光、さらばぢや。

義光。はあ。

光平。(意地悪さうに。)宗任さらばぢや。

宗任。はあ。

(師冬等四人は門内に入る。先刻より去りもやらず、木かげにたゝすみてその成行を氣づかひぬた  
る花子と小冬は進み出づ。)

小冬。意地のわるいお公家衆が、嵩にかゝつて無理難題、この上どう成りゆくことやらと、さつ  
きから心配して居りました。

花子。折の悪いところへ來あはせて、新羅殿までが強い御難儀。なんとも申譯がござりませぬ。

義光。いや、いや、その御會釋では痛み入る、それがしは武士のこと、たとひ何のやうな難題を  
申しかけられうとも、よけて通せばそれで済む。女性の方々はさぞ御迷惑でござつたらう

なう。(更に宗任を見かへる。)宗任、そちも定めて無念でありつらうが、公家にしたがふが武  
士の習ひぢや。何ごとも堪忍せい。兄の八幡どのの源氏の嫡流、これまで大小數度の軍に  
目ざましき功名をあらはし給へど、位はわづかに從四位の下、昇殿さへも許されず、公家  
殿上人には輕しめられて奴僕のやうに追ひつかはるゝ。無念とは思へどそれも是非ない。  
ましてその家來たる其方どもは、堪忍の上にも堪忍が大事ぢや。

宗任。それはかねて心得て居りますが、あまりに横車を押して蒐らるゝと、われを忘れて楯突  
く氣にもなりません。宗任はまだ夷心が失せぬとみえます。(苦笑ひする。)

花子。新羅殿にはこれより加茂へ御參詣でござりまするか。

義光。兄義家もあとより參る筈でござるが、いまだ見えぬは……。 (宗任に。)どうしたことであら  
うなう。

宗任。先刻よりよほどの時を移しましたに、いまだ見えぬは不思議のことでござりまする。それ  
がしが引返してお迎ひにまわりませうか。

義光。途中で兄上に行き逢うたら、義光はお先へまゐつたと申してくりやれ。

宗任。心得ました。(上のかたへ足早に引返して去る。)

義光。さらば、それがしもこれにてお別れ申す。(花子等に會釋して行きかゝる。)

小冬。あ、もし、しばらくお待ち下さりませ。

義光。なんぞ御用でござるか。  
さだめてお聞きでもござりませうが、唯今あのお公家衆が妾に添削せよと申した歌は、みな戀歌でござりました。

花子。大方はさうであらうと察して居りました。

義光。その歌のよしあしは扱措て、どれもこれも叶はぬ戀を歌うて居りました。

(心ありげに云ふ。義光は手持無沙汰に立つ。)

小冬。その歌の読み人が若もほかのお人であつたら……。なう、姫上様。

義光。(きまり悪げに。)義光にはよくも判らぬ歌のお話、いづれ又ゆるくと承はるでござりませう。(行きかゝる。)

小冬。はて、まあ、お待ちなされませ。

小冬。(小冬は義光の袖をとらへて引戻し、花子になにか云へと眼で教へる。花子は恥かしげに俯向く。)  
それならわたしから申上げませうか。

花子。はて、端下ない。そのやうなこと……。

小冬。ちやと云うて、云はねばいつまでも果てしがござりませぬ。え、面倒な新羅殿……。花子を指さして。もうよいほどにお察しなされませ。(義光を花子の方へ突き遣る。)

義光。小冬殿。粗忽なされな。花子どのは匡房の卿の姫君ではござらぬか。

小冬。それは今更云はずとも知れて居ります。その姫君が何となされました。

義光。匡房の卿は義光が師とも頼むおん方、その姫君に對して無禮があつては……。

小冬。いえ、いえ、あのお公家衆とは違うて、姫上様は無禮咎めをなさるやうなお方ではござりませぬ。

義光。ではござらうが、今日は社參の途中。歌のお話はまた重ねて……。御免ください。

(義光は花子を見かへりつゝ、徐に向うへあゆみ去る。花子と小冬は後を見送る。上のかたより大江

匡房。四十餘歳。従者一人を連れて出づ。)

従者。(花子等を見て。)お、姫上があれにおいでなされます。

匡房。娘はそれに居つたか。

(小冬は見かへりて心づき、花子の袖をひく。)

な、その關

小冬。もし、父上様がお越しでござりまする。

花子。お、父上様。半晌もお先へまゐりながら、途中で思はず引止められてをりました。

匡房。たれぞ知人にでも行き逢うたか。

花子。いえ、さうではござりませぬ。こゝの御門前を通りかゝりますると、塀のうちから鞠がそ

れて飛んで來ましたのを、小冬がはからず拾ひました。

小冬。それがとんだ係り合になりました、大勢の若いお公家衆が姫上様を取りまいて、戀歌の添

削せよと強請されました。

匡卿。(苦々しげに。)して、如何いたした。

花子。わらほも途方に暮れてゐましたところへ、折好く新羅三郎殿が來あはせて、やう／＼にあ

つかうてくれました。

匡房。(門の方を見る。)青公家ばらが時を得顔を振舞うて、武士をかるしめ、民百姓を苦めて、

おのれのみ榮華の春を誇る。(嘆息して。)この世も次第に衰へてゆくばかりぢや。よい、よ

い。この後再び右様の無禮を働かば、匡房が吃と叱り懲してくるゝわ。

小冬。お公家衆の亂暴狼藉はこのごろ次第に募るばかりで、ほんに諸人が迷惑しまする。お前様

匡房。のやうなお方が殿しく叱つてくださらねば、とても止むことではござりませぬ。その匡房の娘にさへも無禮を加ふる徒ぢや。叱つても諭しても容易には止むまい。それに

ひきかへて源氏の武士は、心のうちに定めてかず／＼の不平もあらうなれど、公家の跋扈を堪へ忍んで、おのが役目を神妙に勤めてゐる。

従者。それと申すも義家義光の兄弟が、おのが務を大切に心得てゐるからのことではござりませぬ。源氏の家には代々名將を出す習ひぢや。今の義家義光もあつばれ先祖に劣らぬ弓取、源

花子。氏の流れはます／＼榮ゆるであらうよ。して、兄と弟とはどちらが優れて居りませうな。

匡房。その人の得手不得手を一々にひきくらべて論ふならば、兄に優れたところもあらう。弟に秀でたところもあらうが、弓矢を取つては流石に義家が兄ぢや。先づ頃宇治の關白

の許にて測らず義家と對面し、貞任征伐の軍ものがたりを委さにうけたまはつたが、かれの軍配はなかく／＼に鋭いものぢや。匡房もほと／＼感心いたしました。

小冬。八幡太郎は弓矢神も同様ぢやと、専ら世間でも噂してをりまする。匡房。げに義家は無双の弓取ぢやが、たゞ惜むらくは兵法を知らぬ。(打笑む。)

花子。

六韜三略はお家の秘傳、容易に人にもお洩らしなさらねば、八幡太郎殿ほどの大将でも、知らぬは無理もござりませぬ。

匡房。

弟義光は昨年以來、をり／＼にわが許へたづぬ來て、古文の講義を聴くといへども、彼はいまだ年若うして、兵法の奥儀を傳ふるに足らぬ。いや、途中で思はぬ長話。春の日もやがて傾かうに、皆もまわれ。

花子。

お供いたすでござりませう。

(匡房は先に先ち、花子、小冬、從者等附添ひて去る。上のかたより宗任出で來りて、そのあとを見送る。ついで八幡太郎義家出づ。)

宗任。

(忌々しげに。)唯今あれにて洩れ聞けば、武勇秀でし我殿を指して、兵法を知らぬなどは、奇怪千萬。その道にもあらぬ長袖の分際として、よくも云はれたものぢや。

義家。

いや、そのやうに申すな。そのむかし醍醐の帝のおん時に、大江維時卿を唐土につかはし、つぶさに彼國の兵法を習はしたまふ。これよりして大江の家には代々兵法を傳へ、なかくづく當代の匡房卿は博學多才のほまれあり。文武龍虎豹犬の六韜をこと／＼く語ぜらるゝとかうけたまはる。かゝる御仁の眼より御覽せば、義家の弓矢にも定めて數々の不覺はあらう。

宗任。

して、その兵法とは如何やうのものでござりませうな。

義家。

義家もよくは知らぬ。知らねばこそ匡房卿にも笑はるゝのぢや。奥州再びみだれて、遠からず出陣すべき身なれども、朝に道を聽いて夕に死すとも可なりと、いにしへの聖人も説かれてある。ましてこれは弓矢の事ぢや、われは今日より師弟の禮を取りて、一日なりとも匡房卿の教へを受けん。今にして心づくは遅けれども、心づいて行はざるよりは優しであらう。加茂の社參相果てなば、たゞちに匡房卿の屋形に伺候せんと思ふは如何。

宗任。

兵法を知らぬと誹られても、いさゝかも御立腹の體もなく、却つてその教へをうけんと仰せらるゝ御心の潤さ、宗任ごときが所詮及ぶ所ではござりませぬ。今更ならねど唯々恐れ入つてござりまする。

義家。

義光も定めて待ちわびて居らう。弟はかねてより匡房卿の屋形に出入りすると聞けば、かれと連れ立つてまゐると致さうか。

宗任。

なにさまそれが宜しうござりませう。

義家。

宗任、まわれ。

な、その關

(義家先に立ちてゆきかゝる時、向ふより梅の枝をかつぎたる若き公家三人、酒に酔ひたる體にて、足もしどろによろめき來る。義家はこれを避けながら向うへあゆみ去る。公家等は笑ひ明じつゝ上方へあゆみ去る。宗任は立ちごまりて若々しげに見送りゐると、門内にはどツと笑ふ聲して、外れたる鞠が又もや築土の外へ飛んで出づ。宗任は鞠を拾ひ取りてちつと眺めしが再び地に投げ捨て、足にて踏みにじりて立去る。)

—幕—

### 第二幕

(1)

前幕より半月あまりを経たる夜。左中辨師冬の屋形。  
白木の二重屋體にて、高欄つきの廻り縁。階段のあがり口、正面は繪襖、庭の上のかたに池あり。下のかたに梅の大樹ありて、花は白く咲きみだれたり。

(座敷には燈臺を置きて、あるじの師冬をはじめ、成雅、貞頼、光平、いづれも圓座に居りて酒宴の最中。侍女二人は階に立つ。白拍子萬壽、廿二歳、烏帽子水干にて起つて舞ふ。)

唄 君をはじめてみるときは、千代も經ぬべし姫小松、おん前の池の龜岡に、鶴こそ群れ

師冬。成雅。

いつもながら萬壽の男舞は、あさやかに美しいものぢや。

貞頼。

美しい女子が男姿して唄ひつ舞ひつ、さりとて興あることを始めたものぢやなう。

光平。

白拍子といへば島の千歳、若の前、このふたりに止まるやうに持て囃すが、これなる萬壽

師冬。

とても彼等におくれはせまい。

萬壽。

宇治の關白殿は島の千歳、若の前を最負にせらるゝとか聞き及んだれば、われ／＼はそれに張合うて、萬壽、そちを最負にしてつかはずぞ。

成雅。

數なりませぬ流れの身、權門高貴の方々の御引立をひとへにお願ひ申しまする。

おゝ、よい、よい。關白殿が氣に入りの白拍子に扶持せらるゝならば、われ／＼も負けず



劣らず、そちを扶持して遣はすわ。

貞頼。さうぢや。もし彼の人千歳、若の前に衣ひと重ねの被物を取らするならば、われくはそちに衣二重ねを取らさうぞ。

光平。もし、又、かの人千歳、若の前に馬一匹をあたるならば、われくは馬二匹をあたへようぞ。

師冬。かなたで五十貫五十石の纏頭をあたるならば、われくは百貫百石の纏頭をあたへようぞ。どうぢや、頼もしい後楯ではないか。

萬壽。重ねくのおん情、たゞくありがたう存じます。先づとりあへず杯を取らさう。

成雅。お流れ頂戴いたします。  
(侍女は三方にのせたる土器を萬壽のまへ持ち来る。)

左六太。殿、首尾よう仕まつつてござりまする。(假面をぬぐ。)

師冬。お、左六太。首尾よう彼の女子を奪ひ取つてまゐつたか。

左六太。(ほこりに。)そこにぬかりはござりませぬ。あるじの匡房卿は八幡太郎の屋形へゆき向ひて、今宵は留守とうけたまはつたれば、女子どもを嚇すために、かやうな鬼の姿にいでたち、おなじ姿の侍どもを引連れて、裏門口より忍び入りました。して、邪魔する者はなかつたか。

成雅。青侍ひとり二人と女子どもが、少々ばかり抗ひましたが、手あたり次第に突き倒して、目さすお人を引つ擔いでまゐりました。

貞頼。あとより追ひ掛けては來なんだか。  
(頭を掉る。)不意の騒ぎにおどろき惑ふばかりで、あとを追ふ者もござりませぬが、たゞ途中にてひとりの大男に行き逢ひました。

光平。その男がなんとした。

左六太。姫が泣き叫ぶ聲を聞きつけて、不思議さうにあなたを睨んで居りましたが、やがて、待つと膽に堪へるやうな一と聲、われくのとを追うてまゐりましたので……(顔をしかめる。)あなたは一生懸命、あとをも見ずに逃げ歸つてまゐりました。

師冬。それは何者であらうな。

なこそその關

左六太。

何者か存じませぬが、あのすさまじい聲音と云ひ、夜目にもかじやく眼のひかりは、どうも唯者とは思はれませぬ。もしや鞍馬か愛宕の天狗では……。

師冬。

は、弱い奴ぢや。おのれは鬼の姿をしてゐながら、やはり天狗がおそろしいか。たとひ鬼でも天狗でもわれくの威勢にはかなふまい。無駄なこと云はずと、早う獲物をこれへ連れて來やれ。

左六太。

はあ。(引返して去る。)

成雅。

(打笑む。)こりや面白うなつて來たぞ。

貞頼。

匡房のかたくなおやぢめ、それと知つたら怒ることであらう。

光平。

まさかに我々の仕業とは心づくまい。

師冬。

心附かれては事面倒ぢや。あなかしこ、人には洩らすまいぞ。はゝゝゝ。

師冬。

(庭口より左六太は先に立ち、やはり鬼に扮装したる公家侍ふたりは花子を引立て、出づ。花子は

髪も亂れ、姿も亂れたり。)

師冬。

おゝ、みなもの者、大儀であつたぞ。

左六太。

(花子に。)さあ、方々がお待兼ねぢや。早うあれへお越しなされい。

(花子は頭をふる。)

師冬。

はて、情の強い。よい、よい。わしが手を取つて進ぜうわ。

(師冬は縁に降りる。左六太等は無理に花子を曳いてゆく。師冬は花子の手を取る。)

師冬。

さあ、さあ、こゝまでまゐられたら、もう怖いことも何にもござらぬ。

光平。

さあ、さあ、これへござれ。

(師冬は無理に花子を縁にひき上げる。花子は泣き伏す。他の侍ひとり庭口より走り出づ。)

侍。

申上げます。

師冬。

なんぢや。

侍。

途中にて行き逢ひたる一人の大男が、われくを追うて御門前までまゐりました。

左六太。

おゝ、こゝまで執念く追うて來たか。

侍。

唯今手籠めにして連れゆかれたる女性は、匡房卿の姫君と見申した。いかなる仔細あつて

のことか、それを承はりたいと申して、容易に動きませぬ。

成雅。

して、それは何者であらうか。

侍。

源の義家の家來、阿部宗任と名乗りました。

左六太。

おゝ、宗任か。(皆々顔をみあはせる。)

師冬。

(思案して。)よい、よい。宗任めがこれへまゐつたは幸ひぢや。彼いかばかり猛くとも、計略を以て生捕るまでのことぢや。いつはつて狭き座敷へ案内し、不意に四方の襖を倒しかけて、身動きのならぬやうにして組み止めよ。方々、この智慧はどうであらうな。それは妙計。獸のやうな宗任めも、檻に這入るは案のうちぢや。

光平。

左六太、かならず脱落るまいぞ。

左六太。

はあ。(侍どもを見かへる。)とは云へ、これは難儀な役ぢや。

侍一。

姫を奪ふとは事變つて……。

侍二。

相手は名に負ふ荒夷ぢや。

侍三。

油断したら命にかゝはらうも知れぬ。

師冬。

えゝ、兎かう云はずと早うゆけ。えゝ、肯かぬか。肯かねばおのれ勘當ぢやぞ。

左六太。

(おどろく。)は、はあ。かしまつてござりまする。

(左六太等は餘儀なく引返して去る。萬壽は先刻より不思議さうにこの體を眺めてゐたりしが、この時すこしく進み出づ。)

萬壽。

恐れながら伺ひまする。これへお連れなされました姫君は、いづこのお方でござりまする。

成雅。

委細は最前から聞いたであらう。これは大江匡房卿の娘ぢや。

萬壽。

その姫君をどうしてこゝへ……。

貞頼。

われ／＼が曩の日に戀歌を贈つて、その返しを求めたが、一向になんの沙汰もない。

光平。

それから後も手を替へ品をかへて、幾たびか返事を求めたが、いつもいつも梨の礫ぢや。

師冬。

われ／＼ももう我慢がなり兼ねて、今夜といふ今夜は荒療治ぢや。家來どもに申付けて匡房卿の屋形を鬧がし、かやに姫を連れ出してまゐつたぢや。と云うて、別におそろしい

事をするのではない。(花子にむかひて。)喃、花子どの。今聞かれた通りの仕儀で、人われに

辛ければ、我また人に辛しと云ふはこゝのことぢや。お身があまりに情ないによつて、わ

れ／＼もまた今宵はちとばかりお身に酷い目みせたが、それは一時の戯れ、云はゞ童遊び

の鬼事も同様ぢや。かならずお氣に支へられた。

今宵お身をこゝへ誘ふたは、別儀でもない。それ、いつぞやの返歌を喃。お身に戀歌を贈

つたはこの四人ぢや。つまりが四人に返歌をたまはれば、それでよいのぢや。

成雅。

な、こその關

貞頼。

勿論、そのなかには成るといふ返歌もあらう、成らぬといふ返歌もあらうが、その返事次第で、成るものは成る、成らぬ者は成らぬと諦むるまでのことぢや。

光平。

蛇の生殺しとか云ふやうに、唯そのまゝに捨て、置かれては、なみだは胸にみちのくの、信夫のみだれ限りなく、立つる錦木甲斐なく朽ちて、焦れて死なうも知れぬものを、すこしは哀れと思さぬか。(へわざと優しく云ふ。)

師冬。

光平。待たれい。お身ひとりか歌詞で、優しさうに掻き口説かるゝが、三十一文字ならばわしが上手ぢや。浅茅生の、小野の篠原しのぶにも、餘りて何どか戀しさに、衛士の焚く火にあらねども、ひるは消えつゝ物思ふ、この師冬は冬されて、人目も草もかれ果つる、あはれは誰がする業ぞ。

成雅。

君をおもへば千早ふる、神や佛へ懸巻も、あやめもわかぬ戀の闇……。

萬壽。

はて、まあお待ちなされませ。四人の方々が御一緒に、右左からそのやうに仰せられましては、どなたにも御返事もなりません。むかしがたりの生田川をお前様方は御存じないか。

四人。

やあ。

萬壽。

うなる少女が身一つを、ふたりに獻げんやうもなく、茅淳と笹田に義理立て、命をすてた例もあること。お前様方が打付に仰せられますよりも、これはわたくしにお任せくださりませ。女子は女子同士とやら申しますれば、どなたに御返事を申してよいやら、姫上様のお胸のうちを……。

師冬。

そちが訊いてくるゝと申すか。

萬壽。

はい。

成雅。

なにさまこれも道理はある。

貞頼。

では、何事も萬壽にまかして、戀歌の返しを聞くと致さうか。そちに宜しく頼んだぞ。

萬壽。

かしこまつてござりまする。(花子のそばに進み寄る。)さめ、お許しが出来ましたからは、こゝはあまり端近でござりまする。兎も角もわたくしと御一緒に奥へお越しなされませ。(花子はやう／＼に顔をあげる。萬壽は心配するなと眼で知らせる。)

萬壽。

さあ、御案内申しませう。

(花子の手を取りて起ちかゝる。光平すゝみ寄りて花子の袂を捉らうとするを、萬壽は扇にて拂ふ。光平は倒れんとす。)

な、その囀

萬壽、ほ、御免くださりませ。

(萬壽は花子の手を取りて、縁傳ひに奥に入る。)

光平、花子の戀がならぬ。曉には、萬壽に乗替へようと思つてゐたが、今の様子ではこれもどうやら覺束ない。(惜げる。)

師冬、お身は戀する人ではないわ。は、は、は。

(左六太は先に立ち、以前の侍三人は繩にかゝりたる阿部宗任を庭さきに牽いて出づ。宗任は烏帽子を打ち落されて大童となり、左六太等は鬼の姿をあらためて常の服装となれり。)

左六太、殿。お褒めくださりませ。仰せの通りに仕つて、不意に召捕つてござりまする。

師冬、お、手柄、手柄。(縁さきに進む。)こりや、宗任。おのれ下郎の身を以て、左中辨師冬が屋形へ、夜中なにゆゑに推参いたしました。先づその仔細を申せ。

宗任、(臆せず)それをお答へ申すまへに、宗任より先づおたづね申したき儀がござりまする。何故に左中辨師冬ともあるべきおん方の御家來衆が、夜中に鬼の姿をして都大路を横行し、由ある御方の姫君を手ごめにして奪ひゆくなど、盜賊同様の亂行をせらるゝか。その仔細を仰せ聞けられくださりませ。

師冬、やあ、盗人猛々しいとはおのれがことぢや。おのれが吟味さるべき身を以て、逆捻にわれを吟味せうとか。師冬の家來に盜賊拐引のごとき悪行を働くもの一人もない。又さる人の姫を奪ひ出したるなど、我々に取つては掛けても覺えのないことぢやぞ。

宗任、覺えないと仰せられましたも、宗任がたしかに見届け申した。今宵主人の使にて今出川までまゐりし歸るさ、二條の大路にさしかゝりしに、若き女子を宙をかつぎて、夜道を走る鬼のごとき者あり。その數はおよそ十人餘りとも見えました。途中にて假面をぬいで汗をぬぐふを見れば、先に立つたる一人は正しくこの左六太……。 (左六太はおどろきて顔を背ける。) 又、その囚はれの少女といふは大江匡房卿の息女……。

(云ひも果てぬに成雅は進み出づ。)

成雅、こりや、宗任。囚はれの少女は匡房卿の息女といひ、盗みし頭人は左六太ぢやと云ふ。そのやうなことが夜目に確と相分つたかな。

宗任、(空を仰ぎて)夜とはいへど空には月あり、宗任が一目見たればあやまちはござりませぬ。しかもその鬼の群はこの御門内に入り込みました。

貞頼、(進み出づ。)いや、そりや無證據ぢや。其方一人がたしかに見たと申し張つても、當方で飽

光平。

までも知らぬと云へばそれまでのこと、下世話に申す水掛論ではあるまいか。さうぢや。おのれが其場でその一人を取押へて、白状させたらば知らぬこと。夜目遠目で見たと云ふのみでは、ちつとも證據には相成るまいぞ。

(宗任少しく詰る。公家等は顔をみあはせて冷笑ふ。)

師冬。

どうぢや、宗任。まだ疑はゞ面晴れに家捜しさせうか。

宗任。

家捜しさせうかと仰せらるゝからは、いづかたへかお隠しなされたのでござりませう。あらためて家捜しするは無益のこととござりまする。(冷笑ふ。)

貞頼。

では、まだ我々を疑うてゐるのか。思ひもよらぬ濡衣をきて、近ごろ迷惑なことぢやなう。迷惑どころではござりませぬ。盗賊拐引の徒黨のやうに申されては、われ／＼が世間へ顔

光平。

出しがなりませぬ。もう斯うなつたら是非がない。これは拙者が眼違ひ、人ちがひ、門違ひと、重々の粗相をお

左六太。

わび申して、お慈悲の御沙汰を願ふがよからうぞ。いや、人違ひでなし、門ちがひで無し、宗任が眼は曇らぬ鏡ぢや。

宗任。

では、狼藉者として御成敗を受けたいか。

宗任。

いはれなくして武士に繩をかけたるおのれらこそ大の狼藉者よ。宗任はおとなしく案内を求めて、姫を連戻らんと計りしまでぢや。かうと知らば玄關を踏み破つて通らうものを、なまじひに禮儀を重んじて、誘はるゝまゝに座敷へ通され、計略の良に陥りしは、宗任が一生の不覺であつたわ。いかに公家衆が威勢をふるふ世の中とて、なんの罪もなき宗任をむごと御成敗は相成るまい。

師冬。

いや、罪はある。罪科は重々ぢや。師冬の屋形へ夜中亂入して、盗賊よ拐引よと罵しりわめく。それが赦して置かれうか。左六太、そやつを厳しく折檻せい。

左六太。

はあ。(腰なる扇を取る。)

師冬。

そのやうなものでは手鈍い。おゝ、よいものがある。まあ、待ちやれ。(縁先に立ち出でて梅の一枝を折る。)

先年宗任が降人となつて、奥州より都へ牽かれし時に、あづまの夷は左こそ可笑しからんと、われ／＼が義家の屋形を訪ひ、この梅の花を一枝手折りて、宗任これは如何と問ふたるに、おのれはなんの答へも無しに、わが國の梅の花とは見つれども大宮人は何と云ふらんと、賢さうな顔して詠み居つた、その面憎さは今も忘れぬぞ。今宵おのれを折檻するには、丁度幸ひのこの梅が枝ぢや。左六太これにて痛い目みせい。(梅の花を

なげて遣る。

左六太。

(枝を取る。)これが宜しうござらう。いざ、宗任、覺悟せい。

宗任。

(屹と睨む。)おのれ、見事に宗任を打つか。

左六太。

(怯みながら。)何のおのれが……。

宗任。

打てるなら打つてみよ。

師冬。

左六太、早ういたせ。

左六太。

はあ。

(左六太は思ひ切つて梅の花をふり上げる。宗任は身をかはして二三度は空を打たせ、足をあげて

蹴と蹴る。左六太倒る。)

成雅。

や、おのれ飽までも抗うか。

宗任。

(憤然として。)お、この上は堪忍も我慢も無用ぢや。世はおのれ一人の天下と心得て、我

は顔する位倒れの瘦公家めら。宗任が土足で踏みにじつてくるゝわ。そこ動くな。

(宗任は繩付きのまゝにて縁に上らんとするを、侍どもは走せ寄つて、繩の端を取つてひき戻す。

宗任は放して行かんとするを、左六太等はあわて、遮り、あるひは手を取り或は足を取る。師冬

等は、この勢ひに氣を吞まれて總立ちになるところへ、奥より萬壽走り出で、今や縁にのぼらんとす  
る宗任を遮る。)

萬壽。

宗任殿、先づお待ちなされませ。

宗任。

え、女子などは相手にならぬ。退け、退け。

萬壽。

憎いと思ふ人々を、こゝろのまゝに踏みにじつたら、おまへの胸は濟むであらうが、お主

の難儀ともなることぢや。

宗任。

む、(すこしく躊躇す。)

萬壽。

八幡太郎義家の家來が、公家衆のお屋形で狼藉を働いたときこえたら、お前はかりの科で

は濟むまい。ふつゝかの家來を有つた爲に、死罪流罪に逢うた主人もかすゝある。お前

ひとりの心から、清和源氏のお家にまで疵が附いたら何とならう。なに事も我慢が大事。

辛抱が肝要でござりませうぞ。

(宗任も今は争ひ得ず、無念をしのんで板縁に堂と坐す。かくと見るより師冬等は再び勢ひを得て、

すゝみ出づ。)

成雅。

どうぢや、宗任。それでもおのれは嗔り狂ふか。

なこそその關

貞頼。

殿上人の我々を土足にかけたら、源氏の家に疵が附かうぞ。

光平。

おのれは義家の家來ではないか。

師冬。

それでもわれ／＼を踏むか蹴るか。

四人。

どうぢやな。(宗任答へず。)

師冬。

手出しがならずばそれでよい。兎もかくも這奴をその樹の下へつないで置け。

左六太。

はあ。それ、起たぬか。(宗任を縁よりひき下して、梅の樹に縛る。)

萬壽。

武士の家來は武家の成敗。宗任はこのまゝ源氏へひき渡して、主人の成敗に任したらよさ

師冬。

さうなものぢやと存じまするが……。

左六太。

それは先づ追つてのことぢや。左六太、近う寄れ。(左六太にさゝやく。)

師冬。

(うなづく。)では、われ／＼も一旦は……。

師冬。

おゝ、大事な。退りや、退りや。われ／＼も奥へ行つて、あらためて酒宴を開くといた

萬壽。

さう。方々もまゐられい。萬壽も來やれ。

はあ。

(師冬等四人と萬壽は縁づたひにて奥に入る。侍女と童もつゞいて入る。左六太等もみな下のかた

へ去る。)

宗任。

(ひとり言)え、二口目には宗任を、あづま夷の、荒夷のと罵るが、おのれ等こそまことの夷ぢや。都といふところは人の智慧も賢しく、すむ家も美しく、風俗も華やかで、よろづが奥州の果に立優つてゐると思つてゐたが、それは表面ばかりの榮えで、一皮剥いたら我等とおなじことぢや。いや、なまじひに猿智慧があるだけに、却つてさま／＼の悪巧みをし居る。なにが都人ぢや。なにが公家ぢや。言語道斷、あきれ果てたる世のさまぢや。(奥にむかつて罵る。)

(左六太は太刀をぬき持ちて、ひそかに伺ひ出で、幾たびか躊躇したるが、やがて思ひ切つて切付くれば、宗任早くも覺りて身をかはす。)

宗任。

おのれ、最前に懲りもせず、又ぞろ宗任に仇するか。

左六太。

主君の指圖ぢや。是非もないわ。

宗任。

(あざ笑ふ。)たとひ兩手は繋がれても、おのれ等におめ／＼討たるゝ宗任と思ふか。

(左六太は物をも云はずに切つてかゝるを、宗任は足か動かして蹴倒し、左六太を足下に踏みつける。左六太また跳れ起きて無二無三に切つてかゝる中に、あやまつて樹につなぎし繩の端を切る。)

なこそその關



左六太。や、繩を切つたか。

花子。

(宗任は兩手をなくられながらも、繫がれし繩切れて進退自由となりたれば、猛然として左六太に飛びかゝる。左六太恐れて下の方へ逃げゆくを、宗任もついて追ひゆく。奥より花子忍び出づ。)  
(あたりを見廻す。)人々の酔うたる隙をみて、こゝまでぬけ出しては來たれども、用心きびしい屋形の内、とても逃るゝ途はあるまい。さりとして此處にうかくしてゐたら、どのやうな憂目に逢はうも知れぬ。いつそ宗任も囚はれ、わらはも囚はれて、うきに堪へねば死ぬるといふ、一伍一什をかき残して、この池へ沈んで果つるが優しであらう。

(花子は高欄に凭りて池をうかがひ、更に柵にありたる硯と料紙を持ち來りて、燈臺の下にて書置をかく。萬壽はすこしく酒に酔ひたる體にて、被物の衣を肩にして出で來り、この體を見てうかがひるたりしが、やがで徐にあゆみ寄れば、花子は心づきて、あわてゝ料紙を隠す。)

萬壽。

はて、お隠しなされますな。かやうな生業は致してゐれど、貴人高家のお屋形へも出入りして、いさゝか世にも知られてゐる萬壽、ひとの愁をよろこぶやうな淺ましい心は誓つて有ちませぬ。どうかしてお前をお救ひ申したいと、人知れず心を砕いてゐるを御存じなにか。して、その文は……。

花子。

(涙ながらに。)いつそ死なうと覺悟して……。

(萬壽は肩にしたる衣をすてゝ立寄る。)

萬壽。

さりとは氣の狭い。死ぬのはいつでも死なれます。死ぬにもまさる憂を忍んで、時節を待つが人の道ぢや。籠の鳥でも空へ出る時節がないとも限らぬ。なんとさうではござりませぬか。

花子。

とは云へ、いつまでも此のところ……。

萬壽。

それにはわたくしの思案もござります。悪いやうには爲ませぬほどに、まあ、まあ、お待ちなされませ。

花子。

あい。

萬壽。

兎も角もわたくしと一緒に……。

師冬。

(再び衣を肩にかけ、花子の手を取りてゆかんとする時、奥より師冬は酔うて出づ。)

萬壽。

やれ、酔うた、酔うた。おゝ、萬壽はそこにゐたか。して、花子は……。

師冬。

(花子をうしろに圍ひ。)いえ、一向に存じませぬ。

師冬。

はてなう。(云ひつゝ隠れたる花子に眼をつける。)や、そこにゐるは……。

なこそその關

萬壽。 師冬。

(花子) 顔を掩うて俯伏す。萬壽はあわて、肩にしたる衣をその上に被せる。これはさきほど頂戴の被け物でござりまする。

お、左様か。は、は、は。

(師冬はよろめきながら再び奥へ行きかゝる。花子は衣をあげて窺ふ。師冬は見かへる。萬壽はあわて、再び花子に衣をさせる。)

(11)

おなじ夜、源義家の屋形。

二重屋體にて、本縁附、階段の上り口。正面は襖、庭には立木あり。すべての裝飾は前の公家屋敷に對して、これは武家屋敷の特色を示すを要す。

(大江匡房は燈臺の下に兵書の巻物をひらきて讀す。八幡太郎義家は耳をかたむけて聽く。)

匡房。これは孫子の語ちや、鳥起るは伏也。たとへば野山を行くときに、木立または草叢のあひだより鳥のおどろき起つことあり。あるひは空とぶ鳥の俄に行を亂して、四方におどろき

義家。

散ることあり。これ即ち伏兵のあるしちやと思はねばならぬ。敵の伏せ勢ある時は、その上を飛ぶ鳥の群は行をみだすが習ひでござりまするか。む。

(空に雁の聲きこゆ。)

匡房。

お、雁が啼く。都もやうやく春となつて、雁は北へ歸るのであらう。奥州は日本の北の果ちや。お身がこれより向ふ方に、雁もおなじく渡つて行くわ。

義家。

春より夏にかけては奥州の沼に雁多し。(空を仰ぐ) 歸雁行をみだる時は……。

匡房。

そこに伏せ勢ありと思へ。かならず油断はつかまつりませぬ。義家も二日三日の後には奥州へ出陣する筈でござれば、敵地に入らば心をつけて、こよひの御教訓を吃と相守るでござりませう。

匡房。

わが許へたづね來て、はじめて教へを乞はれしよりわづかに半月を過ぎされど、一を聞きて十を悟るお身の器量には、匡房もほとく感心いたした。して、いよく奥州下向の日も切迫せられたか。

義家。

さきの九年のたゞかひに貞任一族ほろび盡して、奥州も一旦は鎮まりましたが、このころなこそその關

に至つて清原武衡家衛再び黨を組んで亂をおこし、奥羽二ヶ國は又もや戰の巷と相成りました。早速下向して切鎖めたくは存じますれど、邊士の亂れなれば捨置くも苦しからずと思召すにや、今日に至るまで官符を下したまはらねば、人馬兵糧をも徴發するに由なく、心ならずも日を送つて居りましたが、この場合、一日を弛うすれば禍はますます大きうなります。

匡房。お身の心中察し入る。世はいつも春ちやと思つてゐる公家達が生鈍い評定。とても埒の明くことではあるまい。

義家。ついでには義家、多くもあらぬ私財を抛つて差當りの軍用とし、いよく出陣と決心いたしてござりまする。

匡房。わしも公家の一人でかう申すは恥入ることぢやが、此頃は公家のひとり天下で、國をまもる武士達もある甲斐なしに扱はるゝ。まして商人百姓などは蛆蟲かなんどのやうに見下して、公家のみが嵩にかゝつて威勢を振ふ。げに淺ましい世のさまぢやよ。

(下のかたより縁傳ひにて、新羅三郎義光出づ、匡房を見てうやくしく一禮す。)  
兄御もいよく出陣とうけたまはる。お身も何かとその用意に忙しいことであらうな。

義光。その儀に就きまして、義光すこしくお願ひがござりまする。

匡房。して、その願ひとは……。

義光。兄も共に奥州へ下向仕まつりたる存じまする。卿にもかねて知し召さるゝごとく、武衡家衛は奥州の豪族、領分も廣く、人数も多く、要害險阻の地を塞いでをりますれば、先度の貞任誅伐と同様、とても一朝一夕ではその功をあぐることも覺束ないかと存じられまする。

匡房。就ては兄一人では心もとなく、お身も加勢にゆきたいと申すか。

義光。貞任退治の砌には、父頼義がまだ存命でござりましたが、唯今は兄一人……。(愁然として) お察しなされてくださりませ。

義家。兄弟のうちでも義家と義光とは、をさなき頃より取分けて睦まじく、今もおなじ屋形に日を送れば、兄を思ふ心もまた一入にて、共に奥州へ下らんといふ。その志は過分なれど、其方には右兵衛尉といふ役目がある。都へとどまるが上への御奉公ぢやぞ。

義光。その御奉公を思はぬではござりませぬが、家の大事、兄の大事を、唯おめく〜と見ておられませうか。父は無し、叔父はなし……。日頃たのみまらする兄上が、大事の軍にむか

なこそその關

ふ時、お供をねがふ義光を不忠とお叱りくださるな。奥州の野に寝ね、山に臥し、轡をならべ、袖をつらねて、生くるも死ぬるも兄弟一緒と、覺悟を定めてをりまする。

(義光は思ひ入つて云ふ。義家も黙して頭を垂る。)

匡房。兄弟の情は左もあらう。就てはこの匡房に絶つて、上へ取りなしを頼むと申すか。まことに無理ならぬ願の趣、匡房取りなして遣りたいは山々ちやが、なにを申すも此頃のありさまぢや。上に立つ公家ばらは遊樂のみに耽つて、軍のことなどは最初から碌々に念には置かぬ。

義家。

義家自身の出陣すらも、兎やかうと濫つて埒があかぬものを、かりにも右兵衛尉をうけたまはる其方が、役目をすて、出陣などは、いかに願うても及ばぬことぢや。なう、義光。生くるも死ぬるも兄弟一緒とは、よう云うてくれた、嬉しいぞよ。たとひ願ひはかなはずして、兄は陸奥、弟は都、分れ／＼にあるととも、心はたがひに連れ立つて行かうぞ。

(兄弟は顔を見あはせて悵然)

匡房。今も聞く通りの次第ぢやで、匡房をたのみ甲斐なしと恨んでたもるな。思ふにまかせぬが世の習ひぢや。しかし人間は覺悟が肝要、その覺悟次第でわが思ふことを貫く術がないと

も限らぬ。先づおちついて思案して見られい。

義光。

はあ。(考へてゐる。)

(義家の家來一人は侍女小冬を案内して、庭口より急ぎ出づ。)

小冬。

殿様、一大事でござりまする。

匡房。

あわたしや、小冬。留守に何事か起りしか。

小冬。

殿様お留守をうかゞひて、鬼のやうに扮装つたる多勢の曲者が亂入し、支へる人々を突退けて、姫上様を宙にかつぎ……。

匡房。

なに、匡房の留守に曲者押入つて、姫を奪ひ去つたとな。

義光。

(急いで。)して、曲者のゆくへは……。定めてあとを追はれたであらうな。

小冬。

なにを申すもこなたは無勢、しかも曲者は口々に、あるじの戻るまでは一人も外出はならぬ、迂濶に門を出るならば容赦なく切つて捨つるぞと、かやうに嚇して立去りましたので……。

匡房。

いづれも恐れて竦んで居つたか。

義光。

して、それは何時のことでごさるな。

なこそその關

小冬。やがて一响ほども前のこと。

義家。それならばなぜ早うは知らせられぬぞ。今となつては遅いなう。(歎息する。)

匡房。なには兎もあれ、早速立歸つて取糺さねば相成るまい。(起ちあがる。)

義家。不慮の椿事出来して、御心痛の段お察し申上げます。

義光。自然御用もござりますれば、早速にお使をくださりませ。

匡房。かたじけなうござる。では、小冬。

小冬。お供申すでござりませう。

(義家の家來は進んで沓を直す。匡房は縁を降りて、小冬と共に早々に立歸らんとするところへ、他の家來一人は白拍子萬壽を案内して出づ。)

萬壽。お、匡房の卿ではござりませぬか。

匡房。いかにも匡房ぢやが……。して、お身は誰であつたな。

萬壽。お見忘れなされましたか。先頃大納言殿の御屋形で、一度お目見得をいたしました白拍子の萬壽でござりまする。

匡房。さう云はるれば覚えがある。その萬壽が今頃なにしにこゝへ……。

萬壽。姫上様はたしかに御屋形へお送り申してまゐりました。

匡房。お、お身が姫を救うてくれたか。

義光。姫は無事か。(安心する。)

小冬。して、姫上様はいづこにおいでなされました。

萬壽。お話し申せば長いこと、先づ搔摘んで申ませうならば、姫上様は左中辨師冬卿の御屋形に囚はれの身とならせ給ひしを、いかにもしてお救ひ申さうと、人々に酒をすゝめて盛潰し、隙をうかゞつて姫上様を……。

匡房。助け出して給つたか。さりとて忝ない。匡房あつく禮をいふぞ。言語に絶えたる若公家

ばらの亂行、もはや堪忍相成らぬ。これよりすぐに師冬の屋形に向いて屹と詮議をせね

ばならぬ。

(匡房憤つて行きかゝる。萬壽はその袂をひき止める。)

萬壽。就きましては姫上様のほかに、まだひとり囚はれのお人がござりますれば、これをもお救

匡房。ひくださりませ。

それは何者ぢや。

なこそその關

萬壽。御當家の御家來、宗任殿……。

義家。なに、宗任が囚はれしと……。今出川まで使に出でて、歸り遅しと思ひしに、さてはこれも師冬卿の屋形に……。

義光。して、その仔細は……。

萬壽。姫上様を取返さうとて御屋形まで追うて來られたを、計略を以て生捕られました。

義光。宗任ほどの者がおめく生捕らるゝとは心得ぬ。なう、兄上。

義家。それは時の運で是非無いとしても、このまゝに捨て置いては、かれの身の上も案じらるゝ。如何致したものであらうな。

匡房。よい、よい。われはこれより師冬の屋形に向つて、かれらの亂行を叱り懲し、あはせて宗任をも救うてまゐらう。

義家。なにとぞお願い申します。さりながらお前様おひとりでは……。

匡房。何、かれら飽までも不法を申し張らば、宇治の關白殿に申し立て、きつと窮命さして見せう。先づ鎮まつて匡房のたよりをお待ちやれ。萬壽にも重ねて逢はうぞ。

萬壽。はあ。

(匡房は小冬を引連れて去る。義家の家來一人も送りてゆく。)

義家。萬壽とやら、よう知らしてくれただぞ。お身が注進にまゐらずば、義家は大事の家來一人を危く失ふところであつた。

萬壽。その御挨拶では恐れ入ります。わたくしも元は陸奥の生れ、宗任殿の名は豫てうけたまはつて居りますれば、猶々おいとしう存じまして……。

義光。宗任が聞かばさぞや満足に思ふであらう。われく兄弟よりもあらためて禮を云ふぞ。

萬壽。源氏の大将ともあるべき方々からそのお詞をうけたまはりますは、五十貫百貫の被け物を頂戴致したも同然でござります。では、これでお暇を……。

義家。大儀であつたぞ。

萬壽。はあ。

(萬壽は家來一人に送られて去る。)

義光。兄上、宗任は無事に戻るでござりませうか。

義家。匡房卿が行き向はれたれば、おほかたは無事に濟まうと存じて居るが、出陣の間際に臨んで宗任をうしなふは何ぼう無念ぢや。

なこそその間

義光。いかに相手が公家達なればとて、みだりに命を取るやうなことはござるまい。  
義家。さうは思ふがなう……。義家は心のうちで、宗任の無事を八幡大菩薩に祈つてゐるのぢや。

(ふたりは打案じてゐる。佐伯次郎經正、大原六太夫則明、伴七郎助兼、鎌倉権五郎景政の四人、いづれも怒氣を含んで庭口より入り来る。)

經正。殿、宗任が左中辨の屋形に囚はれたとはまことのこととござるか。たとひ彼に罪ありとも  
武家の家來は武家に引渡さるゝが法でござる。

則明。ましてや公家が不法を働いて、武士をみだりに捕ふるなど餘りの無體ではござらぬか。  
助兼。公家の増長にも程がござる。もうこの上は殿が堪忍せられても、われ／＼が堪忍なり申さ  
ぬ。

景政。これより左中辨の屋形へ踏み込んで、宗任を奪ひ返さうと存じまする。

經正。いさふれ、方々。

三人。心得申した。

(四人は勢ひ込んで行かんとす。)

義家。(驚きて。)あれ、止めい。

(義光は縁より馳せ降りて、四人のまへに立塞がる。)

義光。待て、待て、待て。其方どもを差向けてよいほどならば、この義光が疾くにまゐる。

義家。其方どもの憤りも然ることながら、唯今多人數が押掛けて、公家の屋形をさわがさば、事  
はいよく／＼縫れに縫れて、公家と武家との争ひを惹起さうも知れまいぞ。

義光。萬一お膝許にて右様の騒動起らば、その責は誰が負うぞ。

四人。ではござれども……。

義家。おとなしうしてゐれば、自然と双方の理非はわかる。源氏の武士は山法師とは違ふぞよ。

義光。まして奥州出陣の間際ぢや、立騒がずに控へてをれ。

(二人が詞忙しく叱りなだむれば、經正等も餘儀なく鎮まる。)

經正。さらば仰せにしたがひて、われ／＼一同兎もかくも差控へて居りまする。

義家。おゝ、合點がまゐらば重疊ぢや。行け、ゆけ。

四人。はあ。

(四人は顔を見あはせて、蓋々ながら立去る。)

義光。(縁に上る。)かやうに宥めては置きましたものゝ、公家衆もあまりに悪あがきが過ぎますれ

義家。

ば、かれらの立騒ぐも無理はござりませぬ。其方までが左様に申すか。

義光。

申します。筋目をいへば我々とても六孫王の嫡流、降つて武士となるとは申せども、今の藤原氏の一族に敢て劣らうとは思ひませぬ。しかるに彼は時を得て……。

義家。

いや、いや。それを云うてくるゝな。(苦悶の眉をひそめる。)公家の跋扈も堪へらるゝだけは堪へて見ようと思つてゐるのぢや。

義光。

堪忍が大事ぢやと、さきに宗任にも意見いたしました。斯様なことが度重なりますとなう。(嘆息する。)

(庭口より大わらはの宗任出づ。あとについで萬壽も出づ。)

義家。

(思はず起つ。)おゝ、宗任……。無事で戻つたか。

宗任。

おゝ、殿……。青公家めらに計られて、思ひのほかの不覺を取り、面目次第もござりませぬ。

義光。

さるにても、その身に怪我は無かりしか。

宗任。

いや、弱い奴原を相手にしてなんの怪我がござりませう。(萬壽を見かへる。)これなる女子の

萬壽。

意見について、一旦は鎖まつて居りましたが、公家侍めが忍び寄つてそれがしを不意討にしようとする。憎さも憎しと蹴倒して、繩の切れたを幸ひに、屋敷中を騙けまはつて、姫のありかを探しましたが、どこに隠したか一向にわからず、邪魔する奴原二三人をなげ飛ばして、高塀を跳りこえ、屋形をさして歸る途中。匡房卿にゆき逢うて、姫が御無事のたよりを承はり、先づは安堵つかまつりました。

義光。

わたくしも途中で宗任殿に逢ひましたら、宗任がいつはり云はぬ證人に、もう一度大將の御前まで一緒に来てくれと頼まれて、これまで連れ立つてまわりました。

義家。

善悪ともに宗任がいつはり云はぬは、我々もかねて存じて居る。なにはあれ、姫も無事、宗任も無事でめでたいなう。

宗任。

籠の鶴を持て。

義光。

はあ。(庭口より去る。)

義家。

鶴を持ち來らせて、なんとなされます。

義家。

義家はさきに鶴ヶ岡八幡の社頭に於てあまたの鶴を放ち、奥州にてほろびたる阿部貞任一門の菩提をとむらひしは、其方共も存じてをらう。今宵宗任が危難に逢ひたる時、われは



心ひそかに正八幡大菩薩を念じ、かれが身に恙なきやう祈りしに、かれは幸ひに無事で戻つた。

萬壽。さてはその報恩のために、生けるを放つ思召か。

義家。このごろ高麗の人よりわれに贈りし一羽の鶴あり。義家これを放つといふ黄金の札をそへて、日本國中放し飼にいたさうわ。

(庭口より宗任は先に立ち、家來二人は鶴を入れたる籠を持ち出て、縁さきに据ゑ置く。)

義光。宗任、兄上は其方が無事を祝うて、これなる鶴を放つと云はるゝぞ。

宗任。數ならぬ宗任をそれほどに思召すか。ありがたう存じまする。

義家。義光、籠をあけい。

義光。はあ。

(縁先に進んで籠をあける。鶴は羽搏きして空高く舞ひあがる。みなく空を仰ぎみる。)

籠鳥が雲井遙かに羽を伸してゆくわ。

おゝ、飛ぶわ。南へ……南へ……(鶴のゆくへを見送りて叫ぶ。)

幕

### 第三幕

おなじ年の春の末、奥州、勿來の關。

上のかたに寄せて荒れたる關屋あり。關といふは名のみにて今は著しく荒れたるさま見ゆ。關屋に沿うて形ばかりの關の戸あり。正面より下の方へかけては砂白き濱邊にて、近く碧海をみる。關の戸に沿うて櫻の大樹あり。下の方には磯馴松にまじりて櫻の立木あり。花は散りて雪のごとくに敷けり。

(關屋のうちには爐を設けて、關守の翁は爐のほとりに坐す。小次郎法師は三十前後の旅僧、笠をかぶりて錫杖を持ち、朽ちたる板縁に腰をかけてゐる。翁の孫娘、年十六歳。櫻の立木に倚りて、童等の遊ぶを見てゐる。翁の孫は十二三歳。ほかに男女打ちまじりて三人の童は、地にしきたる落花を手に掬ひつゝ遊びゐる。浪の音靜にして、沖をゆく船唄の聲遠くきこゆ。)

唄「濱を堰かれりや、私や海をゆく。  
戀のかよひ路、關はない。

なこそその關

孫娘。(翁も語らず、小次郎法師も語らず、しばしは黙して唄を聴く。わらべらは無心に遊びぬる。)

孫娘。(ひとり言のやうに。)あの船は都の方へ行くのであらうなあ。(海の方をみる。)

翁。(ひとり言のやうに。)花は咲いてもこゝらは濱風がまだ冷える。(爐に柴を炙べる。)

小次郎。(これもひとり言のやうに。)生きて再びこの關は越えまいと思つてゐたに、人の行末は測り知られぬものぢや。

孫娘。わしも都へ一度は行つて見たいものぢやが……。(やはり海を見てゐる。)

小次郎。都へ歸つたと何とならう。いつそ奥州へ戻らうか。(考へてゐる。)

翁。この柴はどうも燻つてならぬ。あすは近所の山へ行つて枯枝を拾つて來すばなるまいか。(柴を煽いでゐる。)

(童等は遊び飽きたる體にて起つ。)

孫の童。いつまで同じことしてゐても面白い。これからあつちの山へ行かうか。

童の一。いや、山は今朝も遊びに行つた。これからは濱邊へ行かうぞ。

童の二。わしは山ぢや。

童の三。わしは濱邊へ行きたい。

孫の童。え、わしと一緒に來いと云ふに……。

童の一。忌ぢや、忌ぢや。

孫の童。云ふことをきかぬと斯うするぞ。(落ちたる花をすくひて相手の童に浴せる。)

童の一。え、なにをするのぢや。

(これも花を擲ひてなげ返す。他のふたりも同じく花を投げて、落花のうちに亂れて闘ふ。孫娘は一心に海をながめてゐて心附かず。小次郎法師は進み寄りてひき分ける。)

小次郎。はて、仲のよい同士がなぜ争ふのぢや。兩方ともわしに免じて料簡せい。な、よいか、よいか。(宥める。)

翁。みんな仲好うせねばならぬぞ。むかしから云ふ通り、喧嘩は兩成敗ぢや。あまり悪あがきが過ぎると、どれもこれもその櫻の樹にくくりつけてしまふぞよ。

孫の童。ぢい様、わしが悪かつた。堪忍してください。

童の一。わしもあやまります。

童の二。堪忍して下さい。

童の三。堪忍してください。

なこそその關

翁。(打笑む)よい、よい。あやまるならば堪忍してやる。皆おとなしくして濱邊へ行きや。  
童等。あい、あい。

(童等は下のかたへ打連れて去る。小次郎法師は笠をぬぎて打笑みながら見送る。)

小次郎。子供は頑是ないものぢや。(もとの縁に戻る。)あれは皆こゝらの童達でござるかな。  
翁。(うなづく。)あの中にはわしの孫めもまじつて居りまする。

小次郎。わしが昔こゝを通つた時には、この關のほかに人家のやうなものも無かつたが、このころは漁師の家なども殖えたとみえまするな。

翁。殖えたと云うても知れたものぢや。關東と奥州との境には、本街道に白河の關、濱街道にはこの勿來の關、むかしは兩方に嚴重の關をかまへて、夷をふせぐ用心とせられたが、今は次第に世も治つて、關といふもほんの名ばかり、警固の兵者はひとりも置かず、わし等のやうな老人が關守といふ威めしい名をつけられて、婆と孫とを相手の留守居役ぢや。これ見られい。關屋の底は荒れはて、月も漏る、雨も漏る。風流といへば風流かも知れませぬ。はゝゝゝゝゝゝ。  
小次郎。なるほどさう聞けば、むかしにも優して荒れ果てたやうに見えまするなう。わしも昔この

翁。關を越えたときには、まだ華やかな若武者であつたが……。(追懷に堪へざる氣色)  
では、御出家もむかしは武士でござつたのか。

小次郎。むかしは八幡太郎義家公の家來で丹後小次郎時兼と呼ばれたものぢやが、仔細あつて今の姿となり申した。

(このうちに孫娘は關屋のかたへ戻り來りて、ふたりの話を聴く。)

翁。丹後小次郎……。(考へる。)おゝ、その小次郎といふ武士は、たしか阿部貞任の首を取つて、功名手柄をなされたお人ではござらぬか。

小次郎。(歎息して)貞任の首取つて一廉の手柄は顯したれど、その貞任の妹に松山といふ女子がござつた。これは懺悔ぢや、聞いてくださいされい。わしが金賣の商人に妾をかへて敵地へ間者に入込んだ砌に、測らずもその松山と戀におちて、一度は敵に捕へられ、すでに命も危いところを幸ひに宗任に救はれて、貞任が最期の場所へ参りあはせ、その首を打つて大將の實檢にそなへ、思ひもよらぬ面目を施したれど……。これを見られい。

(小次郎法師は肌につけたる胴巻様の袋より、疊紙につゝみたる女の黒髪を取出す。)

孫娘。(覗く)や、女子の黒髪ぢや。御出家様が何うしてそのやうなものを……。  
なこそその關

小次郎。

孫娘。

翁。

小次郎。

翁。

(さびしく笑ふ。)不思議に思はるゝはもつともぢや。戦ひ終つてわしも休息してゐるところへ、降参したる阿部宗任がたづねて来て、妹松山は兄貞任と最期を共にして、いさぎよく自害した。(涙なうかべる。)最期の際にこの切髪を宗任にわたして……。陸奥の女子が戀のかたみ……この小次郎に届けてくれと、涙ながらに頼んださうな。(聲を曇らせて語る。)

いとしいことでござりましたなう。

む。判りました。敵の妹とは云ひながらたがひに思はれた仲ぢや。最期の心根のあはれさが身にしてみても、こなたも弓矢を捨てられたか。

(頭をなでる。)頭髪も切りました。いつそ貞任に降参して、女子と生死を共にしたら、後の悔みもあるまいものを……。それも今は返らぬこと。せめては松山が菩提の爲、あはせて貞任一門が後世安樂を祈るがために、そのまゝ陸奥にとゞまりて、衣川の片ほとりに假の庵を結び、この切髪を佛壇にそなへて、朝夕回向を致してをりました。

敵の妹に戀したといふも不思議の因縁、それがために武士を捨てたといふも又因縁ぢや。わしもなんとやら物の哀れが身にしてみても来たやうな。お、孫めもあのやうに貰ひ泣きをしてゐますわ。

(風の音して櫻の花はらくと散る。翁は縁に出て打見やる。)

翁。

孫娘。

翁。

お、花が散る。寒いやうでも春は末ぢや。これ、孫よ。

(眼をふく。)あい、あい。

今の話をなんと聴きやつた。戀ゆゑには女も泣いて死ぬ。男はあたら武士を捨てる。なんぼう悲しいことではないか。お前もやがては戀を知る年頃ぢや。山ない男と戀をして、悲しい思ひをしやるなよ。

孫娘。

小次郎。

あい。よう合點して居りまする。

合點してゐながらも迷ふは戀ぢや。かやうに頭を剃り丸めても……(切髪を手取る。)春の夜、秋のゆふべには、戀しき人のおもかけを夢に見るさへ幾たびか。形ばかりは悟つても心は容易に悟られぬ。

(小次郎法師は切髪を袖にいだきて落涙す。翁と娘は顔を見あはせて、氣の毒さうに歎息す。關の

戸をあけて、南部太郎、津輕次郎の二人、奥州の山奥より來りし毛皮賣の商人のすがたにて出づ。

太郎。

次郎。

又お關を越えまする。  
どうぞお通しくださりませ。

なこそその關

孫娘。お前方はさつきもこゝを通られたが、けふは朝から幾たびか行きつ戻りつ、どうしたこと  
でござりまする。

太郎。いや、決して怪しい者ではござらぬ。わしら二人は奥州の山家から、毛皮を賣りに出た商  
人ぢや。

次郎。けふは生憎と折が悪うて、朝から些とも商ひがないので、同じところを歩きつ戻りつして  
ゐますのぢや。

翁。はて、こなた衆は商人のやうにもない。このやうな人家の少いところを、幾たび行きつ戻  
りつしてゐたとて何の商ひがあるものか。もつと前の驛へでも行つてみては何うぢや。

太郎。ありがたうござりまする。  
次郎。では、次の驛へまゐりませう。

(二人に顔を見あはせて早々に下のかたへ立去る。小次郎法師は切髪をもとの袋に収めて、二人の  
うしろ姿を訝しげに見送る。)

小次郎。あの毛皮賣の商人は先刻もこゝへ見えたのでござるか。

孫娘。あい、つひに見馴れぬあの二人づれが、今朝からこゝらをうろくしてゐまする。

小次郎。當人どもの云ふ通り、奥州の山奥からのぼつて來た商人らしい風俗ぢやが、どこやらで見  
たやうな。

孫娘。おまへは御存じでござりまするか。

小次郎。見覚えがあるやうには思へども、はて誰であつたか思ひ出されぬ。いや、長ものがたりで  
時が移つた。もうお暇いたさうか。

翁。では、もうお立ちでござるか。

孫娘。道中お氣をおつけなされませ。

小次郎。また下りには逢ひませうぞ。

(小次郎法師は笠を深くして、これも下の方へあゆみ去る。これと行き違ひに、下のかたより關守  
の廻、孫の手をひきて出づ。)

孫の童。ちい様、姉様。今戻りました。

姫。わしが隣村から歸る途中、あの濱邊で貝を拾うてゐるのを見かけたれば、一緒に連れて戻  
りました。

翁。おゝ、もうよい加減に遊んだであらう。ちつと内へ這入つて、おとなしうしてゐやれ。

孫の童。

あゝ、あゝ。

(童は内に入りて翁と共に爐のほとりに坐す。孫娘は縁を腰をかける。)

孫娘。

旅の御出家様が今こゝにお休みなされて、かなしいお話を聴きました。

翁。

敵の女に戀をして、女は自害して死ぬ、自分は出家になられたといふのぢや。

姫。

わし等夫婦もこの奥州に生れたのではなかつたが、花の都からかう云ふところへ下つて来てさびしく一生を送るのも、やはり若い時の迷ひからぢや。

翁。

はて、孫たちの聞く前でそんな昔話はせぬものぢや。はゝゝゝ。

(遠寺の鐘きこゆ。八幡太郎義家は弓をもちて馬に乗り、阿部宗任は口をとりてしたかふ。ついで佐伯次郎經正、大原六太夫則明、伴七郎助兼、鎌倉權五郎景政、ほかに白旗を持ちたる軍兵等大勢したがふ。いづれも後三年式の武装なり。)

宗任。

關守やある。八幡殿のお通りであるぞ。(呼ぶ。)

翁。

(關守の翁、姫、孫娘、わらべ等、出で來りて迎へる。)

關の者一同お出迎へを仕りましたとござりまする。

(義家は馬を降りて、家來に持たせた床几にかゝる。家來共はその左右に居列ぶ。)

義家。

そのむかし貞任征伐の砌にも、上り下りにこの關を越えたることあり。弓矢とる身の是非なさは、歌枕見る風流の旅にはあらで、物の具いかめしう身をかためて、再び陸奥へ向ふのぢや。關守の翁は義家を見識つて居らうな。

翁。

よう存じて居りまする。大將にはいつも御變りもあらせられず、憚りながらおめでたう存じあげまする。

義家。

翁も堅固で重疊ぢや。が、別れて年をふるまゝに、關屋の庇も荒れ果て、關守の額も翁寂びたわ。たゞ變らぬは關の戸の山櫻、昔ながらに咲き匂うてゐるなう。

翁。

その櫻もこのころは潮風が暴いので、年々に枯れるばかりでござりまする。いや、かう申す翁も姫も、潮風と年波とで、やがて枯れるかも知れませぬ。はゝゝゝ。

義家。

姫もすこやかに見ゆるではないか。(進み出づ。)

義家。

承はりましたが、今度もそのやうに續きませうか。あの時のいくさは九年もつゞいたとかそれは義家にも判らぬが、敵は名に負ふ武衛家衛ぢや。一年や二年では濟むまいぞ。

翁。

御苦勞お察し申上げまする。(義家の家來どもを見まはして。)おゝ、どなたも皆遅しさうな方なこそその關

經正。

方のお揃ひぢや。まけず劣らず功名をなされて、一日も早う凱陣を祈つてをりまする。お、よくぞ申してくれた。武衛家衛が奥州に威勢をふるひ榮華に耽る身となりしは、父の勳功とは申しながら、ひとつには我君の御恩であるぞ。

則明。

それをわすれて妄りに兵亂を興し、わが君より再三だめ申さるゝと雖も、碌々に御返事もつかまつらず、八幡太郎ならば相手に取つて不足はないなどと、廣言を吐いて居るとは憎き奴等ぢや。

叻兼。

我々これより攻め下つて、片端より踏み潰し踏み破り、源氏の武士の手並をみせてくるゝわ。

景政。

彼等がいかに狂ひまはるとも、所詮は貞任の二の舞ぢや。

姫。

お、どなたも勇ましいことござりまする。その貞任で思ひ出しましたが、先年貞任を攻めほろぼして、都へ凱陣遊ばすときに、熊のやうな荒夷を生捕にしてお連れなされましたが、あれは其後どうしましたな。

翁。

(義家の家來どもは顔のみあはせて、返事に困つてゐる。)  
さうぢや。さうぢや。あの熊のやうな大男は都大路を引きまはされて、それから鬼界ヶ島へでも流されたか、但しは六條河原で獄門にでも梟けられたか。いづれそんなことござりませうな。

宗任。

(家來共はいよ／＼返事に困る。馬の口を取りてうしろの方に控へゐたる宗任はこの時進み出づ。)  
その熊のやうな荒夷はすなはち私ぢや。この宗任ぢや。

翁。姫。

え。

宗任。

鬼界ヶ島へも流されず、六條河原へも晒されず、八幡殿の御家來に加へられて、今では然るべき武士となつたわ。(笑ふ。)

翁。

(氣の毒さうに。)いや。これは、これは。そのお人がそこにゐるとは知らず、飛んだ蔭口を申しました。どうぞ堪忍してください。

姫。

併しまあ、そんな立派なお武士にならしやられて、こんな目出たいことはござりませぬ。わが思ふことを憚りなく云ふところに質朴なる人情の忍ばるゝものぢや。宗任、かならず氣に支へまいぞ。

義家。

はあ。

宗任。

われ／＼は暫く關屋の奥へまゐつて、あとなる人數のつゞくを待たん。翁、案内してくりなこそその關

翁。

はあ。(起ちあがる。)さあ、かうお出でなされませ。

やれ。

(翁は先に立ち、義家についで宗任は馬の口をとり、經正、則明、助兼、景政、その餘の軍兵等いづれも關の奥に入る。廻と孫むすめと童の三人はあとに残る。)

廻。

やれ、やれ、めつたに口は利かれぬものぢや。あの熊のやうな荒夷が立派なお武士にならうとは……。まるで松の木が櫻に變つたやうなものぢや。

孫娘。

あのお人もむかしは奥州の夷でござつたのか。

廻。

さうぢや。それが久しく都へ行つてゐるうちに、見違へるやうなお人になつてしまつた。

孫娘。

(ひとり言のやうに。)かうと知つたら、さつきの御出家に頼んで、みやこへ連れて行つて貰へばよかつたものを……。

廻。

(聞き咎める。)お前はみやこへ行きたいか。

孫の童。

わしも都へ行つてみたい。

廻。

行きたいとて百里にあまる遠いところぢや。めつたに行かるゝものではない。

(むすめは本意なげに縁に腰をかける。關のうちより宗任出づ。)

廻。

(恐れて。)あゝ、もし、堪忍してくだされ。定めてお腹も立つたであらうが、今のはわし等が云ひ過しぢや。

宗任。

いや、いや、私はその不足を云ひにまゐつたのではない。(打笑みて。)大將が白湯の所望ぢやと仰せらるゝ。早う持つてゆけ。

廻。

(安心して。)おゝ、左様でござりましたか。唯今すぐに差上げます。

(廻は土瓶の湯を茶碗につき、盆にのせて關の中へ持つて入る。)

宗任。

わしも湯がほしい。汲んでくりやれ。

孫娘。

かしこまりました。(縁はあがる。)

宗任。

わしはこれでよい。(腰にさしたる馬柄杓を出す。)

孫娘。

あい、あい。

(宗任は柄杓に湯をつがせて飲む。)

孫娘。

お前様もむかしは奥州のお人ぢやさうなが、久しく都にすみ馴れたので、見違へるやうに立派にならしやれたと、お祖母さまも云うてござりました。

宗任。

(笑ふ。)はゝ、立派になつたかなう。立派になつたとは姿のことか。なにさま形だけは都



の人らしうなつたが、心は矢はりむかしの夷ぢや。いや、却つて昔よりも劣つたかも知れぬぞ。この上いつまでも都にゐたら、形ばかりはます／＼立派になつて、腸はます／＼腐るかも知れぬわ。

孫娘。(訝がるごとく。)何故そのやうなことを云はしやりまする。都はよい所ぢやと常々聞いてゐまするに……。

宗任。

(苦笑ひする。)都は好いところぢやなどと誰が教へた。いや、鄙に育つたお身たちが都を羨むは無理もない。この宗任とても昔はみやこを羨んだものぢや。羨まなければこそ降参して、望みの通りに都の人となつた。ところが、いや、思ひのほかぢや。まあ、その話を聞いて聞かさうか。(縁に腰をかける。)

孫の童。

どうぞその都の話聞かしてくだされ。

宗任。

都といふ所はなう。こゝらとはまるで違つて、ひろい路も拓けてゐる、美しい屋形もかすかずある。人は車に乗る、輿に乗る。ゆきかふ女の風俗も、わし等がやうなものではない。もつと／＼美しい華やかなものぢや。總てがこゝらと比べたら、地獄と極楽ほどの相違がある。

孫娘。

おま。(眼をかゞやかして進み寄る。)

宗任。

が、それは唯うはべだけのこと、たとへば腐つた酒を美味しい甕に盛つたやうなものぢや、その内をのぞいたら眼もあてられぬわ。先づ第一に公家といふものがおそろしい威勢を振ふ。いや、眞實強いものが威勢を振ふのならばまだ堪忍もなるが、かれらはたゞ先祖傳來の位といふものを恃んで、したい三昧のことを爲居る。立派な武士も商人もその脊の下に踏みにじられて、たゞ齷齪と働いてゐる。花の都などと歌によむが、つまりは大きな溝泥のなかに、大勢の人間が蛆蟲のやうにうよ／＼と蠢いてゐるばかりぢや。

孫娘。

おまへは怖ろしいことを云はしやりまするなう。

宗任。

いや、嘘でない、唯ありのまゝを語つてゐるのぢや。(奥を指さす。)あれにごさる大將のやうな偉いお方は、広い都にも多くはない。大抵は嘘つきぢや、慾張りぢや、ひとを倒しても己さへよければ構はぬといふ徒ぢや。まだそのほかにも數へたら限りもないが、兎にかくに好んで行くところではない。都といふ名にაცがれて、無闇にその溝泥のなかに踏み込んだら、おそろしい目に逢はうぞよ。どうぢや、わかつたかな。

孫娘。

でも、ほかの人々は云ひ合はしたやうに、都はよい所ぢやと云ひまする。

宗任、はて、まだ判らぬか。(苦笑ひする。)

(奥より廻出づ。)

廻、あ、これ、大將様ばかりでなく、餘のお武士衆も白湯が所望ぢやと仰せられる。おまへも手傳つて運んでくりや。

孫娘、あい、あい。

廻、大勢の人々ぢや。とても白湯ばかりでは足るまい。その水も一緒に運んだがよい。

孫娘、あい、あい。

(廻は土瓶を持ち、むすめは水桶を持ち、わらべは盆にありたけの碗をのせて、いづれも奥へ運んでゆく。宗任も柄杓を腰にさして、無言にて奥に入る。下のかたより南無太郎、津輕次郎は毛皮を捨て身輕に扮装ち、あたりに人なきを見てさゝやき合ひ、いづれも山刀をぬき放して關の内を窺ふ。そのあとより小次郎法師は笠を深くして出て來り、木かげに忍びて二人の様子を窺ひある。ふたりはやがて首肯き合ひて關に入らんとす。小次郎法師は笠をぬき捨て、走り寄る。)

小次郎、待て。(錫杖にて二人を掻き退ける。)

太郎、え、邪魔するな。

(ふたりは山刀を閃めかして先づ小次郎法師に切つてかゝる。こなたは錫杖を以て渡りあふ。次郎は遂に刀を打落され、小次郎法師に組んでかゝるを、小次郎は組みふせる。太郎は上より小次郎を刺さんとす。この時、關のうちより佐伯次郎經正出て來り、かくと見るより走りかゝつて、うしろより太郎を組み止む。次郎は跳れかへすを、小次郎はまた組敷かんとす。太郎はふり拂つて行かんとするを、經正は又ひき止め、四人は上になり下になりて捻合ふ。關のうちより宗任出づ。)

宗任、(いづれを助けんかと躊躇せしが、やがて敵味方の顔を見ておどろく。)いづれも待たれい。太郎も

次郎もしばらく待て。宗任がこれにあるぞ。待て、待て。(双方を制す。)

經正、(太郎を組み敷きながら)宗任、こやつは抑も何者ぢや。

宗任、元は宗任の家來南部太郎と申す者ぢや。(云ひつゝ一方の小次郎法師と次郎とを引きわけける。)

次郎、お、三郎殿か。

小次郎、宗任か。

宗任、めづらしや、小次郎法師か。

小次郎、これは不思議の對面ぢや。

(經正は組み敷きたる太郎を放す。太郎と次郎は其處にうづくまる。)

なこそその關

宗任。先づおのれ等から詮議せねばならぬ。如何にしてこゝらを徘徊し、かゝる始末は及んだのぢや。

太郎。主君貞任殿御最期のみぎりに、一旦は冥土のおん供と覺悟せしが、俄にまた所存をかへ、山奥に身をかくして時節を待つて居りました。

次郎。然るにこのたび奥州再びみだれて、義家が征伐に下るといふ。亡君の恨みを報ふはこの時ぞ。途中に於て狙ひ撃にせんと、毛皮賣の商人に姿をかへ、こゝらあたりを徘徊して居りましたが、見あらはされて斯くの次第、残念至極でござりまする。

宗任。(思案して。)小次郎御坊にも經正にも、宗任折入つてお願ひがござる。これなる二人の家來どもが處置は、それがしにお任せくださらぬか。

經正。お身がむかしの家來とは云へ、兎もかくも大將を狙ひ撃たんと企てし者共ぢや。このまゝお身に預くるのは……。なう、小次郎。

小次郎。いや、宗任にはまた然るべき所存もあらう。このふたりの者、お預けなされても苦しうござるまい。

宗任。おあつかひ忝なう存する。して、小次郎の御坊にはこれより何方へまゐらるゝぞ。

小次郎。衣川のほとりに庵を結びて、松山……。(云)かけて宗任と顔のみあはせ、兩人黙然(もくねん)をはじめ、貞任その他の人々の回向に月日を送りしが、このごろ奥州再び亂れて、修羅の巻の争

ひを眼のあたりに見るも淺ましく、世の治るまでは京か鎌倉へ身をよせんと、これまで上つてまゐりしところ、八幡殿御着とうけたまはり、久し振りにて御目見得をいたさんと、次の驛より取つて返せしに、測らずもこの二人がすがたを認め、しばらく昔の武士に立復つて……。 (錫杖を見て。)得物を揮つた次第でござる。

經正。よくぞ尋ねてまゐられた。さらばすぐさま殿に見參……。それがし御案内申すでござらう。(先に立つ。)

小次郎。(宗任に會釋して)然らば御免くださいされい。

宗任。(宗任は無言にて會釋す。小次郎法師は經正にしたがひて關に入る)

太郎も次郎も近う寄れ。

二人。はあ。

宗任。亡き兄上のために恨を報はんといふ、そのこゝろさしは殊勝ぢやが、左様な企ては今をかぎりに思ひ切つて、宗任の行くところへ一緒にまゐらぬか。但しおのれ等が飽までも八幡

殿を狙ふならば、この宗任がゆるさぬぞ。

して、我々のお供するところは……。

宗任、委しくは後に語らう。一先づこゝを立退いて次の驛にて相待ち居れ、われも聽てあとから行かうぞ。

次郎、では、次の驛までまゐつて……。

宗任、むゝ、早う行け、ゆけ。

二人、はあ。

(ふたりは落ちたる刀を鞘に収め、一禮して下のかたに去る。)

宗任、(あとを見送る。よい折柄に測らずもふたりの家來を拾うたわ。いさ、奥へまゐつて殿にお暇を願はうか。(關の奥に入る。))

(新羅三郎義光は武装して馬を早めて出づ。)

義光、關守は居らぬか。武者一騎打ち通るぞ。(呼ぶ)

(關守の奔出づ。)

義光、大將はいづこにおはす。都より新羅三郎がまゐりしと申上げい。

翁。

かしこまりました。(關に入る。)

(義光は鞍を下りて、樹に馬をつなぐ。關のうちより義家は先に立ち、宗任は馬の口を取り、經正、則明、助兼、景政の四人したがひて出づ。)

おゝ、義光か。

義家、兄上、おあとを慕うてまゐりました。

義光、それ、敷皮を……。

(則明は持つたる敷皮を義家に敷き、景政はおなじ敷皮を義光に敷く。義家と義光は相對して坐す。)  
義家、早速ながら義光は如何にしてこゝまでまゐりしぞ。[匡房卿の御取りなしにて、奥州下向を許されしか。]

義光。

(頭をふる。いかな、いかな。兄上の御意見にて一旦は思ひとゞまりましたが、曩にもたびたび申せし通り。このたびの合戦は家の大事、いかに思ひ返しても唯このまゝには居られませぬ。たとひ後日にいかなる御咎めを受けなば受けよ。兄と生死を俱にするが、弟の道と胸をさだめ、恐れ多くも上よりたまはりし右兵衛尉を打ち捨て、官も位もなき唯の新羅三郎義光と相成つて、兄上よりも三日おくれて京を立退き、夜を日についで路次をいそなこそその關

ぎ、たゞいま到着仕つてござりまする。御意見にそむきし義光が自儘の振舞は幾重にも  
お免しくださりませ。

義家。

(涙ながらかへる。)家にありてこそ叱りもすれ、意見もすれ、兄の行末おぼつかなきに、おの  
が官位も打捨て、陸奥の果まで行く、と慕ひ來りし弟を、叱つて歸す兄があらうか。

宗任。

萬一後日に御咎めあらば、かならず義家が身にひき受けて、其方に難儀はかけまいぞ。  
(思はず叫ぶ。)殿、よくぞ云はれた。新羅殿もよくぞ參られた。それでこそまことの兄弟で  
ござるわ。

義光。

さだめて御叱りもあらうかと、みち／＼も案じて居りましたが、そのお詞をうけたまはつ  
て、義光も安堵仕りました。(經正等にむかひて。)みなも聞け、義光は兄上の御許しを受けて、  
けふより其方共と一緒にゆくぞ。

(經正等はみな勇み立つ。)

經正。

思ひがけなく新羅殿がまゐられたは、龍に雲と云はうか、虎に翼と申さうか。

則明。

千騎萬騎の味方を得たるよりも、心強う存じまする。

助兼。

景政。

義家。

まことにお目出たうござりまする。  
(勇んで。)お、みなも喜べ。前の奥州征伐には、義家は父子ふたりであつたが、今度も  
義家は一人でない。兄弟ふたりが駒をならべて、むかしの戦場に再び立たうわ。いざ打連  
れて關を越えん。宗任、馬牽け。(起ちあがる。)

宗任。

あいや、しばらく……。今この際に宗任すこしく願ひがござりまする。

義家。

あらためて願ひとは……。  
こゝは陸奥と常陸との國境、これまでお送り申上げたれば、なにとぞそれがしに御暇下し  
置かるゝやう願ひ申上げまする。

義光。

宗任は陸奥へなぜ向はぬ。  
(慨然として。)陸奥は宗任の故郷……阿部の一族がほろび盡したる故郷でござりまする。國  
やぶれて山河あり。宗任いたづらに生きながらへて、故郷の山や河を見るに忍びませぬ。

義家。

さらばこのまゝ都へ歸るか。

宗任。

いや、いや。再びみやこへ歸る心はござりませぬ。宗任、日本の北の果に生れましたれば、  
更にみなみの果の九州へ渡つて、新しき天地を拓かうと存じまする。

其方は都を見限つたとみゆるな。

思ひのほかでござりました。

よい、よい。この上は其方の心まかせぢや。義家とは遠うて自由の身の上、さきの夜放した鶴のやうに、行きたいところへ飛んでゆけ。

はあ、ありがたうござりまする。(經正等に。)方々、お聞きの通りぢや。残念ながら是非に及ばぬ。

こゝでおわかれ申すと致さう。

道中無事を……。

祈り申すぞ。

(宗任會釋す。關のうちより小次郎法師出づ。)

宗任殿。お身がこれより引返すならば、途中まで道連れと相成らうか。

これはよい道連れぢや。さらば殿……。

堅固で暮せ。

(義家と義光は馬にのる。則明と景政はその馬の口を取る。風の音して、櫻の花は雪のこゝろに散る。)

義光。

宗任。

義家。

宗任。

經正。

則明。

助兼。

四人。

小次郎。

宗任。

義家。

る。關守の翁出づ。

翁。

義家。

小次郎。

宗任。

義家。

義光。

義家。

義光。

二人。

おゝ、又しても花が散る。方々の鎧の袖に雪のやうに降りかゝりまするわ。

(馬上にてかんがへる。)吹く風をなこそその關と思ひしに、道も狭に散る山櫻かな。

その櫻花のちりぐに……。

われは南へ……。

われは北へ。

思ひ思ひに別れて行くか。

さらば宗任。

小次郎法師も無事を祈るぞ。

はあ。お別れ申しまする。

(宗任と小次郎法師は一禮して向うへあゆみ去る。義家と義光は手綱を握りながらあとを見送る。櫻の花しきりに散りかゝる。)

幕

平  
家  
蟹

明治四十四年九月作。

明治四十五年(大正元年)四月。浪花座(大阪)初演。

初演當時の主なる役割——玉蟲(尾上梅幸) 玉琴(澤村宗十郎) 那須與五郎宗春  
(市川右團次) 雨月(市川登八) など。

登場人物——官女玉蟲。その妹玉琴。官女吳羽の局、綾の局。那須與五郎宗春。那須の家來彌藤二。旅僧雨月。濱の女房おしほ。那須の家來。濱のわらべなど。

(1)

壽永四年五月、長門國壘の浦のゆふぐれ。あたりは一面の砂地にて、所々に磯野松の大樹あり。正面には海をへだてて文字ヶ關遠くみゆ。浪の音、水鳥の聲。

(平家没落の後、官女は零落してこの海濱にさまよひ、賤しき業して世を送るも哀れなり。吳羽の局、綾の局、いづれも三十歳前後にて花のさかりを過ぎたる上臈、磯による薄屑を籠に拾ふ。)

吳羽。なう、綾の局。これほど拾ひあつめたら、あす一日の糧に不足はござるまい。もうそろそろと戻りませうか。

綾の局。この長の日を立ち暮して、おたがひに苛うくたびれました。



奥羽。

今更いふも愚癡なれど、ありし雲井のむかしには、夢にも知らなんだ賤の手業に、命をつなぐ今の身の上。浅ましいとも悲しいとも、云はうやうはごさらぬなう。

綾の局。

まだうら若い上臈達は、泣顔かくす化粧して、ゆきゝの人になさけを賣り、兎にもかくにも日を送れど、盛りを過ぎし我々は見かへる人もあらばこそ、唯おめくんと暮しては、飢ゑて死なねばなりませぬ。

奥羽。

せめて一日でも生きたいと、かうして働いてはゐるものゝ、これがいつまで續かうやら……。(嘆息しつゝ空を仰ぐ。) おゝ、こんなことを云うてゐる間に、やがて日も暮れまする。

綾の局。

ほんに空も陰つて来ました。このごろの日和辯で、冷たい潮風が吹いて来ると、つゞいて雨の來るのが習。濡れぬうちに戻りませうか。

奥羽。

苦屋に雨の漏らぬやうに、軒のやぶれも繕うて置かねばなりますまい。召仕もなき侘住居は、なにやら彼やら心忙しいことでごさるなう。

綾の局。

(二人は籠を携へてとぼくとおゆみ去る。濱のわらべ甲乙丙の三人出づ。乙は赤き蟹を糸に縛りて持つたり。)

童乙。

どうぢや。平家蟹はまだゐるかの。

童甲。

あいにくに夕潮が一杯ぢや。これでは蟹も上りさうもないぞ。では、あすの朝、潮の干た頃に捕りに来ようかなう。

童丙。

(彌平兵衛宗清、四十餘歳、今は佛門に入りて雨月といふ旅姿、笠と杖とを持ち出て出づ。)

雨月。

これ、これ、平家蟹とは……。どのやうな蟹ぢやな。これぢや。見さつしやれ。

童乙。

(蟹を見せる。雨月はちつと視る。)

雨月。

この蟹をなぜ平家と云ふのか。この壇の浦で平家が亡びてから、つひぞ見たことのないこんな蟹が澤山に寄つて來ましたのぢや。

童甲。

蟹の甲には人の顔がみえてゐます。

童乙。

これ、このやうに、噴つた顔をしてゐます。

童丙。

(指さし示せば、雨月はつくづく視て、思はずぞつとする。)

雨月。

おゝ、なるほど蟹の甲にはありく人と人の顔……。しかも凄じい憤怒の形相……。平家がこゝでほろびた後に、このやうな不思議の蟹が……。

三人。さうぢや。さうぢや。

雨月。白きは源氏……赤きは平家の旗の色……。あかき甲に噴れる顔は……。平家の方々のたましひが、蟹に宿つて迷ひ出づるか。

童甲。ぢやに因つて、平家蟹と云ひますのぢや。

(雨月は黙して蟹をながめてゐる。)

雨月。これ、子供よ、濱育ちとは云ひながら、無益の殺生はせぬものぢや。この蟹を海へ放してやれ。その代りに私がよいものを遣りませうぞ。

童乙。よい物をくださるなら、すぐに放してやりませう。

雨月。お、聞分けのよい兒ぢや。その代りには何がよからうぞ。お、これがよい。(腰をさぐりて櫛を入れたる麻の袋をとり出す。) さあ、これをやる程に、蟹は早う放して遣つたがよい。

(童は袋より櫛をすくひ出して見る。)

童乙。これはなんでござるな。

雨月。それは櫛といふもので、水か湯にひたして喫べるのぢや。

童乙。ありがたうござりました。

(童は蟹の糸をときて、うしろの海に放ちやる。)

雨月。この後もあの蟹を捕へてはならぬ。平家のたましひが乗憑つてゐるからは、どのやうなおそろしい祟があらうも知れぬぞ。

三人。あい。あい。

(わらへ等は去る。雨月はあとを見送る。)

雨月。日暮れてあたりにもなし、忍ぶ身には丁度幸ひぢや。海に沈みし御一門の尊靈に、よそながら御回向申さうか。

(雨月は濱邊にひざまづき、珠数を繰りつゝ、海にむかつて回向す。官女玉蟲、甘藷、下髪、被衣をかぶりて出て、松の木かげに立ちて窺ひゐるうちに、雨月は回向を終りて起たんとす。)

玉蟲。あ、もし……。

(雨月はたちどまりて透し視る。)

雨月。どなたでござりまするな。

玉蟲。お、宗清殿……。わらはぢや、玉蟲ぢや。

(近寄りて被衣を取る。かくと見るより雨月は再び土にひざまづく。)

平家蟹

雨月。

いかにも彌平兵衛宗清、不思議なところでお目にかゝりました。

玉蟲。

なんの不思議なことがあらう。こゝは平家が沈んだ海ぢや。平家にゆかりある者は、こゝを去つてどこへ行かうぞ。見ればお身はさまを替へて、佛の御弟子となつたよな。

雨月。

平家没落の後、甥の景清に誘はれ、肥後の山家にかくれて居りましたが、亡き方々の菩提をとむらふ爲め、御覽の通りにさまをかへて、今は世をすて武士を捨て、たゞ阿彌陀佛を念じながら、諸國をめぐる居りまする。

玉蟲。

さりとは殊勝なことぢや。(嘲るごとくに打笑む。)して、景清はなんとした。

雨月。

かれは思ひ立つたることありとて、わたくしが頻りに止むるも肯かず、鎌倉へ忍んで下りました。

玉蟲。

む、鎌倉へ……。家重代といふ痣丸の銘刀を身につけて行つたであらうな。

雨月。

おほかた左様でござりませう。

玉蟲。

さすがは景清、あつぱれの者ぢや。その痣丸に源氏の血を……。大方さうであらうの。

雨月。

そのやうに申して居りました。

玉蟲。

(心地よげに首肯く。)聞くもなかくに勇ましい。たとひ景清ならずとも、武士たる者には

雨月。

それほどの覺悟が無うてはなるまい。なう、宗清。過ぎし彌生の廿四日、平家の一門はこたくこの海に沈んだ。きのふけふとは思へども、數ふれば早や二月を過ぎて、けふは恰も御命日ぢやぞ。あれ、あの向うに……。松林の薄黒う見ゆるは……。文字ヶ關から大里の濱、あれをうしろにして味方の兵船はおよそ五百艘、さながら大鳥が翼をひろげたやうに、左右に開いて陣取つてゐたのぢや。

今わたくしが踏んでゐる濱邊には、源氏の大軍が眞黒に屯して居りました。まして海の上には兵船およそ三千艘、すくなくも味方の五六倍はあつたと覺えまする。それが一度に漕ぎよせて來る。なにを申すも多勢に無勢……。 (嘆息する。) わづか一日の軍で……。思へば果敢ないこととござりました。

玉蟲。

とは云へ、平家は最期まで勇ましく闘うたぞ。打物は折れ、矢種はつき、船は碎け、人は沈んで果つるまで、一人も卑怯に降参するものなく、口々にかたきを呪うて死んだ。(恨の眉をあげる。) お身はまだ知るまいが、雨風あれて浪高き夜には、海に數しれぬ鬼火あらはれ、あまたの人の泣く聲も悲しげにきこゆるぞ。海にほろびたる平家の一門、屍は千尋の底に葬られても、たましひは此世にとゞまつて、百年も千年も盡きぬ恨をくり返すのであ

雨月。

らうよ。  
繫念五百生、一念無量劫とは申しながら、罪ふかいは修羅の妄念でござりまする。とは云へ、世になき人の執念は、法華經の功力によつて、成佛解脱の術もあれど、容易に度しがたいは、世にある人の執念……。甥の景清にも一切の執着を去つて、復讐の企てなど思ひ切りまするやう、いくたびか意見申したれど……。

玉蟲。

景清は背かなんだか。おゝ、さうであらう。そのやうな生悟りの説法めいたことは、妾とても背くまいぞ。

雨月。

では、お前さまも……。

玉蟲。

わらはも源氏を呪うてゐるのぢや。

雨月。

源氏を呪うて……。

玉蟲。

なにを驚くことがあらう。煩惱もあり、執着もあればこそ、人はこの世に生きてゐるのぢや。執念は人の命ぢや。一切の煩惱や執着を捨つるほどなら、冷い土の下に眠つてゐるがましであらう。

雨月。

憚りながら、それは凡夫の迷ひ……。

玉蟲。

はて、くどう云やるな。お身とわらはとは心が違ふぞ。

玉蟲。

(細雨ふり出づ。玉蟲は空を仰ぐ。)

玉蟲。

五月の習、また雨となつたか。これ、宗清、お身は行手をいそぐ身でもあるまい。こよひは一夜逗留し、晴間を待つて出立しや。

雨月。

して、おまへ様のお住居は……。

玉蟲。

この濱づたひに五六町……。あれ、あの一本松が目じるしぢや。

雨月。

では、先帝のみさゝぎに参拜して、それからおたづね申しまする。

玉蟲。

強くふらぬ間に戻つて來や。

雨月。

(玉蟲わかれて去る。雨月は見送る。)

さらでも女子は罪ふかいと聞いたるに、源氏を呪詛の調伏のと、執念く思ひつめられたは、あまりと云へばおそろしい。今宵逗留せよと云はれたを幸ひ、今一度あなたのお目にかゝつて、迷ひの雲霧の霽るゝやうに、御意見申すが法師の務ぢや。(思案して。)先づその前に御陵に参拜いたさうか。

(浪の音高くきこゆ。)

雨月。

おゝ、日暮れて浪が高うなつた。空は暗し、雨はふる……。鬼火の迷ひ出づるといふは、今宵のやうな夜であらう。南無阿彌陀佛。なむ阿彌陀佛。

(海にむかひて再び合掌す。那須の家来二人うかゞひ出づ。)

家来甲。

怪しい旅僧……。

家来乙。

むゝ。

(二人走りかゝつて捕へんとす。)

雨月。

なにゆゑの狼藉……。愚僧決して怪しいものではござらぬ。

家来甲。

えゝ、海にむかつて回向するは……。

家来乙。

まさしく平家にゆかりの者ぢや。

(二人は無理に引立てんとするを、雨月はゆかじと争ひて、遂に二人を投げ倒す。二人はかなはじと見て逃げ去る。雨月に法衣の塵をはらひて、苦笑。)

一旦佛門に入つたるからは、むかしの武士は捨てた筈ぢやに、われを忘れて荒氣の振舞。

雨月。

法衣の手前も面目ない。悟るといふはむづかしいものなう。

(11)

浦の苦屋、二重屋體にて竹縁朽ちたり。正面の上のかたは板羽目にて、上に祭壇を設け、注連を張れり。中央の出入口にはやぶれたる簾を垂れたり。下の方もおなじく板羽目。庭前の下のかたに丸太の門口、蠟殻の附きたる垣を結へり。垣のそとには松の大樹ありて、うしろには壇の浦の海近くみゆ。

(濱の女房おしほ、蝶螺の殻の燈臺に火をともしつゝ、獨言。)

おしほ。

やがてもう暮れると云ふに、姉妹の方々は何をしてござるのやら……。このごろの日和癖で、又降つて来たやうぢやが……。

(雨すこしく降る。玉蟲歸り来る。)

玉蟲。

今戻りました。

おしほ。

おゝ、お歸りなされましたか。生憎降つてまゐつたので、さぞお困りでござりませう。

玉蟲。

降りみ降らずみは此頃の習、さしたる雨でもござりませぬ。(濡れたる袂衣をぬぎて縁に上る。)

おしほ。いつも留守を頼み、ありがたうござりました。して、妹はまだ戻りませぬか。まだお歸りにはなりません。

玉蟲。このごろは兎角にそはくしておちつかず、内を外にして出あるいてゐるは、どうしたことであらうかなう。

(眉をひそむれば、おしほは打笑む。)

おしほ。それも生業ぢや、是非もござりますまい。

玉蟲。生業とは……。

おしほ。え。(口隠る。)

玉蟲。妹がどのやうな生業をして居りますぞ。

おしほ。さあ、うつかりと口を滑らしたはわたくしの過失、どうぞ御勘辨くださりませ。

玉蟲。いや、詫びることはない、あからさまに云うて下さればよいのぢや。

(玉蟲の妹玉琴、十七八歳、被衣をかぶりて下のかたより出で、門に立ちて内の問答をぬすみ聞く。玉蟲はおしほの返答なきに、すこしく思案する。)

玉蟲。おしほどの、包まずに云うてくだされ。平家ほろびし後は官女達もちりくばらく、こ

こらあたりにさまようて、あるに甲斐なく世を送る。そのなかには恥を忍んで、上り下りの旅人や、出船入船の商人を相手に、色を商ふもあると聞く。妹ももしや其のやうな……。

おしほ。さあ。これ、しかと返事をして下されぬか。

(追り問ふに、おしほいよく迷惑す。玉琴は門をあけて走り入る。)

玉琴。姉様……ゆるして下さりませ。

玉蟲。さては推量に違はず、姉に隠していつの間にか、遊女や白拍子のながれを汲み、色をあきなふ身となつたか。

玉琴。その御叱りは疾くより知つてゐれど、むかしに變る今の身の上、唯うかくとしてゐては姉妹ふたりが何となりませうぞ。飢ゑて死ぬる場になつては、恥も外聞も厭はどこそ。其日その日の糧がほしさに……。

おしほ。お、それも御道理。みやこ育ちのおまへ様方が、こゝらの濱邊に流浪なされては、ほかに世渡りの術もなし、御容貌のよいのを幸ひに、ゆきよの人になさけを賣る、辛い勤めもお身のためぢや。時の用には鼻もそぐと、下世話にいふは此事でござりませう。

玉琴。姉様、推量してくださりませ。  
おしほ。かならずお叱りなされますな。

(とりなし顔に云へど、玉蟲は耳にもかけず。)

玉蟲。これ、妹もつともらしう云譯するが、かゝる境涯におちぶれても、お前はまだく命が惜いか。

玉琴。女子の未練なころからは、命が惜しうござりまする。  
恥をさらしても生きたいか。

玉琴。死ぬほどならばこの三月、平家滅亡の日に死にまする。  
おしほ。ほんに左様でござります。平家滅亡のをりから、海に沈んだ官女達も多いとやら……。そのなかを無事にながらへたは、よくく御運がよいのでござりませうぞ。御運がよいと云へば……もし、玉琴様。あのお方のことを申上げたら、姉上様の御機嫌が直らうも知れませう。

玉琴。いや、いや。それは……。  
おしほ。はて、お隠しなさるには及びませぬ。(玉蟲にむかひて。)人は七轉び八起きとやら申しませぬ。悪いあとには又よいことが来るものでござります。まあ、お聞きなされませ。妹御さまは數ある客人のなかで、立派なお武士様と深いおなじみ……。やがては奥方に御出世なさらうも知れませぬ。さうなる時にはお前さまも、今の御苦勞を打ち忘れて安樂な御身分にもなれませうぞ。

玉蟲。して、その武士といふは……。  
おしほ。はい、あの……。  
玉琴。あ、これ……。 (云ふなと制す。)

那須與五郎といふお方……。 (思案する。)

玉蟲。陣屋をかまへてゐると聞く。與五郎といふも恐らくはその身内であらうな。  
おしほ。なんでも大將の御舎弟ちやとかうけたまはりました。なう、玉琴様……。  
(玉琴答へず、恐るゝことくに差俯向く。玉蟲はいよく氣色をかへる。)

玉蟲。なに、大將の弟……與市の弟ちやと……。 (衝と起つて妹の襟髪をとる。)

平家蟹

出てゆきや、出て行かうぞ。

え。

玉琴。

おしほ。

さりとはきつい御腹立……。まあ、まあ、お待ちなされませ。

玉蟲。

お前の知つたことではない。玉琴、再びそなたには逢はぬぞや。

(突き放して起たんとす。玉琴は姉の袂にすがる。)

玉琴。

では、姉妹の縁を切つて……。

玉蟲。

姉妹はおろか、人間同士の縁も切つた。おのれは畜生……。見るも汚れぢや。

(袂を拂つて奥に入る。玉琴は泣き伏す。おしほは呆れる。)

おしほ。

やれ、やれ、飛んでもないことになりましたなう。お説の種にもならうかと、那須の殿様のことをうかく申上げたら、却つて御腹立は募るばかり……。口は禍の門といふことを今知つて、詫んでもあとの祭ぢや。玉琴様、料簡してくださりませ。

玉琴。

いえ、いえ、詫びるには及びませぬ。遅かれ速かれ知れること……。その折にはどう云はう、かう云はうと、色々の云譯をかんがへて置きながら、いざと云ふときには口へも出さず。たつた一人の姉様の勘當受けて、こりや何としたものであらうか。

おしほ。

(玉琴泣き入るを、おしほは慰める。)

一旦はあのやうに御立腹なされても、根が血をわけた御姉妹、自然とお心の解けるは知れたことござります。とは云へ、あのはげしいお顔色では、今が今、すぐはお詫もかなひますまい。兎もかくも今夜だけは、わたくしの宿までお越しなされませ。はて、泣いてござつては済まぬ。まあ、まあ、お立ちなされませ。

(宥めながら手を取れば、玉琴はしな／＼起上る。)

玉琴。

とは云へ、もう一度お詫をして……。

おしほ。

はて、今兎やかうと申上げては、却つて御機嫌に忤らうやうなもの。まあ、わたくしにまかせてお置きなされませ。

(玉琴の手をひきて門に出で、二歩三歩行きかゝれば、向うより那須の家來彌藤二は松明をふり照らして出づ。双方ゆき逢ふ。)

彌藤二。

お、玉琴殿ではござらぬか。

おしほ。

おまへは那須の御家來衆……。

彌藤二。

玉琴どのお迎ひにまゐつた。



(今まで情れたる玉琴は、那須の迎ひと聞きて俄にいそくする。)

玉琴。

お、彌藤二どの……。ようぞ迎ひに来てくださった。

彌藤二。

奥五郎どのもお待兼ねでござるぞ。早うまゐられい。

玉琴。

すぐにお供いたしませう。

おしほ。

丁度よいところへお迎ひぢや。では、御陣屋へ行かしやりますか。

玉琴。

おしほ殿、先へまゐりまするぞ。

彌藤二。

いざ、お越しなされい。

(彌藤二は先に立ち、玉琴附添ひていそぎ行く。取残されたるおしほはあとを見送る。)

おしほ。

玉琴どのも現金な……。那須のおむかひと聞いたらば、泣顔が急に笑顔となつて、早々に

出てゆかれた。あれでは姉様の勘當をうけるも無理はない。お、鐘がきこえる。今が逢

魔が時といふのぢや。どれ、早う戻りませう。

(おしほは呟きつゝ去る。雨の音さびしく、奥より玉蟲は以前とかはりし白の着附、緋の袴、小袷

にて、檜扇を持ち出て出づ。遠寺の鐘の聲きこゆ。玉蟲は鐘の音を拵折りかぞへて獨語。)

玉蟲。

今鳴る鐘は酉の刻……。平家の方々が見ゆるころぢや。

(縁に出でてあたりを視る。垣のかけより大いなる平家蟹遣ひ出づ。)

玉蟲。

お、新中納言殿……。こよひも時刻を違へずに、ようぞまゐられた。これへ……。これへ

(檜扇にてさしまれば、蟹は縁の下へ這ひ寄る。餘の方々はなんとなされた。つねよりも遅い

ことぢや。

(上のかたの木かげよりも、おなじく平家蟹あらはる。)

玉蟲。

お、能登どのか。今宵は知盛の卿に先を越されましたぞ。(打笑む。)

(左右よりついで二三匹、四五匹の蟹あらはれ出づ。)

玉蟲。

お、教盛の卿、行盛の卿……。有盛、經盛、業盛の方々……。みな打揃うて見えられま

したの。(縁に腰をかける。蟹はその足下にむらがり寄る。このころの短夜とは云ひながら、あ

すの朝まではまだく長い。今宵はなにを語つて明しませうぞ。(蟹にむかつて問ひ、又うな

づく。)毎夜毎夜の物語も、つまるところは平家の恨ぢや。この恨は一年二年、五年十年語

りつゞけても、容易に盡きることではあるまい。(蟹を見て、ひとり首肯。)さうぢや、さう

ぢや。源氏が榮えてあるかぎり、平家の恨は消え失せまい。お、それで思ひ出した。

最前濱邊で宗清にゆき逢ひ。その物語によるときは、景清は姿をかへて鎌倉に下り、家重

代の痣丸に源氏の血を染めるとのことをござりますぞ。ほゝ、勇ましい覺悟ではござりませぬか。萬一、景清が仕損じても、平家一門の呪詛によつて、源氏のゆくするも大方は知れて居りまする。(云ひかけて、又うなづく。) おゝ、云ふまでもござらぬ。先づ當のかたきの義經をほろぼして、次は範頼……次は頼朝……おゝ、まだある。頼朝には頼家といふ小忰があるとやら……これも、助けては置かれぬ奴、勿論呪ひ殺します。その弟も……又その子も……その孫も……。二代三代四代の末までも執念く祟つて、かりにも源氏の血をひく徒は、男も女も根絶しにして見せませうぞ。

(云ふ聲は漸次にうは暖れて、鬢髪そよぎ、顔色すさまじ、下の方の木かげより以前の雨月忍び出で、息をのんで内の様子を窺ふ。玉蟲はかくとも知らず、更に祭壇のかたを指さす。)

玉蟲。あれ、見られい。唐天竺日本にありとあらゆる阿修羅の眷族を、一つところに封じ籠めて、夜な夜なかたきを呪うて居りますぞ。やがてその奇特を……。

(この時、俄に風ふき來りて、燈臺の火ふつと消ゆ。闇のなかに玉蟲の聲。)

玉蟲。おゝ、源氏の運も風の前のともしびぢや。忽ちこのやうに消ゆるであらうぞ。ほゝゝゝ。(向うより那須與五郎宗春、廿歳、烏帽子、直垂にて蓑をつけ、松明を持ち、あとより玉琴も蓑を

つけ、附添うて出づ。この火のひかりを望みて、玉蟲は起つて奥に入り、雨月も木かげに身をひそむ。平家蟹もすべて消ゆ。與五郎等は門に來りて、内をうかゞふ。)

與五郎。はて、不思議や。家の内は眞の闇ぢや。  
玉琴。姉様はどこへお出でなされたか。先づ兎もかくもお通りなされませ。  
與五郎。むゝ。

(兩人は内に入りて、あたりを照し視る。)

與五郎。おゝ、燈臺はあれにある。燈火をつけられい。  
玉琴。心得ました。

(兩人は蓑をぬぎ、玉琴は縁にあがりて、松明の火を燈臺に移す。與五郎はその松明を打消して、おなじく縁にあがり、兩人座を占める。)

與五郎。姉御はいづかたへ參られたであらうな。  
玉琴。さあ、近所へ物買ひにゆかれたか。但しは奥に……(起つて奥をうかゞふ。奥も暗がりやくは見えぬ。もし、姉様……姉上様……)  
玉蟲。さういふは誰ぢや。妾はこれに居りまする。

(玉蟲は袴をぬぎ、白小袖、緋の袴にて、奥より出づ。)

玉琴。 おゝ、姉様……。それにおいでなされましたか。  
玉蟲。 又しても姉といふ。そなたとは、已に縁切つてゐるのぢや。

(云ひつゝ、悠然と座に直る。奥五郎は一膝すゝめて會釋す。)

奥五郎。 姉上には初めて御意得申す。それがしは下野の國の佳人、那須與市宗隆の弟、同苗與五郎宗春。

玉蟲。 その奥五郎どのが何用あつてこゝへはまゐられた。

奥五郎。 妹御を所望にまゐつた。仔細はおほかた御存じでもござらう。平家没落の後、ゆかりの人々も寄邊をうしなひ、某の姫君、なにがしの女房と呼ばるゝ、やんごと無き上臈達もおちぶれて、たよりなきまゝに恥を忍び、浮川竹の憂きに沈みて、傾城遊女の群にも入りたまふ。さりとほ悼はしき限りよと、あはれを覚えしが戀の初め、測らずもこの玉琴殿と、淺からぬ縁をむすび申した。

玉蟲。 むゝ、それゆゑに妹をくれいと云はるゝか。一旦縁を切つたる妹、わらはが兎かう云ふべき筋はござらぬ。勝手に連れて行かれたがよからう。

(玉琴も進み出づ。)

玉琴。 さあ、それに就いてお願ひがござりまする。これまでお目を掠めた罪は、いくへにもお詫を申しますれば……。勘當をゆるせと云やるか。

玉蟲。 勘當をゆるせと云やるか。  
玉琴。 奥五郎どのは今宵かぎり、俄にこゝを引揚げて、本國の那須へ歸られまする。わらはも共に連れて行かうと云ふありがたいお詞。就ては勘當のおわびを願ひ、おまへも共に關東へ……。

玉蟲。 え、わらはも共に關東へ……。那須へ一緒にゆけと云やるか。  
玉琴。 わが身ばかり出世して、お前をすてゝ行かれませうか。  
玉蟲。 共々にお越し下さらば、それがしに取つても義理の姉上、決して疎略には存じ申さぬ。玉琴が切なる願、なにとぞ勘當をゆるされて、われゝと共に本國に下り、安らげく世を送られい。那須は草ふかき村里なれど、歌によむ白河の關にも遠からず、那須野が原には殺生石の舊蹟もござる。二荒の宮には春の櫻、鹽原の温泉には秋のもみぢ、四季とりくの眺めにも事缺かず、よろづに御不自由はござりませぬ。

玉 蟲。御芳志は千萬かたじけない。就ては玉琴。先づそなたに問ひたいことがある。もし妾が飽までも不承知と云ふたら、そなたはどうしやるぞ。

玉 琴。さあ。

玉 蟲。わらはを捨てても、與五郎どのと一緒にゆくであらうな。

(玉琴黙して答へず。玉蟲はうなづく。)

玉 蟲。返事のないは、大方さうであらうの。よい、よい。それほどまでに思ひ合ふた二人が仲を今更ひき裂くこともなるまい。わらはが許して女夫にしませうぞ。

玉 琴。え。では、勘當をお赦しあつて……。

玉 蟲。姉が媒酌して杯をさせませう。

玉 琴。ありがたうござりまする。

玉 蟲。まあ、しばらく待ちや。

(玉蟲は起つて、再び奥に入る。與五郎と玉琴は顔を見あはせる。)

玉 琴。こゝへ引返して来るみちくも、どうあらうかと案じてゐたに、姉さまの御機嫌も思ひのほかに早う直つて、こんな嬉しいことはござりませぬ。

與五郎。

強て兎やかう申されたら、それがしも刀の手前、われから姉妹の縁切つて、そなたを連れ歸らうと存じたるに、玉蟲殿のこゝろも早う解けて、われも満足。祝言は追つてのこと、は思へども、今この場合、姉御の詞にさからうも如何。兎も角もこゝで杯せうぞ。どうぞさうして下さりませ。

與五郎。

そなたの御みぢや、なんなりとも背かうよ。

玉 琴。

あい。世にたよらない我々姉妹。この末ともにかならず見捨て、下さりまするな。

與五郎。

坂東武者は、矢ばかりか、なさけにかけても意地は強い。一度誓ひし詞の末は、盡未來まで變るまいぞ。

玉 琴。

おゝ。

玉 蟲。

(與五郎の手をとつて押しいたゞく。奥より玉蟲は三方と土器を持ち出て出づ。)  
世にありし昔ならば、かすくの儀式もあるべきに、花やもみぢの色もなき浦の苦屋のわび住居。心ばかりの三三九度ぢや。

(三) 兩入のあひだに搦うれば、兩入は形をあらためて一禮す。玉蟲は更に祭壇より神酒を入れたる甕を取りおろし、うやくしく押頂きて、しばしば口のうちに何事かを念ず。)

玉 蟲。 女子ばかり住む家に、酒のたくはへは無けれども、幸ひにこゝに神酒がある めでたい折柄には相應からう。さかづきは女子から……。

玉 琴。

あい。

玉 蟲。

（玉琴はまづ土器を取り、玉蟲は酌に立つ。つゞいて奥五郎も飲む。式のごとに杯の獻酬あり。）  
おゝ、これでめでたう祝儀も済んだ。これからは色直しに、わらはが一さし舞ひませう。

（玉蟲は楡扇を持ちて起ちあがり、最初はしづかに舞ふ。）

唄 世は治りて、西海の浪しづかなり、岸の姫松はみどりの枝をかはして、沖にあそぶ鷗の影白し。見渡すかぎり、山も海も遠く連なりて、晝くがことき眺めかな。

（このあたりより舞はやうやく急なり。）

唄 ときに不思議や、一天にはかに聳曇り、潮はどうくと怒り立ち、百千の悪鬼羅刹は海の底よりあらはれたり。

（玉蟲は足拍子を強くふみて、兩人に向つてじり／＼と詰めよる。奥五郎と玉琴は毒酒にあたりし體にて、身神俄に惱亂す。）

唄 口にはほのほの息をふき、手には鐵の矛をふるひ、恨み重なるかたきの奴原、一人も

餘さず地獄へ墮せと、熱湯の池、劍の山、追ひ立て追ひ立て急ぎゆく。凄まじかりける次第なり。

（玉蟲は舞ひながら、楡扇をあげて奥五郎を丁々と打つ。玉琴は遣ひ寄つて支へんとするを、玉蟲はおなじく打つ。奥五郎は太刀を抜きてよるめきながら斬つてかゝらんとすれども、身は自由ならず、いくたびか倒れて遂に縁より轉び落つ。玉琴はこれを救はんとして、おなじく庭に轉び落つ。玉蟲は舞ひをはりて、こゝろよげに瞰下しつ。）

玉 蟲。 奥五郎、玉琴、苦しいか。

奥五郎。 今かの酒を飲むとひとしく、俄に身神惱亂して……ふたりが二人ながら苦痛に堪へぬは

……。

玉 琴。 女夫が祝言のさかづきは……命を縮むる毒酒なりしか。

玉 蟲。 ひとに洩れては願望のさまたげと、現在の妹にも秘し隠したれば、おなじ家のうちに住みながら、玉琴もまだ知るまい。西海に沈みたる平家のうらみを報いんために、神壇を築いてひそかに源氏を呪ひ、神酒を供へてもろくの悪鬼羅刹を祭る。そち達ふたりが飲んだる酒は、即ちそれぢや。

玉琴、

して、その神酒が毒酒とは……。

玉蟲、

平家蟹の甲を裂いて、その肉を酒にひたし、神への贄にさづけしものぞ。

玉琴、

えい。

玉蟲、

男はもとより源氏方、女は肉身の姉を見すて、かたきに心を通はす奴、呪ひの奇特をためすには屈竟と、最前神酒をとりし時、わが呪ひの首尾よく成就するならば、この酒變じて毒となり、まのあたりに二人の命を奪へと、ひそかに念じて侷めたるに、酒は果して毒となつた。はゝゝゝゝゝ。

與五郎、

源氏調伏の奇特をためさん爲に、われゝゝに毒酒を盛りしか……。女の愛に心ひかされ、油斷せしが一生の不覺……。さるにても、源氏に仇なす奴……。おのれ、そのまゝには……。(刀を杖に起たんとして又倒る。)

玉蟲、

はて、騒ぐまい。お身にはまだ云ひ聞かすことがある。過ぎし屋島のたゝかひに、風流を好む平家の殿ばらは、船に扇の的を立てさせ、官女あまたある中にも、この玉蟲が選み出され、船端に立つて檜扇をかざし、敵をまねいて射よといふ。やがて源氏の武者一騎、萌葱おどしの鎧きて、金覆輪の鞍置いたる黒駒にまたがり、浪打際より乗入つたり。

與五郎、

おゝ、それぞわが兄……那須與市宗隆……。

玉蟲、

おゝ、那須與市といふことは後に知つた。兎にも角にもおぼえある武士ならん、いかに射るぞと見てあれば、かれは鎗矢を取つて番へ、能引いて颯と放つ。さすがに狙ひはあやまたず、扇のかなめを射切つたれば、扇は空にまひあがり、風に揉まれて海に落つ。(無念の聲をふるはせる。)これぞ敗軍の前兆と、味方は愁ひ……。敵は勇む。わらはも無念に堪へかねて扇と共に沈まんかと一旦は覺悟したれど、おもひ直してけふまでもおめゝとながらへしぞ。その與市の弟と名乗る奴、測らずこゝへ來りしからは、いかで無事に歸さうか。さては扇の的のうらみに因つて……。

與五郎、

おのれはかたきの末ぢや。兄の與市めも遅かれ速かれ、共に地獄へ送つてやらうぞ。

玉蟲、

(いよゝ心地よげに笑ふ。與五郎は無念の齒を噛めども、苦痛は漸次にはげしく、喉だ苦しき息をつくのみ。玉琴は這ひ寄る。)

玉琴、

與五郎どの……。おん身をこゝへ誘うて來ずば、かうしたことになるまいものを……。

與五郎、

おゝ、この上は是非も無し、かれは生きて源氏を呪はんと云ふ……。われは死して彼を呪はん。玉蟲……。おのれもやがて思ひ知らうぞ。

玉 蟲。

人に執念のないものは無い。われもひとを恨めば、ひと我を恨まう。つまりは五分五分ぢや。恨まば恨め、七生の末までも恨むがよい。

與五郎。

おのれ……。

(起たんとしてよろめくを、玉琴は支へんとして縋りつく。)

與五郎。

最早これまで……。玉琴……。

玉 琴。

與五郎どの……。

(與五郎は刀をとりなほして玉琴の胸を刺し、返す刀にてわが腹に突き立て、引きまはして倒る。)

下の方の木かげより雨月再びうかいひ出で、垣の外にひざまづきて合掌す。玉蟲は見咎める。)

雨 月。

(しづかに。)わたくしでござりまする。

玉 蟲。

お、宗清か。遠慮はない、これへ來や。

雨 月。

いや、まゐりますまい。わたくしは御佛に仕へまする者。佛道と魔道とは相距ること億萬

玉 蟲。

里、お前様のそばへは参られませぬ。

玉 蟲。

それほど妾がおそろしいか。

雨 月。

怖ろしいとも存じませぬが、瞋恚執着が凝りかたまつて、生きながら魔道に墮ちたるお前さまは、修行のあさいわれくの力で、お救ひ申すことはかなひませぬ。お悼はしうござりますれど、もうおわかれ申しまする。

(詞すいしく云ひ放ちて、雨月は珠敷にてわが身を拂ひきよめ、笠をかたむけて徐にあゆみ去る。)

又しや雨はげしく降り出づ。玉蟲は起ちあがりて、二つの死骸を見おろす。)

玉 蟲。

呪詛のしるし顯れて、こゝにふたつの生贄をならべた。源氏の運も長からず、一代……二代……。(指折りかぞへて。)おそくも三代の末までには……。かならず根絶しにして見せうぞ。(ものすこき笑を洩しつし) さるにても、妹は兎もあれ、與五郎は那須の一族。かれを此のやうに殺したからは、敵も安穩には捨て置くまい。やがて討手の向ふは知れたこと……。わらはの身を隠すべきところは……。

(浪の音たかく、一匹の平家蟹這ひ出で、縁にのぼる。)

玉 蟲。

お、蟹……。わらはを案内して給るか。して、どこへ……。海へゆくのか。よい、よい。

(蟹は消ゆ。浪の音いよゝ高し。)

玉 蟲。

や、蟹はいつの間にか……。 (あたりを見廻して。) お、新中納言殿……。能登守どの……。

また見えられたか。いざ御一緒に……わらはも海へまわります。おゝさうぢや。浪の底にも都はある。わらはも役目を果たしたれば、これからはお宮仕へ。さあ、お供いたしまする。

(眼にもみえぬ人に物いふ如く、玉蟲はひとり語りつゝ庭に降立ち、表のかたへ迷ひ出でんとする時、向ふより那須の家來彌藤二は松明を持ちて再び出づ。)

彌藤二。

若殿……お迎ひ……。

(云ひつゝ門をあけんとして、出逢ひがしらに玉蟲に突きあたる。玉蟲は物をも云はず、その松明をうばひ取る。彌藤二おどろきて支へんとするを、玉蟲は無言にて突き退け、片手に松明をふりかざして、緋の袴を長くひきつゝ、足もしどろに迷ひゆく。彌藤二は呆れてあとを見送る。浪の音、雨の音。)

—幕—

新朝顔日記



明治四十五年(大正元年)六月作。  
大正七年十二月。帝國劇場初演。

初演當時の主なる役割——熊澤蕃山(市川左團次) 津山順之助(市川壽美藏) 深雪(片岡我童) 淺香(坂東秀調) 馬士(市川荒次郎) など。

登場人物——熊澤蕃山。津山順之助。宇治の女深雪。乳母淺香。手代伊平。金谷宿の馬士。番頭善吉。女中お山、お石。旅人彌太郎、源八。ぬけまわりの小僧。ほかに川越しの人足。中間。巡禮。捕手など。

(一)

東海道、金谷の宿。戒屋といふ宿屋の店先。二重屋體にて、上のかた一間の上は戸棚、下の壁には帳面をかけたなり。中央は障子の出入口にて、下のかたは鼠壁なり。二重の上の方には窓あり。下の方は土間にて、外は黒塀を折りまはし、内より見越しの松など見ゆ。  
(承應二年の秋のゆふぐれ。驛路の音遠くきこゆ。宿の女お山、お石は江戸の旅人彌太郎、源八の袖をひいてゐる。)

お山。もし、お泊りなされませ。

彌太郎。

え、うるせえ。道中はこれだから忌だ。さあ、源公。急いだ、急いだ。

(お石は源八の袖をとらへて放さず。)

お石。

あの方が忌だといふなら、お前ばかりお泊りなされませ。

源八。

ばかを云へ。連を追つ放して、おればかり泊れるものか。おい、おい、彌太公。大井川も

無事に越したから、もうこの宿で草鞋を脱がうぢやあねえか。

彌太郎。

まだ日が暮れるには間があるのに、今から泊つて詰るものか。次の宿の日坂まで、一と息

に越さにやあならねえ。

お山。

次の宿までは二里もあるに、どうしてこれから越されませう。

お石。

このさきの松原には、追剝や悪い狐が出ますぞえ。

源八。

え、追剝や狐が出る……。

彌太郎。

嘘だよ、嘘だよ。そんなことを云つて客をひきとめるのが道中の宿屋のきまり文句だ。か

う見えたつて、伊勢へ七度、熊野へ三度、東海道を股にかけた江戸つ子だ。そんな紋切形

で行くんぢやねえや。ひとを馬鹿にしやがるな。手前達こそ悪い狐だ。

(彌太郎大いに力むところへ、上の方より抜けまゐりの小僧一人出て来り、その鼻のさきへ柄杓を

突きつける。)

小僧。

お伊勢まゐりに一文遣つてください。

彌太郎。

え、だしぬけに吃驚させやあがる。む、ぬけ参りか。仕方がねえ。(ふところより錢を出

してやる。)

小僧。

ありがとうございました。

(お石は源八の袖をひく。)

お石。

お前、どうしてもお泊りなされぬか。

源八。

連の男が氣の強えことを云ふんだから、仕方がねえ。まあ、歸りに寄るから、堪忍してく

んねえ。

(下のかたより巡禮の小娘ひとり出て来り、源八に柄杓を突きつける。)

巡禮。

巡禮に御報謝……。

源八。

や、いろ／＼の者が来やあがる。これだから道中は遣り切れねえ。さあ、お前にも一文……

(錢をやる。)

巡禮。

ありがとうございました。

彌太郎。手前がいつまでもぐづぐづしてゐるから、碌なことはありやあしねえ。さあ、来い、来い。  
 源八。ぢやあ、姐さん。さう云ふわけだから、歸りにやあ屹と寄るよ。  
 お山。是非お下りにはねがひます。

彌太郎。あかんべえだ。はゝゝゝゝ。

お石。彌太郎と源八は上手に入る。わけまゐりと巡禮は摺れ違ひて左右にわかれ去る。  
 けふはどうしてお客の足が止まらないのだらうね。

お山。さつきお泊りになつたお武家様の一組だけぢやあ、なんぼ何でもあんまり寂しいねえ。  
 お石。秋の日はみじかいと云ふが、ほんたうにもう暮れかゝつた。

（二人は表をながめてゐる。下のかたより道中駕籠二挺をかゝせ、手代伊平、旅装束にて附添ひ出づ。先の駕籠に乗りたるは、女房すがたの深雪、二十一歳にて盲目なり。あとの駕籠に乗りたるは、乳母の浅香。いづれも旅装束なり。）

伊平。もし、こゝが金谷の宿で、名代の戎屋でござります。

浅香。大井川も越したれば、今夜はこゝで泊りませうか。

伊平。それがよろしうござりませう。

（お山お石は出で迎へる。）

お山。いらつしやいまし。

お石。さぞおくたびれでござりませう。

（浅香は駕籠を出で、伊平と共に深雪の手をとりて連れ出す。）

お山。唯今お洗足を持つてまゐります。

伊平。お女中方は通し駕籠だから、おすゝぎにも及ぶまい。わしの分だけ汲んで来てくだされ。

お石。はい、はい。（奥に入る。）

お山。さあ、どうぞお通り下さりませ。

浅香。今晚は御厄介になります。

（浅香は深雪をたすけて店口に来り、括り草履の緒を解きなどする。伊平は財布より銀を出して、駕夫にわたす。）

伊平。酒手ぐるめこれでよからうな。

駕夫。へえ、へえ。どうもありがたうございます。

（駕夫四人は二挺の空駕籠をかつぎて去る。下手の土間の奥よりお石は盥を持ちて出づ。）

お石。お洗足はこれにござります。

伊平。あい、あい。

浅香。(伊平は腰をかけて草鞋をとき、足を洗ふ)では、伊平どの。さきへ行きますぞえ。

お山。さあ、御案内申ませう。

(浅香は深雪の手をとりて行かんとすれば、深雪は物につまづきて跟隨く。)

お山。あれ、お危なうござります。

(浅香とお山は、左右より深雪を扶けながら、奥に入る。)

お石。あのお女中様は、お目が御不自由なのでござりますか。

伊平。三年越しのおわづらひで、この春から俄盲になられた。

お石。お年も若し、御容貌もすぐれてお美しいのに、お氣の毒なことでござりますな。

伊平。それに就てはまだいろくお氣の毒なこともあるのぢや。(嘆息しつゝ足を洗ひ終る)どれ、

わしも奥へゆかうか。

お石。かうお出でなされませ。

(お石は案内して、伊平を奥へ連れてゆく。入相の鐘きこゆ。東の花道より熊澤の門人津山順之助、廿二三歳、菅笠をかぶり、絲立をきて、旅商人に姿をやつし、この家の店さきに来て内をうかどふ。奥よりお山は蠟燭を持ち來りて、軒行燈に灯を入れる。順之助は近寄りて聲をひくめ、町人風に云ふ。)

順之助。もし、もし。

お山。あい、お泊りでござりますか。

順之助。さあ、泊つても可いが、ちつと訊きたいことがある。(左右を見まはし)今夜こゝへ上下ふたり連れのお武家風の客が泊りはしなかつたかね。

お山。はい。お泊りになりました。

順之助。主人のお武家は、年のころ三十四五……。

(お山うなづく。順之助もうなづく。)

順之助。して、そのお方はどこの座敷に通られた。奥か、二階か。お供のほかには附添ひの人でもあ

るかね。

(お山は順之助の姿をぢろく視る。)

お山。では、お連様でござりますか。

順之助。いや、連ではないが……。(云ひ遊む)兎も角もこゝへ泊るとしよう。(店に腰をかけて、草鞋を

解かんとす。)

お山。あゝ、もし……。

順之助。泊つては悪いか。

お山。悪いと云ふではござりませぬが……。

(お山は怪んでゐる。奥より番頭善吉出づ。)

善吉。これは、これは、お早いお着きでござりました。

(お山はあわて、善吉の袖をひき、順之助をそつと指さして、何だか胡亂な人だと眼で知らすれば、

善吉も呑み込む。)

善吉。もし、お客様。まことにお氣の毒様でござりますが、今晚は大勢のお泊りで、お座敷はみ

な差がつて居りますから、どうかほかの宿屋をお探しくださりませ。

順之助。座敷が塞がつたとあれば、物置の隅でも縁先でも大事な。是非今夜だけ泊めて貰ひたい

が……。

善吉。手前共も客商賣、おとめ申したいは山々でござりますが、なにを申すにもお座敷が一杯

で……。

順之助。だから、どこでも可いといふのに……。

善吉。でも、それは……。

順之助。これほどの廣い家で、人ひとりを寐かすところが無いことはあるまい。わしは決して護摩

の灰なんぞの怪しい者ではござらぬ。まあ、安心して泊めてくだされ。

(順之助は草鞋をぬぎて、つか／＼上らうとするを、二人は支へる。)

善吉。それはお前様が御無理といふものでござります。

お山。どうぞほかへお出でくださりませ。

順之助。この通り、一旦草鞋をぬいでしまつたものを、また草臥れ足を引摺つてどこへ行かれるも

のか。さあ、案内してくれ。

(順之助は押して通らんとするに、二人はいよく怪んで遮る。この以前より捕手二人、家の左右

より忍び出で、始終の様子なうかいひあたりしが、この時たがひに首肯さ合ひて進みよる。)

捕手甲。これ、其方は何者だ。

順之助。わたくしは都……いや、大阪から下りました。

捕手乙。今夜こゝへ泊つた武士に用があるのか。

順之助。

え。

捕手甲。

兎もかくも詮議がある。まわれ。

順之助。

いえ、わたくしは決して胡亂なものでござりませぬ。

捕手乙。

胡亂でなくば素直にまわれ。

順之助。

え。

捕手甲。

さあ立て、立て。

捕手甲。

(捕手は左右より順之助を引立てんとするを、順之助はつき退けて身がまへする。)

捕手甲。

手向ひするはいよく曲者……。

捕手乙。

(捕手二人は組んでかゝる。順之助はもうこれまでと覺悟して、捕手を相手に闘ふ。家の左右より)

捕手。

又もや二人の捕手あらはれ出で、遂に順之助を取つておさへ、繩をかける。)

捕手。

立て、立て。

(順之助は無念さうに奥を見かへりながら牽かれゆく。上のかたの窓をあけて、熊澤蕃山、三十四)

五歳の儒者。顔を出して聲をかける。)

熊澤。

これ、これ。

順之助。

はつ。

順之助。

(順之助は取られたる繩をふり放して走せ戻り、地にひざまづく。)

順之助。

先生……。

順之助。

(熊澤は詞なく、たがひに顔を見あはせる。)

熊澤。

おなつかしうござりました。

順之助。

私のをとを慕うて來たのか。

熊澤。

はい。

順之助。

町人にすがたを變へて、見えがくれに追うて來たは、わしに今一目逢はうが爲めか。

お目にかゝるばかりでなく、隙もあらばお前様を奪ひ出して、いづれへかお供いたさうと存じました。

熊澤。

(捕手等は顔を見あはせる。熊澤は微笑む。)

おまへの氣性としては左もあらうが、隙をみて私を奪ひ出さうなどは及ばぬことぢや。

この蕃山が幕府の忌諱に觸れたは、第一に陽明學を唱ふる爲、また二つには京都の公家衆と親しく出入りをした爲に、油斷のならぬ奴と見られたのであらう。さればこのたびの東下りも、表面は自由の放し飼ひぢやが、道中も見えがくれに警固をつけ、旅宿の四方には人数をくばり、云はゞ囚人も同然のあつかひで、軍鶏籠に乗せられぬが切ても幸ひぢや。それほどに用心きびしいところへ、お前ひとりが飛び込んだとて何とならう。由ないことをしてくれたなう。

順之助。

先生のお爲とあれば、順之助の身は如何やうに相成りましても、些とも恨みはござりませぬが、本意をとげずに斯くの始末、たゞく口惜しうござりまする。

熊澤。

それもこれも運命ぢや。今となつては何事も申すな。命を的にして、おのれが師を救はうとした志は、蕃山も過分に思ふぞ。

順之助。

はつ。

熊澤。

おまへには老いたる母があつたなう。

順之助。

はい。

(順之助泣く。熊澤も嘆息す。)

熊澤。

このたびのことは、母にも告げてまゐつたのか。

順之助。

いえ、何事も……。

熊澤。

明さずにまゐつたか。あとにて斯うと聞かならば、母のなげきも思ひ遣らるゝ。そちも不孝の子となつたぞ。

(順之助は答へずして泣く。捕手はすゝみよる。)

捕手甲。

あまりに時が移る。立て、立て。

熊澤。

いつまで云うても名残は盡きまい。行け、ゆけ。

順之助。

はつ。(たち上りしが、更に窓近く進み来る。先生……。御機嫌ようお暮しなされませ。

熊澤。

(窓より順之助の肩に手をかける。折もあらば母の許へも、お前のたよりを傳へてやるぞ。

順之助。

ありがとうございます。

(順之助は一禮して、なごり惜げに見かへりつゝ牽かれゆく。善吉とお山はほつとする。)

善吉。

やれ、やれ、大變な騒ぎであつた。

お山。

わたしも最初から可怪な人と思つてゐたが……。 (熊澤の方を見かへりて俄に口をつぐむ。) どれ、そこらを片付けませうか。

善吉。

さうだ、さうだ。

(善吉は取散らしたる四邊をかたづけける。お山は盥の水を捨てる。熊澤は窓より順之助のゆくへを見送る。)

(11)

戎屋の奥、乱びたる座敷。二重屋體の上のかたに床の間、つゞいて出入りの襖あり。庭には松の立木などありて、垣の下には秋草さけり。をちこちに蟲の聲きこゆ。

(奥よりお山は行燈を持ち出て出づ。あとより熊澤も出づ。)

お山。

店がとりこんで居りましたので、ついでにおあかりを持つてまゐるのが遅くなりました。

熊澤。

とりこみとは今の騒ぎか。店をさわがして氣の毒であつたな。

お山。

いえ、どう致しまして……。唯今お茶を入れかへてまゐります。

熊澤。

(お山は傍の茶道具を持ちて奥に入る。熊澤は庭の落葉をながめる。)

熊澤。

このごろは夜風も大分冷えて来たなう。庭にすだく蟲の聲、窓をうつ落葉の音、秋もやう

やく末となつたか。無邊落木蕭々下、不盡長江滾々來。(口吟みて。)あづまの旅も日數つもりて、あすは大井川を越すのぢやな。どれ、けふの日記でも記して置かうか。

(熊澤は矢立と帳とを取り出して、日記をしたしむ。上手の奥にて琴の音きこゆ。)

唄 露の干ぬ間の朝顔を、照す日かけの情なきに、あはれ一村雨のはらくと降れかし。

(熊澤は縁さきに立出でて耳をかたむける。)

熊澤。

あの歌は……。すぎし年、宇治の螢狩に、むすめ深雪が持つたる扇に書いてあたへし朝顔

の歌ぢやが……。かぞふれば最早五年の昔、われも忘れて過ぎたるに、いづこの誰がうた

ひ傳へて、圖らずあづまの驛路に、聞くも不思議のことぢやなう。

(奥よりお山は茶道具を持ち出て、茶碗に茶をつぐ。)

お山。

御免くださりませ。

熊澤。

これ、女中、異なことを訊くやうぢやが、唯今あちらの座敷できこえた琴の音は、何人の

調べぢやな。

お山。

先刻おとまりのお女中様でござります。

熊澤。

いづこの人とも判らぬか。



お山。

山城の宇治へ歸るとか申して居られました。

熊澤。

宇治へ歸るか。(かんがへる。)して、年の頃は……。

お山。

年のころは廿一二の美しいお方でござりますが、お氣の毒なことには眼が潰れて……。

熊澤。

なに、眼が見えぬと……。 (再びかんがへる。)では、ほかに附添ひの者でもあるか。

お山。

はい、ほかにお女中と男のお人が……。

熊澤。

む。 (又もや考へる。)これ、女中。大儀ぢやが彼の人の座敷へまゐつて、唯今琴をしらべ

お山。

し女子は、その名を深雪殿とは申されぬか。一應聞きあはしてくりやれ。

お山。

はい、はう。

熊澤。

人違ひならば又別におたづね申すこともある。もしその深雪殿ならば、備前岡山の熊澤が

お山。

お目にかゝりたいと申してくれぬか。

お山。

かしこまりました。では、すぐに行つてまゐります。

熊澤。

(お山は奥に入る。)

お山。

今が廿一二といへば、丁度深雪の年紀ぢやが、眼がみえぬとは合點が行かぬ。やはり人違

ひかなう。それにしても、朝顔の歌を誰につたへられたか。兎もかくも逢うたらば知れる

であらう。

であらう。

であらう。

であらう。

であらう。

であらう。

であらう。

であらう。

であらう。

であらう。

であらう。

であらう。

であらう。

であらう。

であらう。

であらう。

であらう。

であらう。

であらう。

であらう。

であらう。

であらう。

であらう。

であらう。

であらう。

であらう。

新朝顔日記

三五五

浅香。

(熊澤は再び日記の筆を執る。しばらくして奥の襖をあけて浅香と深雪出づ。)

浅香。

(浅香は深雪の手をひきつゝ下手に座を占め、熊澤の顔を見てもどろく。)

熊澤。

お、お前様は……。

浅香。

お、乳母どのか。久しぶりでござつたな。

熊澤。

おまへ様にも御機嫌よろしう……。不思議なところでお目にかゝりました。

熊澤。

お身にも變ることはないか。(云ひつゝ深雪の顔をさしのぞく。)いや、變り果てたは深雪ど

熊澤。

の……兩眼ともに不自由のやうぢやな。

深雪。

はい一昨年からの煩ひで、生れもつかぬ不具者となりました。

熊澤。

それは定めて難儀であらう。この家の下女の話によれば、これより宇治へ戻らるゝといふ

深雪。

が、今までいづこにござつたな。

熊澤。

宇治でお目にかゝりました翌年に、江戸のさる方へ縁付きましてござりまする。

深雪。

お、先づはめでたいことであつたの。

熊澤。

お、先づはめでたいことであつたの。

浅香。

なんの、めでたいことがござりませう。その婿さまは嬢様と子供の時から許嫁の間柄で、いよく御祝言のことがきまると、わたくしもお供して江戸へ下り、はじめの二三年は御夫婦仲もむつまじく、結構なことぢやと喜んで居りますると、まあ、なんといふ御運の悪いことか。嬢様は一昨年しつねんの春から引きつゞくお眼めの煩わづらひで、いろ／＼に療治りやうぢの手を盡つしても、病やまひは漸次しぜんじに重おもるばかり……。

熊澤。

遂つひに兩眼りやうがんをうしなはれたか。江戸には然しかるべき醫者いしやも數かずあらうに、療治りやうぢがとどかぬとは残念ざんであつたな。

浅香。

まだそればかりではござりませぬ。お連合つれあひはよく／＼不實ふじつな人で、嬢様ぢやうさまがこのやうにおなりなされてからは、今いままでとは打うつて變かつて、碌ろく々に物ものも云いはず、見向みむきもせず……。

(浅香泣く。みゆきも泣く。)

熊澤。

目を失うしなふと云いふことが、已すでに一生いっしやうの不幸ふかうであるに、杖つゑとたのむ夫をととまでが左様ひだりさまな心根こころねでは、なほ／＼難儀なんぎなことであらう。お察さつし申ますぞ。

浅香。

不具かたはになつた女房にようぼうには、なほ／＼不憫ふびんを加くへるが夫をととのなさけでござりませうに、なにかに付けて邪魔じまにして、出でてゆけがしの仕向しむかた方を、傍そばで見みてゐるわたくしの口惜くやしさ。あまりの

熊澤。

ことに堪たへかねて、この始末しまつをお國許くにへ文通ぶんつういたしました處ところ、御兩親ごりやうしんも一方ひとかたならぬ御心配ごしんぱいで、委くしい掛合かけあひはあとのこと、兎ともかくも病氣保養びやうきほやうといふことにして、早はや々に戻もどつて來こいと迎むかひの人ひとまで遣よこされました。

深雪。

それゆゑ故郷こきやうへ戻もどるゝか。かさね／＼の不仕合ふしあひ、なんとも申まさうやうが無いなう。

浅香。

さきの世よにどのやうな罪つみを作つくつたか知りませぬが、眼めは潰つぶれ、夫をととには捨すてられ、よく／＼因果いんぐわな身みの上うへでござりまする。

熊澤。

(また泣く。)前の世まへは知らぬこと、この世よでは何なにひとつ越度こゑどのないお嬢様ぢやうさまがあたり御容貌ごぎやうぼうをも持ちながら、かうしたお身みの上うへにおなり遊あそばすとは、なんの報ひくいか何なんの罰ばちか、あんまり情なさけないではござりませぬか。

二人。

え。その恨うらみはもつともぢやが、いづこの人ひとにも恨うらみはある。うき世よの秋あきに泣なくはお身み達たちばかりでない。この熊澤くまざわも憂うれにも洩もれぬ身みの上うへぢや。

深雪。

して、お前まへさまは……。もう岡山おかやまにはおいでなされませぬか。

熊澤。

二年前ふたねん前に岡山おかやまを去さつて、今いままで京きやうに住すんで居ゐつたが、陽明學やうめいがくを唱となへた廉れんを以もつて、このたび

江戸表へよび寄せられ、あづまへ下る道中ぢや。いづれ出府の上は碌々の詮議もなく、どこかの大名にあづけられ、外出もならぬ押籠めで、暗い一生を送るのであらうよ。

深雪。

では、お前様は押籠めに……。

熊澤。

罪なうして見る配所の月ぢや。

浅香。

おまへ様ほどの大學者が、そのやうな厳しいお咎めにお逢ひなさるとは、思ひも付かぬこととござりますな。

熊澤。

いや、學者なればこそ咎めを受けたのぢや。學者がすこしく新しい説を唱へると、やれ異端の邪説のと四方八方から批難して、謀叛人かなんぞのやうに扱はるゝは、可笑しくもあれば腹も立つ。(さびしく笑ふ) わしも岡山藩に仕へて相當の身分にも取立てられたが、傍がうるさいので御免をねがひ、それから京都に假住居して、弟子どもに學問指南をしてゐると、その學問が悪いといふので、たうとう今度の始末となつた。わしも若いときから書を読んで、天下の政治經濟にもいさゝか眼をそゝいで居つたが、もう斯うなつては一切無駄で、胸中萬巻の書も骨と共にむなしく朽ち果つるのぢや。數なりませぬわたくし共でも、不運に逢へば泣きます。ましてお前様のやうな偉いお方

深雪。

熊澤。

が、さうした御運におなり遊ばしては、さぞ御無念でござりませう。お察し申し上げます。お身はわしの不運を悼み、わしはお身の不幸を悲しみ、たがひに身につまされて慰め合ふも、不思議の因縁といふのであらう。お身達に初めて出合うたのは、五年前の夏、宇治の螢狩の夜であつたなう。

深雪。

その時わたくしも乳母に連れられて、螢見物にまゐりまして、川端の茶店に休んでゐるところへ、おまへ様もあとからお出でなされました。

浅香。

四五年お目にかゝらぬうちに、お前様も大層お老けなされましたが、その頃はまだお壯い立派なお武士様でござりました。ましてこちらの嬢様は娘盛り花ざかり……。おもひ出すさへ涙の種でござります。

熊澤。

はじめは一通りの會釋から、話も漸次にうち解けて、たがひに名を訊き、所を訊き、深雪

深雪。

どのが持つたる扇に、歌など書いてたまはれと、わしに手づから渡された。その扇は今も持つてをりますれば、御覽に入れうと持参いたしました。

熊澤。

(深雪は帯にはさみたる扇を出す。熊澤は浅香の手より受取りてながめる。) おゝ、これぢや、これぢや。この扇に朝顔の繪を描いてあつたので、わしも「露の干ぬ

間……」と書いたのぢやが、今更おもへばわれ／＼もこの朝顔とおなじやうに、つれない日影に照されて、むなしく萎むといふ前表であつたか。なにを隠さうその砌りに、熊澤は初めて戀を知つた。半晌のわかれの本意なさに、あくる日ひとを遣はして、ひそかにお身の身許をさぐらせると、深雪どのは宇治に名高い茶師の娘、しかも許嫁の夫も定まつてあるといふ。かくては再び逢ふも詮なし、忘るゝにしかずと打過ぎたが、それもこれも露の干ぬ間のみじかい夢で、今や五年ぶりで相見れば、春やむかしの春ならで、たがひに變り果てた身の上ぢや。

深雪。

わたくしも御高名をうけたまはり、お慕はしう存じましたれど、とても及ばぬ戀とあきらめ、扇をかたみと身につけて、すごとくお別れ申しましたが、それから五年の月日のうちに、ひとの身の上も變れば變るもの。お前様は世にうづもれて、再び御出世の望みもないとやら……。

熊澤。

お身も夫にすてられて、泣いて故郷へ歸るといふ。

淺香。

おふたりながら揃ひも揃うて……。御運のわるい同士が寄り合ふとは、悲しいことでございます。

熊澤。

(三人は嘆息するのみ。熊澤は再び扇をうち眺める。)

この朝顔の唄を先刻歌うて居られたが、今一度聞かしてはくださらぬか。大井川を前にして、あき風さむき旅のやどりに、昔の戀人のしらべを聴くも、また一種の風流であらうよ。それはお安いことござりまする。つたない調べもお笑ひ草とは存じますれど……。

深雪。

是非に一曲所望いたすぞ。

淺香。

では、お琴をこれへ持参いたします。しばらくお待ちくださいませ。

深雪。

(淺香は起ちて奥に入る。蟲の聲きこゆ。)

その扇にかいて頂きましたる朝顔の唄を、京の檢校に節付けして貰ひまして、どうやらかうやう唄ひおぼえ弾き馴れて、こゝろの結ばれましたる節には、ひとり慰めて居りました。まして斯様な盲目の身となりましては月にも花にも樂みはござりませぬ。これから後は朝な夕な、十三の絲に思ひを寄せて、せめてもの心遣りといたしませう。

熊澤。

わしはいづこに落着くか知らぬが、春のあした、秋のゆふべには、宇治のあたりに琴ひく人ありと、遠くそのおもかげを忍ぶであらう。

(奥より淺香は琴と爪とを持ち出て出づ。)

浅香、これは宿から借りましたもので、碌な道具ではござりませぬ。

熊澤、おほかた替女などが用ひた品であらうよ。

深雪、わたくしも今は替女同様の身の上、人の門に立たぬがせめてもの仕合せでござりまする。

(琴爪をはめる。)

熊澤、場所といひ、人といひ、彼の唐土の白樂天が、潯陽江頭に琵琶を聴いたも、われとおなじ

思ひと察せらるゝぞ。

浅香、こよひお別れ申したら、またいつお目にかゝれませうやら。

熊澤、お身たちは西へ歸り、われは東へゆく。あすはたがひに分れくて、又逢ふことはおぼつ

かない。おそらく一生の別れであらう。いでや名残に一曲聴かうよ。

深雪、お恥かしうござりまする。

(深雪は琴にむかひて、かの朝顔の唄をひく。熊澤は無限の感をもつて聴く。浅香もかしら垂る。)

熊澤、おゝ、見事、見事。冴えたる爪音は一としほ身にしみて、江州司馬青衫濕、わしも覺えず

落涙いたした。

深雪、御賞美では恐れ入りまする。

(深雪は一禮して琴爪を外す。浅香は琴をかたづけける。この時、下のかたの庭づたひに、津山順之助忍び出す。)

順之助、先生……。

熊澤、順之助か。どうしてまゐつた。

順之助、番人どもの油断を窺ひ、繩をぬけてまゐりました。

熊澤、繩をぬけて参つたと……。

順之助、さあ、わたくしがお供いたしまする。夜にまぎれて、こゝをお立退きなされませ。

(熊澤は微笑みながら頭をふる。)

順之助、いえ、御心配なされますな。わたくしが屹と無事に御案内申しまする。

熊澤、身を全うするために逃げかくるゝは、二度の旗揚げなど心がくる者のすることぢや。蕃山

のごとく學問を以て世に立つものは、たとひ一旦逃げ負せても、再び世に出たら捕はる

る。かくてはなんの役にも立つまい。たゞ何事も天にまかせて、まつすぐに道を歩んでゆ

くのぢや。

順之助、では、どうあつても御承知はござりませぬか。

熊澤。わしがことよりも、おまへの身の上が大事故や。繩をぬけたを幸ひに一刻も早くこゝを落ちよ。

順之助。はつ。(躊躇す。)

熊澤。先刻も申した通り、おまへには老いたる母のあるを忘れたか。  
順之助。はつ。

(奥よりお山出づ。)

お仙。

もし、お女中様。あちらのお座敷のお連様が、あまり遅くならぬうちに、お迎ひに行つて来いとのことをごさりました。

浅香。

あい、あい。もうすぐに歸ります。

(お山は庭に立つたる順之助をすかしみる。)

お山。

や、お前はさつきの……。

(熊澤は俄に行燈をふき消す。)

熊澤。

行け、ゆけ。

(順之助は是非なく出てゆく。熊澤は縁端に出でて、透しながら見送る。暗きなかに蟲の聲。お山

はうろくしてゐる。)

お山。

どれ、唯今おあかりを持つてまわります。

(お山は探りながら奥に入る。)

深雪。

これ、乳母。もうお暇いたさうかの。

浅香。

はい。唯今あかりを持つてまわりますれば、しばらくお待ちくださりませ。

深雪。

おゝ、あかりが消えましたか。

熊澤。

なにさま眼あきは不自由なものぢや。我等もなまじひに學問して、世の中のことが眼に見ゆるに因つて、議論もする、意見ものべる。それが祟つて一生の禍となつた。はじめから無學の明旨に生れた方が、却つて幸福であつたかも知れぬ。

(庭の草むらに螢飛ぶ。)

熊澤。

おゝ、螢が飛ぶわ。

深雪。

え、螢が……。

熊澤。

過ぎし夏の夜が忍ばるゝ。

(熊澤は庭に降立ち、彼の朝顔の扇をひらいて、捕へたる螢を置き、その淡きひかりを眺める。)

熊澤。

秋のほたるは影も瘦せた。

(一同黯然。蟲の聲さびしくきこゆ。)

(III)

大井川のほとり。正面は河原の遠見にて、その裾には蛇籠をならべ、所々に柳の立木あり。あくる日の朝まだきにて、秋の天うららかに晴れたり。

(川越しの人足二人はやなぎの切株に腰をかけてある。水の音きこゆ。)

人足甲。

ゆうべの鹽梅ちやあどうかと思つたが、天氣はすつかり持直したな。

人足乙。

このあひだ中のやうに降り續いて、また川止めでも食つた日にやあ、こつちとらの商賣は揚つたりだ。

人足乙。

こつちとらばかりちやあねえ。のぼり下りの旅の人だつて、どのくらゐ助かるか知れやあしねえ。なんでも道中は天氣にかぎるよ。

(下の方より以前の抜けまゐりの小僧出づ。)

小僧。

をぢさん、お願いだ。

人足甲。

なんだ、拔参りか。

人足乙。

おほかた無錢で渡してくれろと云ふんだらう。

小僧。

おまゐりを済まして江戸へ歸るんだから、どうぞおねがひ申します。

人足甲。

手前、よく拜んで来たか。

小僧。

ついでにをぢさん達の無事息災も祈つて來ましたよ。

人足甲。

如才ねえ小僧だ。よし、よし、仕方がねえ。おれが負ぶつて川を越して遣らう。

小僧。

ありがたうござります。

人足甲。

さあ、しつかりと掴まるんだぜ。

小僧。

あい、あい。

(人足は肩車にて小僧を負ふへば、小僧は人足のあたまに取付く。)

人足甲。

え、眼を塞いぢやあ歩かれねえ。もうすこし上の方に掴まるんだ。

小僧。

なるたけ浅いところを頼みますよ。

人足甲。

生意氣なことを云ふな。ぐづく云ふと、川のまん中で振り落すぞ。

小僧。南無阿彌陀佛、なむ阿彌陀佛。

(小僧は人足に負はれて行く。)

人足乙。

この二三日はどうも上り下りが少ねえやうだ。たまに來りやあ抜けまゐりだ。仕様がねえな。もう少し川下の方へ行つてみようか。

(これも上のかたへ去る。熊澤蕃山は旅装束、笠を深うして道中馬にまたがり、馬士にひかせて出づ。中間一人は兩掛の荷をかつぎて従ふ。)

熊澤。

朝霧もやうやく晴れたな。

馬士。

けふもお日和でござりませう。

熊澤。

海道一の大井川、秋のあしたの景色はまた格別ぢやなう。

仲間。

まるで繪に描いたやうでござります。

熊澤。

(熊澤は柳の下に馬を立て、中間を見かへる。)

仲間。

川越しの人足どもは居らぬか。見てまゐれ。

(中間は上のかたへ急ぎゆく。熊澤は鞍より降り立ちて切株に腰をかける。)

馬士。

旦那様。五六日前までは川が止まつて居りましたが、丁度よいところへお出でなされました。

熊澤。

おゝ、左様であつたか。道中の川止めは難儀なものぢや。今から大井川を打越せば、駿府泊りは樂であらうな。

馬士。

はい、日の高いうちに駿府までお着きになります。駿府は繁昌でよい所でござります。

熊澤。

江戸から西では、小田原か駿府が最も繁昌であらうよ。

馬士。

さやうでござります。お前様ももう御承知でござりませうが、一昨年七月には駿府にえらい騒ぎがござりました。

熊澤。

由井正雪の謀叛かな。

馬士。

駿府にはわたくしの身寄りの者も居りますが、その話を聞きますと、大將の正雪をはじめ十何人といふ謀叛の徒黨が、梅屋といふ宿屋に泊つて居りますところを、大勢の討手が取り圍んで、一同のこらす切腹いたしたさうでござります。

熊澤。

彼の正雪といふ男は、岡山で一度逢うたことがある。どうも油断のならぬ人物と見たが、果してかやうな大事を仕出した。かれも才のために身をあやまつたなう。とは云ふものゝ、



かれは爲さんとすることを爲して仆れた。いたづらに志を懐いて、生きながら穴に葬らるゝ者よりも優しであらうか。

(熊澤は天を仰いで悵然、やがて上のかたを望み見る。)

熊澤。

家來はなにをいたして居るのか。あまりに遅いことぢやの。

馬士。

蓮臺をかつぐ人数が揃はぬのかも知れませぬ。埒の明かぬことでござります。

(この時、向ふにて「おうい、おうい」と男の呼ぶ聲す。馬士は見かへる。)

馬士。

や、向うから頻りに呼んで居りますが、もしやお連様ではござりませぬか。

熊澤。

いや、わしに連はない。

(二人は不審ながら向ふを見るうちに、深雪と淺香とを乗せたる道中駕籠走り出づ。淺香は駕籠のうちより聲をかける。)

淺香。

熊澤様、お待ちくださりませ。

熊澤。

おゝ、彼のふたりか。

(駕籠はやがて近づけば、淺香は降り立つ。)

淺香。

昨夜は失禮をいたしました。今朝もお暇乞ひをいたさうと存じて居りますうちに、お前様

熊澤。

はお早いお立、このまゝおわかれ申すのもなんとやらお名残り惜う思はれますので、せめて川端までお見送りにまゐりました。

それは御深切、かたじけない。

(淺香は駕籠より深雪を扶け出す。)

深雪。

熊澤様……。いよくお別れでござりまするな。

熊澤。

お身も堅固で暮されい。

深雪。

おまへ様もお身を御大切に……。

熊澤。

はじめて逢うたは宇治川の夏のゆふべ、再び逢うてわかるゝは大井川の秋の朝、水のながれと人の身と下世話に申すはこの事ぢや。昨夜も申した通り、お身達は西へ流るゝ水、われは東へながるゝ水、ひとつに落合ふ時節はあるまい。

深雪。

どこまでもお供申して行きたいやうにも存じますれど、それは逆もかなはぬこと、道中お氣をつけなされませ。

熊澤。

お身は猶さら不自由の身の上ぢや。乳母どの、介抱をおたのみ申すぞ。

淺香。

よう心得てをります。

(中間走り出す。)

仲間。蓮臺の人足どもは、あれに揃うて居ります。

熊澤。では、いよく渡らうか。深雪殿、浅香どの。おわかれ申す。

深雪。あ、もし……。

(深雪は探り寄りんとしてよろめき、傍の柳の立木にすがる。)

浅香。おあぶなうござります。

深雪。これ、乳母。この樹は……(探る。)柳ではないか。

浅香。はい。柳でござります。

深雪。こゝらに枝があるかや。

浅香。どうなさるのでござります。こゝによい枝が……。

(浅香は深雪の手を持ち添へて、やなぎの枝を折る。深雪は探りながらに枝を縮れる。)

熊澤様。お見送りのおしるしでござります。

誰が教へたか知らねども、柳をわがねて人を送るは、わかれを愁ふる唐土の習、詩にも歌

にもしばし見えた。わしも喜んで受けましますぞ。

熊澤。

(熊澤は枝に手をかけ、深雪も枝を持つたま、少時無言。熊澤はやがて柳をうけ取る。)

この柳を鞭にして、江戸まで恙なく下るでござらう。

(馬士はすゝみて馬の口を把る。熊澤は柳を持ちて鞍にまたがる。)

深雪。くどいやうではござりまするが……。

浅香。お前様にも御機嫌よろしう……。

熊澤。さらばでござるぞ。

(熊澤は馬をすゝめて去る。馬士も中間も従ひてゆく。みゆきは見えぬながらにあとを見返る。馬

の鈴の音、漸次に遠くなる。)

嬢様……。もう参らうではござりませぬか。

まだ川まではお出でなされぬと見えるな。

はい。

(鈴の音いよ／＼遠くなる。)

駕夫。さあ、お召しなされませ。

(駕籠を前に持ち出す。深雪は無言にて駕籠に寄りながら、鈴の音に耳をかたむく。水の聲静にき

幕

近松門左衛門

大正十一年三月作。

大正十一年十月。大阪南地演舞場に於て、黎明座初演。

その當時の役割——近松門左衛門（内海信）徳兵衛（司馬貞也）お初（玉木瑞枝）竹本座の手代（岸和夫）女中（本間久子）など。

登場人物——近松門左衛門。平野屋徳兵衛。天満屋お初。竹本座の手代。茶屋の女。

場所。泉州堺の茶屋。

（近松門左衛門、六十八歳。海を見晴らしたる小座敷にて酒をのんでゐる。享保五年十月十一日の夕。）

近松。あゝ、酔つた、酔つた。おれは下戸だが、それでも二杯や三杯の酒で、こんなに酔つたことはめづらしい。酔醒のせむか、いやに薄ら寒くなつて来た。

（お初と徳兵衛出づ。世にありし時と同じ姿なり。）

近松。どなたです。女中も気がきかない。もう暮れかゝつたら早く燭臺でも持つて来ればいゝのに……。薄暗くてよく判らない。どうぞこつちへお進みください。

二人。ごめん下さい。

近松門左衛門